

越後国瀬波郡絵図の基礎的研究 I

—戦国期瀬波郡の村町と軍役の負担体系—

The basic research I into Echigo-no-kuni Senamigun-ezu
—Charge system between “military work” and “village and town” at Senamigun in Sengoku period—

伊藤 正義・戸田さゆり

Masayoshi ITOH and Sayuri TODA

一. はじめに—郡絵図の本納高・縄ノ高の定説批判—

1. プロローグ

私は平成十九年（2007）四月に鶴見大学文化財学科教授に着任した。三十年三月に定年で退任する。小稿は、着任以来続けている「越後国の瀬波郡絵図研究」の大学院ゼミに於ける、これまでの研究成果の一部を取りまとめた研究レポートである。大学院ゼミと毎夏の現地視察旅行に参加して、私の気ままな妄想につき合ってくれた伊藤ゼミの院生諸子に感謝する。

旧稿では、「越後国の郡絵図」が「絵図と景観」の歴史史料として、史料批判されないままに利用されている学界の現状を批判して、縮尺率が部分ごとに変換する絵図の不正確性を指摘し、河川の漁業権の慣習法を無視して、川岸沿いに引かれた朱線領境の虚構性を論証した。「越後国の郡絵図」は、上杉景勝領国の美観と景勝・兼統の領国統治の完成度の高さを太閤秀吉に誇示するため作成された、正確さよりも迅速さと美観を優先して作成された、虚構の郡絵図であると史料批判した^(注1)。

「越後国の郡絵図」は、太閤秀吉の命を受けて作成されて、文禄五年（1596）に上杉景勝と執政の直江兼統から文禄四年検地の郷帳とともに太閤秀吉に献納された。清書の完成本は最低でも3セット作成されて、1セットは太閤秀吉・豊臣政権の文庫に納められ、1セットは太閤秀吉から後陽成天皇に献上されたが、献納本・献上本は散逸して残っていない^(注2)。山形県米沢市の上杉家に伝来した瀬波郡と頸城郡東半の2幅の郡絵図（図1）が、米沢市（上杉博物館）の所蔵で国の重要文化財に指定されている。以下、小稿では「瀬波郡絵図」、「頸城郡東絵図」、郡絵図と適宜略記する^(注3)。

「瀬波郡絵図」は縦243×横693 cm（図1）、「頸城郡絵図」は縦340×横580 cmのフルカラーの大型の郡絵図で見る者を圧倒する（法量は注3の米沢市上杉博物館『特別展上杉家伝来絵図』図録による）。私は、平成二十六年

（2014）四月十九日から六月八日に開催された、米沢市上杉博物館の特別展『上杉家伝来絵図』への論文寄稿と基調講演の機会を与えられて、開催期間中の五月十一・十二日に、じっくりと閲覧・観察する機会を得た。間近で原本に接した時の強烈な感動は今も心に残っている^(注4)。

小稿は、本誌掲載の別稿1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I —戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系—」の姉妹編に相当する。2幅の郡絵図は、景勝のもとで郷帳の複本とともに保管されていた、数枚の「太閤の郡絵図＝献納絵図」の控え図の内的一部分であるとされている。この学説は検討も証明もされないままに定説化している。しかし、別稿1での分析と検討の結果から、2幅の郡絵図は、献納用絵図の控え図の模本に、上杉景勝と直江兼統の軍事動員計画の数値を書き込んだ、図上シミュレーション用の絵図で、未完成の状態であること、実際には「頸城郡絵図」と「瀬波郡絵図」の2幅しか試作されなかったことを論証して定説を否定した^(注5)。

伊藤ゼミの卒業院生で文化財学科実習助手の戸田さゆりが、『越後国郡絵図』（東京大学出版会本）に記載の全数値のデータベースを作成した。小稿での割書の数値に関する分析結果は、二人で試行錯誤を繰り返しながら議論・検討した、私と戸田との共同研究の成果である。これまでの分析と検討の結果、「頸城郡東絵図」と「瀬波郡絵図」での村町の「軍役と諸役の負担体系」を最も良く表しているのが、「頸城郡東絵図」では1人当たり、「瀬波郡絵図」では1軒当たりの「縄ノ高」であることが確認されている。小稿での数値データの作表と分析は「縄ノ高」の数値を基準にする。村町の通し番号は東京大学出版会本の『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』が付した番号を踏襲する。

図表は戸田と伊藤が協議しながら共同で作成した。小稿は戸田と伊藤の連名で発表するが、論述の文責は伊藤が負うものとする。郡絵図の割書の数値データの



大川領

栗島

図1—「瀬波郡絵図」／山形市（上杉博物館）所蔵、以下同じ

研究史、数値データの分析、郡絵図の特徴と作成目的に付いては別稿1で詳論、詳述した。以下にその結論の要点を掲示して小稿の出発点とする。

2. 本納高・縄ノ高の定説批判

郡絵図の割書数値データの分析に付いては、下記の伊東多三郎学説^(注6)、小村弼学説^(注7)が定説化している。『新潟県史通史編2・中世』、『村上市史・通史編1』、『上越市史通史編・中世』にそのまま継承されており、批判や疑義が提示されることは一度も無かった^(注8)。つまり、私が小村弼学説を批判する小文を書くまでは、郡絵図の割書と数値に関する研究史は伊東学説と小村学説しか無かったのである^(注9)。伊東多三郎氏の定説・通説は以下の5点に要約される^(注10)。

(イ) 本納高は文禄四年（1595）の検地以前の定納高

である。

(ロ) 縄ノ高は文禄四年の検地の結果定まった石高である。

(ハ) 戸口は何問何人（時には何人男女と記す）と記され、公役を勤める民家（本百姓）の戸口である。

(ニ) 本図は検地の結果を絵図に仕立てたものである。……もっとも大規模に行われた文禄四年検地が、この絵図作成の資料を提供したであろう。

(ホ) 作成年時が判明しているのであるから、文禄検地図とは呼ばずに慶長二年越後国絵図という方がよしい→郡絵図慶長二年（1597）成立説。

伊東学説の根拠を示して、補強したのが小村弼氏の研究成果である。小村氏は「文禄四年検地」に関連する史料を詳細に分析検討して以下の学説を提示した^(注11)。



大国領

色部領

・小村学説 1

文禄三年に家臣から提出させた「知行定納覚」の定納高は、一定化された貢納の高という意味ではなく、一定の土地を年貢賦課の対象として米高を以て表現したもの＝近世の生産高・村高に相当する。

・小村学説 2

色部領では A 知行定納高と郡絵図の B 本納高とがおおむね一致することから、B 本納高は家臣から提出させた知行定納高に相当する。

・小村学説 3

「頸城郡東絵図」と「瀬波郡絵図」での差出しの B 本納高から検地の結果による家臣の知行高＝C 縄ノ高＝村高への増加率を算出すると、頸城郡 383 ヲ村町は 1.9 倍、瀬波郡 255 ヲ村町は 2.2 倍になる。この増加率は、C 縄ノ高が A 差出高・B

本納高を基に一定の比率を掛けて算出したのではなく、一筆ごとの生産力の把握を基礎に算出した結果である。

・小村学説 1 批判 — 小村氏が分析した信州高井郡夜交村（長野県下高井郡山ノ内町夜間瀬）の文禄三年十一月の夜交昌国の「被下置知行定納覚」では、①定納高が 477.789 石、②粃高が 796.319 石とある。「但此粃六合すり之積如此、寺社散夫（使）山手郷代免荒間分共二」と記されている。「六合すり之積」とは、粃摺りで 40% 程度減量することを指している。現在の機械で粃を玄米にすると量がおおよそ 30% 程度減少するので、40% 程度の減少率はおおむね妥当であろう。

小村氏は粃摺りの減量分の正確さに付いては分析していない。粃の高は村の「稲粃の収穫量」を、定納高は「粃摺りした玄米の量」を示している。定納高には



図2—旧瀬波郡の市町村と瀬波郡絵図の範囲／国土地理院 20 万分の 1 地形図、2001 年発行「村上」、2005 年発行「新潟」の一部を使用。



表 1—色部領の定納高・本納高・近世村高の比較 B = 郡絵図の本納高

村名	C 郡絵図の 縄ノ高	D 近世 の村高*	B + C = 文 禄期の村高	D - C の差額	D - (B + C) の差額
1. 宿田村	610. 654	1386※	1233	+776	+153 ○
2. 牛屋村	795. 762	1737※※	1323	+942	+414 ○
3. 桃河村	751. 611	700	1060	-51○	-360
6. 田中村	747. 474	900	1132	+153○	-232
7. 飯岡村	492. 72	760	797	+268	-37 ○
9. 八日市村	146. 966	400	237	+253	+163 ○
11. 山田村	306. 6	300	456	-6 ○	+156
12. 金屋村	116. 913	1300	428	+1183	+872 ○
13. 山口村	59. 68	100	76	+41	+24 ○
15. 栗島	118. 5	118. 5	229	+168	+57 ○
16. 酒町村	535	600	648	+65	-48 ○

* 石以下切り捨てで計算。番号は東大出版会本を踏襲。※ 1865 年旧高田領取調帳、
※※ 1704 年の村高。○ 正保国絵図などの近世の村高との差がより小さい方を示す。
注 7・11 参照。「正保国絵図」の村高は平凡社『新潟県の地名』より引用（注 16）。

社寺免分や荒廃地分も含まれており、満作の場合の村の生産高の上限を示している。糊摺りの減少分を積算しており、かなり精度の高い差出検地帳であり、小村学説 1 は成立する。

・小村学説 2 批判 — 小村氏が分析した越後国瀬波郡色部領の 20 カ村町のうちで、「A 知行定納高」と「B 郡絵図の本納高」との対比が可能な事例は 12 カ村で、対比不能が $8/20 = 40\%$ にもなる。A と B の一致率は $4/20 = 20\%$ にしかない。A が B よりも少ないのは金屋村の 1 カ村だけである。A が B よりも多い村町は $7/20 = 35\%$ である。A が B よりも多いことは、差出高よりも検地高の方が少ないことを意味し、文禄四年の実測検地は随分と緩やかな検地だったことになる。A と B の一致率は低いので、小村学説 2 は蓋然性が無い。

・小村学説 3 批判 — 16 カ村のうちの 7 カ村で D 近世の村高が郡絵図の C 縄ノ高の 2 倍以上にも増加している。「D - C」の落差 = 村高の上昇が余りにも大き過ぎることからすると、C 縄ノ高は文禄四年検地の村高ではない可能性が高くなり、小村学説 2・3 は蓋然性が低い。

表 1 は、小村氏が分析した色部領の 20 カ村町のうちから、全項目が比較出来る 11 カ村を抽出したものである。11 カ村のうちで 8 カ村の「郡絵図の B 本納高 + 郡絵図の C 縄ノ高」の数値の方が、郡絵図の「C 縄ノ高」よりも D 近世の村高に近似している。このことは、「B + C」の数値が D 近世の村高のベースであることを示唆している。つまり、「B 郡絵図の本納高 + C 郡絵図の縄ノ高」の合計高が、文禄四年の検地の結果で定まった村高に相当するのである。

小村学説 2・3 が不成立になると、鉄板の定説・伊東学説の（イ・ロ）には根拠がないと言うことになる。

小村学説 2・3 の蹉跌は、A と B の一致率を精査しなかったこと、C の縄ノ高と D の近世の村高を対比検討して裏付けを取らなかったことが原因である。

以上の定説の伊東多三郎学説、小村式学説批判を踏まえて、別稿 1 の「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」での検討結果から導き出された私見・伊藤正義説は以下ようになる^(注 12)。

私見・伊藤正義説

① 文禄四年の検地で確定した村高は「B 郡絵図の本納高 + C 郡絵図の縄ノ高」の合計高である。

② 文禄四年の村高のうちで、郡絵図の B 本納高は、村町から領主・給人に貢納する年貢高である。

③ 郡絵図の C 縄ノ高は、戦国大名・上杉権力と領主から課せられた軍役・諸役の負担に対する免除高で村町に給付された。

④ 在村して警固役を勤める D 型の場合は、縄ノ高は概算査定で全額免除給付された。

⑤ 割書で示された人数と C 縄ノ高は、軍役・諸役の負担の上限であり、免除する給付高は、出勤と訓練の実働日数と員数から算定した。

⑥ C 縄ノ高の上限まで軍役・諸役が課せられることは実際にはまれであり、算定した給付高と縄ノ高との差額は、領主・給人が収納して上杉権力の戦費として備蓄された。

⑦ 「C 縄ノ高 > B 本納高」は軍役・諸役負担の数字上の上限を示したもので、実際は「C 縄ノ高 = B 本納高」程度であったと推定される。

⑧ 現存の 2 幅の郡絵図は、太閤秀吉への献納郡絵図の双子ではあるが、割書の記載内容が異なっていた。献納郡絵図の割書には村町名と村高のみが記載されたと推定される。

⑨ 現存の郡絵図は、文禄五年までには現在の状態になっていたが未完成の状態だった。

二. 頸城郡東絵図の分析成果と小稿の課題

1. 頸城郡東絵図の分析結果から

別稿 1 の「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」の課題と分析検討の結果をまとめると以下ようになる^(注 13)。

〔課題 1〕「越後国の郡絵図」の全体像に関する論考 — 何枚の郡絵図が作られたのか？各郡絵図はど

のように接合するのか？

〔別稿 1 の結論 1〕→

- A. 「越後国の郡絵図」は、頸城郡と刈羽郡の郡境に屹立する、霊峰米山より北側（奥）の奥郡の刈羽・山東・古志・蒲原・瀬波郡の 5 郡は約 1 / 6, 700 の瀬波郡縮尺で、米山より南側（内）の頸城・魚沼郡の 2 郡は約 1 / 5, 200 の頸城郡縮尺で作成された。
- B. 「越後国の郡絵図」全体は、頸城・魚沼グループが 6 枚、奥郡グループが 4 枚で合計 10 枚になる。10 枚の郡絵図は縮尺率が同じグループ内でしか接合しないので、一体の国絵図にはなり得ない。
- C. 従ってこの郡絵図を「越後国郡絵図」と表記することは適切ではない。「越後国の郡絵図」と表記すべきである。

〔課題 2〕「頸城郡絵図」全体に於ける、村と町のグループ分けを示す朱線の意味と特質

〔別稿 1 の結論 2〕→

- D. 郡境と郷境の朱線に太さの違いは無い。年貢の収納、軍役・諸役の負担や実生活面では、広大な郡域よりも郷やその下の数ヵ村を細朱線で囲んだグループの方が、実質的な単位として機能していた。
- E. 郷境の太い朱線は、飯田川の群青色を消さないために、川の部分に朱線を重ね書きすることを避けている。従って太い朱線は厳密な意味での郷境を示しては無い。
- F. 細い朱線の場合も、朱線は川中を通らずに川岸沿いを通り、厳密な村町の境界を示しては無い。刈羽郡境と信越国境の朱線は完結しておらず、山の端の稜線が境界線であった。「頸城郡東絵図」の国境、郡境、郷境の朱線の表示は、正確さを欠いている。
- G. 細い朱線ラインで区切られた組は、軍勢の部隊編成の際の村町の組み合わせ＝ユニットを示すものであった。朱線ラインの中に 1 ユニットが収まれば良いので、村町の位置に歪みとズレがあってもかまわなかった。山間地では歪みが顕著で正確さを欠く。
- H. 村町や郷の厳密な領境を示すことが目的ではなかった。漁業権を示すために河川の真ん中に朱線を引く必要性は無かった。山間地では山の領有権や利用権を示す必要性も無かった。山の端の稜線をなぞって組の村町のおおまかな範囲を示せば事足りた。「太閤の郡絵図」には、国境・郡境・郷境を示す太い朱線のみが描かれており、軍役と諸役を負担する村町の組み合わせを示す細

い朱線は無かったかも知れない。

〔課題 3〕本納高・縄ノ高と村々の軍役負担の体系と特質に関する論考

〔別稿 1 の結論 3〕→

- I. 前節の私見・伊藤正義説の①～⑦。
- J. 村町の「上中下」の区分は、村の地味（地力）ではなく、各兵種の中での上下関係と指揮系統を示す記号である。「上中下」の区分の不記載率は、「頸城郡東絵図」は $21 / 380 = 5.5\%$ 、「瀬波郡絵図」が $65 / 253 = 25.7\%$ で、完了度の違いは明瞭であり、「頸城郡東絵図」の後に「瀬波郡絵図」の作成に着手したことを示している。「上中下」区分の未了は、両郡絵図が未完成の状態であったことの証左の 1 つである。
- K. 「男女の記載＝女性の諸役負担」は、必要に応じて郷・組・村と上杉権力との交渉・相対で負担する村町を決定した。「女性の諸役」は、春日山城・直江津越後府内、直峰城と部隊編成の拠点の町場での雑役だったと推定される。
- L. 「女性の諸役負担」が付けられている場合は、「上中下」の区分も決定されており、両者はリンクしていた。

〔課題 4〕「頸城郡絵図」の特質と作成目的

〔別稿 1 の結論 4〕→

- M. 「頸城郡四箇郷之絵図」は、豊臣政権・太閤秀吉権力への献納用の郡絵図と郷帳＝「公図と公簿」とは別種類の、軍事用の目的で試作された、特殊な用途の未完成の郡絵図である。軍事演習用の郡絵図は、「頸城郡東絵図」と「瀬波郡絵図」の 2 幅しか試作されず、未完成の状態で中断された。
- N. 細い朱線で囲まれた村町のグループは、負担する兵種の訓練を繰り返して、練度の高い部隊を編成した。重い軍役を負担する村には、上杉権力から高い縄ノ高の免除給付高が付与されていた。現存の「頸城郡東絵図」は、上杉権力が軍事編成する際に、各村町の組がどの兵種をどのような人数の組み合わせで負担して、軍費の給付高がどれくらいになるのかの軍事動員計画を、図上でシミュレーションするための、未完成の軍事演習用の絵図だった。
- O. 「文禄三年定納員数目録」と「頸城郡東絵図」の割書の人数と縄ノ高の関係に付いての分析結果から、割書の人数が予定動員人数の上限であること、「縄ノ高」は予定動員日数分をフル稼働した場合の免除給付高の上限であることを指摘した。
- P. 在村の兵士たちへの実際の免除給付高は、戦場

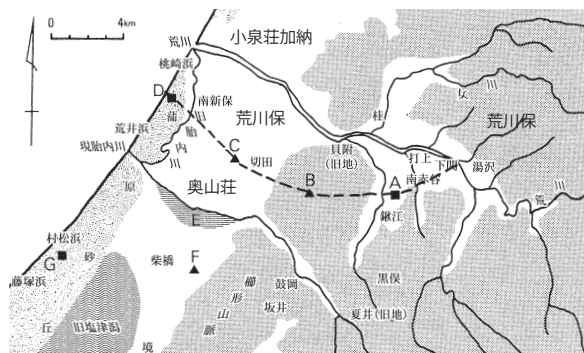


図3—奥山荘と荒川保の境界 (注17より加筆して引用)



図4—奥山荘と荒川保の境界／国土地理院20万分の1地形図、2001年発行「村上」の一部を使用。

に出勤した日数と訓練日数との「合計日数÷予定動員日数」の係数を「割書の縄ノ高」に掛けて算定したと推定した。「算定の縄ノ高分」が「割書の縄ノ高分」に達しない場合は、余剰分は戦国大名上杉氏と給人・領主の収入になり、その多くは戦費として上杉権力によってプールされた。

Q. 在村して警固役を勤めるD型の場合は、縄ノ高は概算査定で全額免除給付された。

R. 「頸城郡東絵図」では「縄ノ高>本納高」が通例である。軍役と諸役が「動員予定の人数と日数」の上限に達することは極めてまれであり、実際には「縄ノ高=本納高」程度であったと推定される。

2. 小稿の課題と「瀬波郡絵図」の成立年代

〔課題1〕と〔課題4〕に付いては解決済みなので、〔課題2〕と〔課題3〕を「瀬波郡絵図」に置き換えて、小稿の課題とする。別稿1との対比・対応のために、



図5—岩船潟付近の領境の朱線／「瀬波郡絵図」

課題の番号は別稿1の番号をそのまま継承する。

〔課題2〕「瀬波郡絵図」全体に於ける、村と町のグループ分けを示す朱線の意味と特質。

〔課題3〕本納高・縄ノ高と村町の軍役負担の体系と特質に関する論考。

「瀬波郡絵図」の成立年代 「瀬波郡絵図」には⑪組の153三面村の割書に「あら所へ文四ノ年罷出候」(史料a)の年紀記事がある(注14)。「頸城郡東絵図」と「瀬波郡絵図」では、同記事が年紀を示す唯一の史料である。「三面村は文禄四年(1595)に現在の場所に全村移転した(ので本納を免除する)」と言う文意で、三面村の村長の小池大炊之介が、文禄四年の早春の頃に村上城代の春日元忠に提出した三面村の「由緒書」の要約である。「由緒書」は文禄四年の検地の実施の前に提出された三面村の「差出し検地帳」の一部であった。郡絵図の割書は、「由緒書」に基づいて記載されたと推定されるので、「瀬波郡絵図」は「由緒書」提出の翌年の文禄五年には、現存の絵図の状態にまで作成が進捗していたことになる(注15)。

三. 瀬波郡絵図の範囲と朱線ライン

1. 太線の朱線ライン

「瀬波郡絵図」の範囲は、現在の新潟県村上市と岩船郡関川村・栗島浦村の旧岩船郡域に該当する。「瀬波郡」は、中世に使われた郡名で、古代と江戸時代以

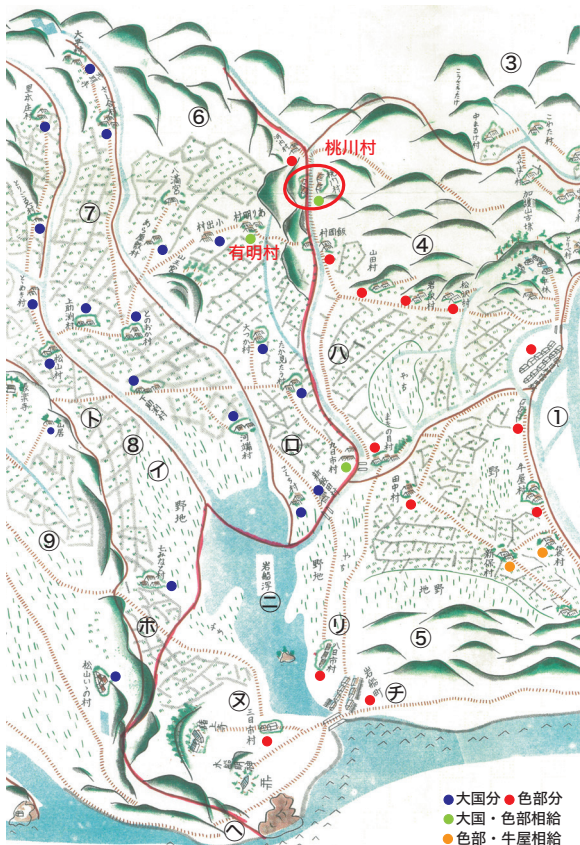


図6—色部領左端部（北端）の領主・給人（注19）

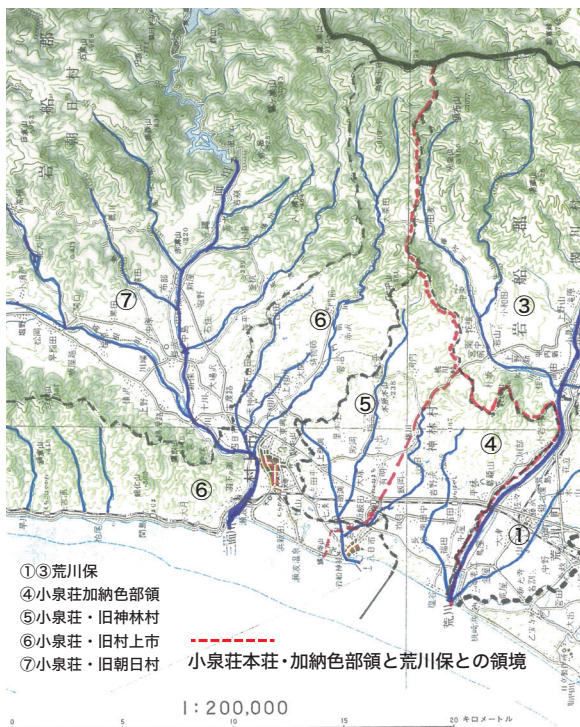


図7—「色部領・大國但馬領の領境と村上市・旧神林村の市村境」／国土地理院20万分の1地形図、2001年発行「村上」の一部を使用。

降は「岩船郡」と言われた（注16）。

郡絵図中の太い朱線は、図1の左端の羽越国境、右端の瀬波郡と蒲原郡の郡境、右半分左寄りの大國但馬領と色部領の領境、左半分左寄りの大川領と大國但馬領の領境の4箇所である。朱線は、太線も細線もいずれも色鮮やかであり、後述の宝永四年（1707）の米沢城内での補修の際に補描されたと推定される。

羽越国境 「頸城郡東絵図」と同様に、太い朱線は絵図の上端では閉じずに、奥山の稜線の中に消えている。図2は、2001・5年発行の国土地理院の20万分の1地形図「村上」・「新潟」の各一部に、「瀬波郡絵図」の範囲を示したものである。郡絵図は、図中央部の羽越国境部分は、最奥の三面村よりも奥の深山地帯を省略しており、国境ラインを正確に表示する意図は無い。郡絵図左端の越後国大川領（新潟県村上市府屋）と出羽国庄内（山形県鶴岡市温海）との国境は、大川と鼠ヶ関川との間の単純な稜線ラインであり、郡絵図ではほぼ正確に描かれている（図1・2）。

郡境と荘保境 郡絵図は、右上奥の関川村の右奥側、図2の南端の深山地帯の関川村大石集落以南の無人の山地を省略しているが、関川村域の右側へのふくらみは圧縮して表示している。図1右端の瀬波郡と蒲原郡の②郡境は、現在の村上市（旧岩船郡荒川町）と胎内市（旧北蒲原郡中条町）との市境・旧郡境とは一致していない。郡絵図右端の「からす川」の脇に「此のおかすちハ蒲原郡瀬波郡ノ境目也」（史料b）の注記がある（図1）。砂丘を横切る郡境の太い朱線は奥山荘と荒川保との荘保の領境を示している（図3）（注17）。荘保の領境は、旧胎内川の支流の鳥川沿いに東進して、山地の山裾で旧荒川町と旧黒川村の町村境に重なり、関川村と旧黒川村の町村境の途中で分岐して荒川に至る（図4）。

「瀬波郡絵図」の郡境は、平野部では奥山荘と荒川保の領境と一致するが、関川村域では荘保の領境は表示していない。荘保の領境は、荘園公領制の残滓であり、郡絵図の中では荒川の下流域では継承されていたが、関川村域では荘園公領制の枠組みは解体して消失していた。近世の郡境は、関川村域では南に、旧中条町域では北にそれぞれ移動して、旧荒川町・旧中条町・旧黒川村・関川村の町村境が郡境になり、生活・生業の実態と一致した郡境になった（図2・4）。

2. 色部領と大國但馬領との領境

図1の羽越国境、瀬波郡と蒲原郡の郡境、大川領と大國但馬領の領境の約4～5mmの太い朱線に比べて、大國但馬領と色部領の領境の朱線は約2～3mmでやや細い（注18）。図5の諸上寺付近には「是ハ大境のすじ」（史料c）、岩船潟の手前には「此大筋ハ大境ノすじ也」（史

料 d) の朱書きの注記があるが、岩船潟の中で分岐するイ・ロ・ハの 3 本の朱線のどれが領境の大筋なのかの区別が付かなくなっている (図 5)。

岩船潟周辺の中太の朱線 イ・ロ・ハの 3 本の朱線は、イ助淵川、ロ石川、ハ百川沿いに描かれている。図 6—「色部領左端部 (北端) の領主・給人」^(注 19) では、朱線ロの石川沿いの⑥「あり明村組」9 ヲ村のうちで、色部氏の領地が単独知行地が 94 川内村、色部氏と大国但馬の相給地が 86 九日市村・91 あり明村の合計 3 ヲ村であるのに対して、大国但馬の単独知行地は 6 ヲ村を占めている。

福原圭一氏は、図 6 の色部氏と大国氏の知行地の分布状況から、3 本の朱線のうちで右端 (南端) の朱線ハが「大境のすじ」であると指摘した^(注 20)。高橋一樹氏は「平野部での本庄と加納の境界は現在の神林村有明付近」であると指摘した^(注 21)。

両氏の見解に従えば、郡絵図の「大境」は小泉荘と半国衙領の加納との境界を継承していたことになるが、色部氏家臣の桃川氏の居館屋敷があり、名字の地である桃川村は、朱線ハで分断されることになり、この大境は極めて不自然で不合理な領境である。桃川村が分断されることの不合理に着目してはいない両氏の見解が正解だとは限らない (図 6)。

朱線ホは、海岸を起点にしてへ→ホ→イと進み、岩船潟沿いに達する。朱線トはホで分岐して山地の稜線上のトへ続く。図 5・6 のチ岩船町・リ八日市村・ヌ三日市村は、明治二十二年 (1889) に合併して岩船町になり、昭和二十九年 (1954) に村上市と合併して村上市の一部になった^(注 25)。図 7 の村上市と旧神林村境のうちで、村域の北西部に入り込む村上市域部分が旧岩船町に相当する。チ・リ・ヌは文禄期の郡絵図では色部領に属していた。

図 1・5・6 の⑥⑦⑧組は、イ助淵川、ロ石川、ハ百川が旧岩船潟に注ぐ水系であることからすると、農業用水系と生活圏から見れば、色部領の村町と一緒になるのが自然である。ホ→トの中太の朱線は近代の村上市町と岩船町・神納村との町村境になり、⑥⑦⑧組は旧神納村に所属した。朱線ハが「大境」だとすると、この領境は、生業や生活圏の実態とは乖離した、人為的な不自然な境界線であると言わざるを得ない。この不自然な領境の大境朱線の成因に付いては、七章 1 節「本庄繁長改易の影響」、「色部領の割譲」で詳論する。

福原氏は、図 5 の岩船潟の中のかすれて消えかかった朱線ニは、色部氏の岩船潟の領有権を否定することになるので抹消したと指摘した^(注 22)。別稿 1 で明らかにしたように、郡絵図の朱線は、部隊の編成と軍役・諸役の負担の組み合わせのユニットを示すものであり、厳密な領境を示したものではない。仮に朱線ニ

を太線に補描しても、岩船潟の右側も左側も色部領なので、領主権の帰属に変化は生じない。消えかかった朱線ニは、朱線が厳密な領境を示したものではなかったことの明証である^(注 23)。

消えかかった朱線ニは、後述の宝永四年 (1707) の米沢城内での補修の際に、岩船潟を縦断する朱線の意味が分からなかったので、補描の対象から除外したのである。図 1 の左端の大川領の海岸線沿いに描かれた細い朱線も、修履の担当者では意味が分からなかったために補描されていない (図 15)。消えかかった朱線ニは、宝永四年の発見時の劣化が進んでいた郡絵図の原状をとどめていると言う意味で貴重である。最も劣化・退色が進んだ朱線は、消えかかった朱線ニと同じような状態だったのであろう。

大境のすじと市村境 岩船潟の手前の朱書きの「此大筋ハ大境ノすじ也」(史料 d) はまぎれもなく朱線イの注記である。注記は朱線イのすぐ近くに二度も付けることは無いので、すぐ近くの諸上寺付近の朱書きの「是ハ大境のすじ」(史料 c) は朱線ホの注記と言うことになる。2 本の朱線に「大境」の注記が付くことは、絵図作成途中で混乱と錯誤が生じていたことを示す。

宝永四年に米沢城内の御小納戸で発見された 2 幅の郡絵図は、破損状態が著しくてバラバラになっていた^(注 24)。「頸城郡東絵図」の (裏貼紙 3) には「亥 九月十二日 岩瀬小右衛門 矢尾板忠右衛門 穴沢九兵衛 慶長式年十月中御検地高御絵図修履被仰付、竹中勘解由殿二而、但宝永四年七月廿五日、同月廿七日より相勤九月十日迄、同十二日ニ御中之間へ御絵図差上候、三人二而 (以下欠)」(史料 e) とある。

米沢城内での郡絵図の修履を担当した岩瀬・矢尾板・穴沢氏は、「何も加えず、何も消さず」に、「瀬波郡絵図」の発見時の状態をそのまま残して、確実と判断出来た朱線だけを補描した。瀬波郡絵図の作成者は、16 世紀末・文禄期の「瀬波郡絵図」の作成途中の段階では、色部領と大国但馬領との「大境のすじ」を図 5 のイロハニホトのどれにするのかを判断出来なかったもので、朱線を太さで区分することを保留し、とりあえず同じような太さで朱線を引いたのである。色部領と大国但馬領との大境が決定されていないことは、「瀬波郡絵図」が作成途次の未完成の絵図であることの確実な証拠の 1 つである。

3. 大川領と大国但馬領との領境

大川領と大国但馬領との領境の朱線は、葡萄川が開析した寒川谷の左側山地の稜線で、太くて鮮明である (図 1・2)。図 1 の上端の羽越国境付近には「此赤筋ハ大川領と本庄ノ郷境也」(史料 f) の注記がある。

図2で郡絵図の大川領と村上市の旧山北町域を比較すると、大川領は海岸部の南約半分、旧町域の約1/4程度が大国但馬領になっている。大国但馬領になっている旧町域の海岸部が、ほぼ「国名勝・笹川流れ」に相当する。大川領の詳細に付いては五章1節で詳細に分析して詳述する。

四. 瀬波郡絵図の細い朱線ライン

1. 瀬波郡の村組と範囲 (図1・2)

東京大学出版会本『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』は、細い朱線で区画された22のブロックと253の各村町に通し番号を付している。小稿では、東京大学出版会本の通し番号を踏襲して、小ブロックは①②③……、各村町は小文字の1・2・3……と表記する。別稿1での検証の結果から、この小ブロックは軍勢の部隊編成の組み合わせの単位＝ユニット＝村組であり、生活レベルでのユニットでもあった^(注26)。「瀬波郡絵図」では、細い朱線で囲まれた村組は、基本に河川と山の稜線のラインで区分されている。

旧荒川保と旧奥山荘北条の領域 ①組の1桃崎村～25土沢村は国衙領の荒川保の旧保域で、旧荒川町と旧中条町の一部に相当する。②組の26おしま村～51八口村は関川村の南半部でほぼ旧奥山荘の北条に相当する。関川村西端の関川沿いの南岸の一部は旧荒川保に含まれるが、16世紀末の郡絵図の段階では荘保境は消滅していた。③組の52たかた村～61なかまるけ村は、関川の北岸と関川の支流の女川の流域で、旧荒川保の一部に相当する。旧荒川保の①③組と旧奥山荘北条②組は1つの地域を形成している。①②③の地域を「A地域＝荒川関川地域」と仮称する。A地域は、色部氏・垂水氏・黒川氏・加治氏の単独知行地と、色部氏・土沢氏・直江氏などとの相給地が入り交じっている (図1・4)。

ている (図1・4)。

小泉荘加納の領域 ④組の62^{やすだ}宿田村～76桃川村は小泉荘加納の色部条に、⑤組の77塩や村～85三日市村は牛屋条に相当する。④⑤組は旧小泉荘加納の領域で旧神林村の南半に相当する。④⑤組の地域を「B地域＝加納地域」と仮称する。Bの加納地域が色部氏の本領である。B地域は大変に狭い。色部氏・土沢氏・加治氏の単独知行地と、色部氏と牛屋氏・加治氏の相給地が入り交じっている (図1・4)。

小泉荘本庄の領域 ⑥組の86九日市村～94川内村、⑦組の95河端村～100大平村、⑧組の101七みなど村～110山屋村、⑨組の111瀬波村～125黒谷村は、旧本庄氏領を継承した村上城を中心とする大国但馬領である。⑦組の6カ村、⑧組の10カ村、⑨組の15カ村は全て大国但馬の単独知行地である。海岸部の⑫組の156岩屋ヶ崎村～171かん河村の16カ村も全て大国但馬の単独知行地である。⑦⑧⑨組が小泉荘本庄の中心だったと推定される。⑥⑦⑧⑨⑫の地域を「C地域＝本庄地域」と仮称する。郡絵図のC地域は、図2の旧村上市域にほぼ相当するが、南端の岩船町は除外して、旧山北町域の南端の笹川流れ地区を加える。C地域は意外に狭いという印象を受ける (図1・7)。

小泉荘北方の領域 ⑩組の門前川流域の126さべり村～144入山田村、⑪組の三面川流域の145いしすミ村～155ほそ口村、⑭組の高根川沿いの185岩沢村～194高根村、⑮組の大須戸川流域の195塩町村～200大沢村、⑬組の大須戸川支流の塩野町川・高根川・三面川西岸の172上野村～184わさ田村は、村上城の北方に位置し、ほぼ旧朝日村域に相当する。⑩～⑮地域を「D地域＝本庄北方地域」と仮称する。D地域は大国氏と鮎川氏の単独知行地と相給地が入り交じっている (図1・7)。

小泉荘山北の領域 この地域は朝日山地の支脈の山地が日本海に接する地形である。集落は西流する小河川によって開析された谷部と海岸部に展開する。⑯組は、201あし谷村～214黒河俣大事村の勝木川 (郡絵図は立嶋川) 流域と海岸部の集落からなる。⑰組は朝日山地山麓の215中村～218南俣村の小ブロックである。⑱組の219ごいし村～234あら河村は、大川 (郡絵図は大川河) 南岸の海岸部から朝日山地の山間までのグループである。⑲組は、235ほうの木だい村～238山ご俣村で、大川と支流の中継川に挟まれた山間の小ブロックである。⑳組は、239とうの下村～243いかづち村は中継川と小

表2—色部領・大国領・大川領の本納高・縄ノ高・家数の集計

	本納高	縄ノ高	家数		本納高	縄ノ高	家数
A色部領	石	石	軒	D大国領	石	石	軒
①組	1 0 3 6	5 0 7	3 4 6	⑩組	1 4 1 5	2 5 4 9	1 7 6
②組	3 4 9	8 8	1 0 2	⑪組	1 9 6	5 1 2	6 4
③組	5 3	4 9 7	4 0	⑬組	7 7 2	2 5 1 3	1 3 9
小計	1 4 3 8	1 0 9 2	4 8 8	⑭組	7 3 0	1 0 6 2	1 2 2
B色部領				⑮組	5 0 1	1 2 0 5	9 8
④組	1 2 2 6	2 7 8 8	3 6 7	小計	3 6 1 4	7 8 4 1	5 9 9
⑤組	1 3 9 7	2 3 6 3	1 7 2	E大川領			
小計	2 6 2 3	5 1 5 1	5 3 9	⑯組	2 0 7	5 5 5	8 4
C大国領				⑰組	2 4 4	4 0 2	3 7
⑥組	1 9 3 8	1 8 5 2	6 9	⑱組	5 0 2	9 2 4	1 5 8
⑦組	1 1 0 6	1 5 7 4	6 4	⑲組	4 7	1 4 4	3 8
⑧組	2 8 3	5 7 8	2 8	⑳組	4 8	1 9 6	3 6
⑨組	5 0 0	1 0 1 2	4 0 2	㉑組	2 4 1	2 6 3	1 2 5
⑫組	3 3 9	5 6 0	1 7 3	小計	1 2 8 9	2 4 8 4	4 7 8
小計	4 1 6 6	5 5 7 6	7 3 6	粟島※	1 1 1	1 8 1	□1 7
全平均※	5 2	8 8	1 1. 3	総合計	1 3 2 4 1	2 2 3 2 5	2 8 5 6

※粟島は色部領。253カ村町で割った。欠字は5石に比定した。

その他は推定近似値を入れて集計した。縄ノ高/本納高→1.69倍

俣川に挟まれた山間の小ブロックである。⑫組の244岩崎村～252原み村は、大川と小俣川の北岸のグループで羽越国境に接する。⑬～⑮の地域を「E地域＝山北地域」と仮称する。E地域は大川氏の単独知行地である（図1・2）。

栗島 253 栗島は、周囲約23キロメートル、面積約10キロ平方メートルの日本海に浮かぶサツマイモの形をした離島で色部領に属した（図1）。岩船港から航路距離は約35キロメートルである。本土側に内浦、外海側に釜谷の2つの集落がある。西側の釜谷集落は東側の本土からは見えないが、郡絵図は釜谷集落を反転させて内浦集落の手前に配置している。この描法は、郡絵図では集落の数を多く見せるためと、海の霊場・栗島の内でも西方浄土への入り口と考えられていた、釜谷集落とその周辺的美観を表示するための措置である（注27）。

2. 「瀬波郡絵図」割書の記載項目と「上中下」の区分

「頸城郡東絵図」では、割書に「①村名→②上中下の区分／→③領主・給人名／→④本納高／→⑤縄ノ高／→⑥家数→⑦人数→（⑧男女）」の8項目の情報が記載されている。②上中下の区分は未定の場合は記載しなかった。⑧女性の諸役負担は、必要な村町を抽出して、村町と組・郷と上杉権力との間での交渉によって決定されたので、全ての村町に女性の諸役負担が付けられていた訳ではない。⑧女性の諸役負担は、割書の最末尾に追記される予定の情報であった。

「瀬波郡絵図」の割書は「①村名→②上中下の区分／→③領主・給人名／→④本納高／→⑤縄ノ高／→⑥家数」で⑦⑧の情報が無い。⑦の人数と⑧の女性の諸役負担は、各家・村町・組と上杉権力との間での交渉と調整で決定するので、数値の確定にはかなりの時間を要したと推定される。「瀬波郡絵図」は、⑦⑧の情報を欠いており、「頸城郡東絵図」の作成開始

よりも後発で、確定作業が遅れていたことを明示する（注28）。

「上中下」の記載率 「頸城郡東絵図」では、「上中下」の区分の記載は359／380で、記載率は約94%である。未記載の村町は郡絵図中に平均的に点在しており、偏在する傾向は無い。「瀬波郡絵図」では、「上中下」の区分の記載は102／253、記載率は約40%で、「頸城郡東絵図」に比べると極端に記載率が低下する。「上中下」の区分は、村組内での上区分のリーダーの村と、兵種の中での「上→中→下」の軍事指揮系統を示すことが別稿1で確認されているが、「瀬波郡絵図」の記載率の低さは、瀬波郡ではリーダーの村と指揮系統の確定作業が着手されたばかりで、多くの村組では未確定の状態であったことを明示している。この「瀬波郡絵図」での傾向も、同絵図が「頸城郡東絵図」の作成開始よりも後発であったことの明証の1つである（注29）。

最も記載率が低いのは色部領・A荒川関川地域の①組の旧荒川保域と大国領・D本庄北方地域の⑬組の8%である。A～Eの地域別に記載率を見ると、Aの荒川関川地域では③組100%→②組72%→①組8%と逡減する。A地域では③組から上中下区分の作業が着手されたこと、②組はほぼ完了に近づいていたこと、①組は着手直後であったことを示している。Bの色部領・加納地域では全体に記載率が低く、④⑤組も作業の途中であったことを示している。色部領の253栗島は、周囲約23キロメートル、面積約10キロ平方メートルの離島である。集落は、本土側の内浦と外海側の釜谷の2つしかないのに、「上中下」の区分は未定で記載されていない。

大国領・Cの本庄地区では、村上城のある⑨組が20%、海岸部の⑫組が13%と低率である。このことは、村上城主の大国但馬と城代の春日元忠の膝下の地域では、「上中下」を確定する作業が開始されたばかりであったことを示している（注30）。大国領・Dの本庄北方地域では、⑭組と⑮組が100%完了であるのに対し

て、⑬組が8%、⑪組が9%と極端に乖離しており、⑬組と⑪組は作業に着手したばかりであったことを示している。

大川領・Eの山北地区では、⑮⑯⑰組が100%完了である。⑱組は88%で完了間近である。⑲組は14%、⑳組は20%、㉑組は30%で、いずれも作業の着手直後か作業途中の段階であった。

上中下の偏差の意味 各地域ごとの村組別の「上中下の記載率」

表3—瀬波郡絵図の「上中下」の区分記載の頻度 ▼記載率が20%以下の極端に低い組

地域・領主	A色部領			B色部領		C大国領		
村町の組	①組▼	②組	③組	④組▼	⑤組	⑥組	⑦組	⑧組
未記載率	2／25	18／25	11／11	2／15	2／9	4／9	2／6	5／10
%	8	72	100	13	22	44	33	50
地域・領主	C大国領		D大国領		D大国領		E大川領	
村町の組	⑨組	⑩組	⑪組▼	⑫組▼	⑬組▼	⑭組	⑮組	⑯組▼
未記載率	3／15	4／19	1／11	2／16	1／13	10／10	6／6	2／14
%	20	21	9	13	8	100	100	14
地域・領主	E大川領				B色部領			
村町の組	⑰組	⑱組▼	⑲組	⑳組▼	㉑組	栗島	全体の頻度・%	
未記載率	4／4	14／16	4／4	1／5	3／10	0／1	102／253	
%	100	88	100	20	30	0	40%	

のバラツキ具合を見ると、リーダーの村と軍事指揮系統の確定作業は一斉に開始された訳ではないことが明らかである。リーダーを確定するために調査と調整に多くの時間と手間を要したので、「上中下」の記載率が低いのであろう。本庄北方地区の⑪組でのリーダーの村の確定は、いしすみ村とあらや村との間で錯綜して困難を極めた(図8・9)^(注31)。

上杉景勝の執政・直江兼続と兼続の実弟の村上城主・大国但馬守実頼、村上城代の春日元忠は、リーダーの村を決めやすい村町組から「上中下」の区分を開始してサンプルを示し、順次近隣の村町組に着手する手順・方法を採用していたのである。村上城主の大国但馬守と城代・春日元忠の膝下のC本庄地区では、⑨組が20%、⑫組が13%と低率である。記載率の高低差は、上記の手法手順と「瀬波郡絵図」が「頸城郡東絵図」の作成よりも後発であったことを反映しているに過ぎず、「上中下の記載率の高低差」が、領主による在地の掌握度と支配の完成度の差を示している訳ではない。

3. 「瀬波郡絵図」の町場

表4は「瀬波郡絵図」の町場の一覧表である。町場は24ヶ所確認出来るが、明確に「町」と表記されているのは6ヶ所に過ぎない。18ヶ所は「村」表記であるが、街村の形態から町場と判断した。?の2ヶ所は、街村の形態が不明瞭であるが、描かれている家の数が多いことと、街道との関係から町場と判断した。

「頸城郡東絵図」の町場は13ヶ所で、家数は388軒である。村町の総数は380なので、町場の比率は $13/380 = 3.4\%$ になる。「瀬波郡絵図」の町場は24ヶ所で、家数は974軒である。村町の総数は253なので、町場の比率は $24/253 = 9.4\%$ になり、「頸城郡東絵図」よりも町場の比率が高い^(注32)。「頸城郡東絵図」は、頸城郡全体の $1/3$ の範囲なので、他の $2/3$ の範囲と合わせれば、頸城郡の町場の数は優に30ヶ所を越えて瀬波郡よりも多くなるだろう。

「頸城郡東絵図」の津有郷の8真砂新町の割書には「真砂新町 上 是ハ御休ノ由申 石米無 家八拾壹間」(史料g)とある。「石米無」は本納高が無いと言う意味で、その理由が「是ハ御休ノ由申」である。「真砂新町」は、新田開発の歟下年期と同様に、新規町立てからの数力年の間は、年貢と諸役が免除されていたのである。真砂新町には、本納高と縄ノ高が記されていないのに、81軒の家数が記載されている。このことは、真砂新町が軍勢の部隊編成の中心地だったことと、実際には同町は軍勢の部隊編成時には有償で諸役・雑役を勤めていたことを示している。上杉権力が、現地で部隊を迅速に、効率的に編成するために、真砂新



図8—村上市石住集落(旧朝日村) / Google マップより引用。



図9—村上市新屋集落(旧朝日村) / Google マップより引用。

町を新規に町立てしたのである^(注33)。

城下町の形成途次の「村上町」と「中間町」は、家数は記載するが本納高と縄ノ高の記載を欠いている。両町は、頸城郡の真砂新町と同様に、軍勢の部隊編成時には有償で諸役・雑役を勤めたが、新規の城下町への優遇策として年貢と諸役が免除されていたことを示している。色部領の岩船町には家数が無く、「地子」とだけ記載されている。岩船町は、在地の霊場で名刹の諸上寺と岩船貴船神社の門前町で、自由都市の性格が濃厚な港湾交易都市である。軍役と諸役は負担せずに高額な「地子銭」を領主の色部氏に貢納していた^(注34)。

上杉権力は、新規の在町と在来の在町と組み合わせ、物流拠点の機能を強化して、郷と組ごとの部隊編成をより迅速に効率的に行うシステムを構築しようとした。景勝と兼続の経済・都市政策は、在町を増やして在町を中心に商工業と物流を振興して、在町のネットワークを構築することを目指した。上杉権力は、兵種と機能を区分して分担する、在村の兵士集団を機能的に部隊編成したので、武士と兵士たちを城下町に集住させる豊臣政権的な政策はとらなかったのである^(注35)。この上杉権力の政策が、「瀬波郡絵図」でも

表 4—瀬波郡絵図の町場の集計 ■部隊編成の中心地 ①②③は組の番号→図 1 に対応

領主と地区	町 場	家 数 軒	縄ノ高石 a	村高石 (a+本納高)
色部領A・ 荒川関川地区	1. ①桃崎村	24	10. 297	同左。本納なく候
	2. ②せきしもまち	21	99. 514	135. 929
	3. ②せきかわぐち村	21	139. 336	168. 836
小 計	3ヶ所	66	249. 147	304. 765
色部領B・ 地区加納	4. ④宿田村・平林	161	610. 6543	1233. 1793
	5. ④まきの目村	28	394. 093	656. 74
	6. ⑤塩や村	18	61. 797	61. 807
	7. ⑤岩船町	—	—	地子
小 計	4ヶ所	207余	1066余	1951余
大川領C・ 本庄地区	8. ⑥九日村	13	41□. □□	700余
	9. ⑨瀬波村	78	46. 2	57. 855
	10. ⑨しり引村	29	353. 7585	553. 5225
	11. ⑨村上町	253	—	—
	12. ⑨中間町	1	—	—
小 計	5ヶ所	374	815石以上	1300石以上
大川鮎川領D ・本庄北方地区	13. ⑩さべり村	23	324. 338	492. 9255
	14. ⑭高根村?	28	172. 2073	8. 02
	15. ⑮塩野町	26	484	655. 164
	16. ⑮ぶどうが谷村	15	71. 78	118. 96
小 計	4ヶ所	92	1052. 3253	1325. 069
大川領E・ 山北地区	17. ⑯黒河俣大事村	42	351. 1947	526. 6097
	18. ⑰中村	29	341. 0846	564. 6746
	19. ⑱近辺村	67	154. 389	258. 924
	20. ⑱大川の町	—	—	—
	21. ⑱大谷沢村?	23	53. 7963	85. 5813
	22. ⑲入う谷村	18	52. 1	87. 46
	23. ⑳中次村	□27*	58. 1003	□5. 5※
	24. ㉑小俣村	29	63. 42	105. 385
小 計	8ヶ所	235	1015. 9846	1634. 1076
郡絵図不記載	1ヶ所	大川鮎川領D・猿沢村		
総合計	24ヶ所	974軒	4198. 4569	6514. 9416

?は街村の形が不明瞭。*欠字は仮に 20 軒を入れて集計。※欠字は仮に 5 石を入れて集計。

確認出来るのかどうかについて、各領・各村町組の分析の中で検証する。

「瀬波郡絵図」の町場で特異的なのは、大川領E・山北地区の町場が8ヶ所と突出していることである。山北地区の村町数は55なので、町場の比率は $8/55 = 14.5\%$ にもなる。戦国時代の羽州・越後街道は、「①温海川(山形県鶴岡市・旧温海町)→②中継(新潟県村上市・旧山北町)→③猿沢(村上市・旧朝日村)→④岩船(村上市)」と大川領の山間地を通っていた(図11)^(注36)。太閤秀吉は、天正十九年(1591)と推定される「豊臣秀吉朱印状」で、津軽為信に対して前記のルート^(注37)の宿泊・宿次ぎで、津軽鷹を京都への献上することを命じている。

山北地区の山間地では險路

が続くので、羽州街道沿いに短い間隔で町場が成立したのである。各町場は、小河川沿いの東西方向の道を通って運ばれてくる日本海^(注38)の海産物と塩の交易路と羽州街道との結節点にもなっていた(図1・2・11)。③猿沢は、現在の集落の短冊地割りの街村形態と、津軽鷹献上の宿次ぎの指示から見て町場と判断されるが、「瀬波郡絵図」では町場ふうには描かれてはいない。郡絵図では実際の在町・町場を全て表示しているとは限らないことになる(図12・13)。

大川領E・山北地区以外^(注39)のA・B・C・D地区では、各地区ごとに3～5ヶ所の町場が散在している。⑨組の「瀬波村」は、羽州街道の三面川の渡河点・渡し場の町場であった(図21)。⑤組の「塩や村」と①組の「桃崎村」も、羽州街道の荒川の渡河点・渡し場の町場であった(図24)。荒川河口の両村は、日本海の海上交通・交易と荒川の河川交通と米沢街道との結節点で、内陸部への海産物と塩の物流交易の起点の町場でもあった^(注38)。特徴的な町場に付いては、A～E地区の分析の中で再論、詳述する。

4. 「瀬波郡絵図」の軍役・諸役の負担

別稿1での「頸城郡東絵図」の詳細な分析の結果から、頸城郡では表5に掲示したように、1人当たりの縄ノ高＝軍役負担に対する免除給付高を基準にして、



図 10—近辺村・大川の町・高岩寺・藤懸り館・大谷沢村／「瀬波郡絵図」

村町ごとに負担する軍役・諸役の内容と兵種が定められていたことが解明されている。「瀬波郡絵図」では、軍役・諸役を負担する家数までは確定されていたが、村町ごとの人数と女性の諸役負担に関する細部の調整が未了であったために、割書に人数と女性の諸役奉仕の有無に関する記載が無い。「瀬波郡絵図」では、頸城郡の区分の基準に準拠して、頸城郡の1人当たりの縄ノ高の約2倍程度が、瀬波郡での1軒当たりの縄ノ高に相当すると想定して兵種と諸役を区分した^(注39)。

表6は、表5の区分基準に基づいて、「瀬波郡絵図」中の分類が可能な235ヵ村町を区分した集計である。戦闘専門集団と軍事物資・兵糧の輸送機能とで区分すると、戦闘専門型49%＞輸送型27%になる。戦闘型と在村型とで区分すると、戦闘型63.5%＞在村型24%になる。表7の「頸城郡東絵図」の軍役負担の集計と比較すると、戦闘型の区分は、頸城郡が55%、瀬波郡が63.5%と近似しているが、瀬波郡の方がやや比率が高い。郡絵図は、軍事編成と諸役の負担体系、軍事動員計画のシミュレーション用の絵図なので、当然

とえば当然であるが、戦闘型の村町を中心に作成されたことを明示している。

「頸城郡東絵図」と「瀬波郡絵図」とで大きく異なっているのは、輸送能力の差である。「頸城郡東絵図」では軍事物資・兵糧の輸送を担当する人数が63%と高率なのに対して、「瀬波郡絵図」では家数が27%程度に過ぎない。この違いは、頸城郡の編成部隊は長距離の遠征が可能であることを、それに対して瀬波郡の部隊編成は遠征を予定しないことを示している。頸城郡での軍事部隊編成は「遠征・外征型」、瀬波郡は「近距離・郷土防衛型」と言い換えることが出来る。在村型の比率が瀬波郡24%＞頸城郡12%であることも、瀬波郡の軍事体制と部隊編成の基本が、「近距離・郷土防衛型」であったことを明示している。

五. 大川領・大国領・色部領の村と町

本章では、大川領、大国領、色部領の村と町について分析する。大川領は大川氏の単独知行、大国領は大国但馬と鮎川氏の単独知行地と相給地が入り交じっている。色部領は、色部氏、大国氏、土沢氏、垂水氏、黒川氏、加治氏、御料所などの給地が複雑に混在して



図11—瀬波郡絵図の町場と旧羽州街道／平凡社『新潟県の地名』(注29)。番号の数字は表4と対応。



図12—「瀬波郡絵図」の猿沢村▲／「瀬波郡絵図」



図13—村上市猿沢集落(旧朝日村)／Google マップより引用。右が北。

いる。最初は大川氏の単独知行で領主権が単一な大川領から分析して、順次、領主権が二者の大国領、領主権が多数の色部領へと分析を進める。

1. 大川領の村町と郡絵図

越後国瀬波郡で最北の大川領は、細い朱線で区画された村組が6つ、村町が55ヶ所、軍役と諸役を負担する家数が478軒である。大川領の細い朱線は、日本海に向かって西流する小河川沿いに引かれている。大川領の村組は小河川が開析した細長い谷によって細分されている。ほぼ旧山北町域と一致するが、南西部の笹川流れ一帯は大国領になっている（図1・2）。

大川氏の出自は不明である。長男の家系が大川氏、次男の家系が立島氏となった。文献上で最初に確認されるのは建武元年（1334）からで、本庄氏とは婚姻関係で結ばれていたが同族ではない^{（注40）}。郡絵図の6つの村組、55ヶ所の村町は全て大川氏の単独知行地である^{（注41）}。16世紀末の文禄期には、庶子家の立島氏の知行と領主権は本宗家の大川氏に包摂されていた。

大川領の朱線と村組と町場 「瀬波郡絵図」記載の町場は24ヶ所あり、そのうちで大川領の町場は8ヶ所を数え（8／24＝）、1／3を占めている。大川領の8ヶ所のうちで、⑩・⑪・⑫・⑬・⑭組各1ヶ所の計5ヶ所は、山間地を通る羽州街道沿いの町場である。山間地に町場が多いことが大川領の特徴の1つである（図11）。

大川氏の居館・藤懸館があり、16ヶ村町で最大規模の村組の⑮「大川町・下大蔵組」には羽州街道ルー

トの町場がない（図1・2・11）。⑮組の大川町と内陸の中間に中継点の町場21の大谷沢村がある。⑮組では、大川上流の山間地の村々は、大谷沢村で、勝木川（立嶋川）の谷沿いの村々は、大川之町・近辺村で軍勢の部隊編成をしたのであろう。領主の大川氏の膝下の⑮「大川町・下大蔵組」内の羽州街道沿いに町場がないことは、羽州街道沿いで町立てが、領主の大川氏の主導によるものではなかったことを示している（図11）。

大川町は、日本海の高産物と塩を内陸部に送り出す起点の町場ではあるが、大川領全体に於ける求心力は希薄だった。大川領は、全体が山間地の羽州街道沿いの町場・山村のグループと海岸部に分かれる、二重構造だったのである。

大川之町 大川領で最大の村組は、大川氏の居館の藤懸館があり、16ヶ村町、153軒からなる⑮「大川町・下大蔵組」である。中心の町場の「大川之町」の家数は不記載なので、実態はもっと規模が大きい（図10）。「瀬波郡絵図」全体では町場は24ヶ所確認出来るが、家数と本納高・縄ノ高の3項目の記載が無いのは大川之町だけである（表4）。大川之町は、郡絵図では大川氏の居城・大川城と藤懸館に近接するかのように描かれているが、実際には藤懸館跡と大川町の東端とは200メートル以上も離れている（図10・14）。

郡絵図に大きく描かれた高岩寺は領主の大川氏の菩提寺である（図10）。寺伝によれば、同寺は天文二十一年（1552）に領主の大川三郎二郎・長秀が、村上市門前の曹洞宗の名刹大寺の耕雲寺から三心宗伊禪師を招いて創建した^{（注42）}。慶長三年（1598）の上杉

景勝の会津移封に伴い、同寺は大川長秀とともに会津領に移転して、旧山北町府屋に残った高岩寺は一時無住になり、後に再興したと言う^{（注43）}。

藤懸館と高岩寺と町場が離れていることから、在町の成立への領主の大川氏の関与は希薄だったと推定さ

表5—頸城郡東絵図と瀬波郡絵図の軍役・兵種の区分の対比

村のタイプ	頸城郡東絵図 1人当たりの縄ノ高・免除高	頸城郡東絵図 軍役・諸役の負担内容	瀬波郡絵図 1軒当たりの縄ノ高
A型	8石以上	騎馬兵士＋徒歩の従兵	15石以上
AB型※	8石未満～5石以上※	騎馬兵士＋足軽部隊	—
B型	8石未満～5石以上	徒兵・足軽部隊	10石以上
BC型	5石未満～3石以上	足軽＋小荷駄隊	5石以上
C型	3石未満～1石以上	非戦闘員の小荷駄隊	5石～3石
D型	1石未満	在村で軍役・諸役を負担する	3石未満・国境警備役
F型	0・1石以下	負担する諸役の内容不明	2石未満・塩焼きの村

※1人当たりの縄ノ高はBだが、村の縄ノ高と人数がAよりも多い。AとBの中間型。

太線＝騎馬兵士の有無の区分。破波線＝戦闘型と非戦闘型の区分

表6—「瀬波郡絵図」のタイプ別の村町集計

	村数	家数	家数比%	類型集計①	類型集計②
A型の内訳	69	585	27.2	戦闘専門型	戦闘型
B型の内訳	34	709	13.4	49%	
BC型の内訳	42	374	16.6	輸送型	63.5%
C型の内訳	26	343	10.3	27%	13.1%
D型の内訳	38	534	15		在村型
F型の内訳	5	93	3.5		2.4%
タイプ不明	39	347	13.2		
合計	253	2626	※		

中太線＝戦闘タイプの村町。中太点線＝在村軍役・諸役の村町。

※家数÷2870＝%

表7—「頸城郡東絵図」の軍役負担の集計

	村の数	家の数	人数	人数比%	類型集計①	類型集計②
A型の内訳	31	226	773	6.9	戦闘専門型	戦闘型
AB型の内訳	2	12	43	0.4		
B型の内訳	65	552	1805	16.2	25%	
BC型の内訳	120	966	3557	31.9	輸送型	55%
C型の内訳	118	1049	3629	32.8	63%	32%
D型の内訳	34	209	716	6.4		在村型
F型の内訳	16	185	638	5.7		12.3%
タイプ不明	26					
合計	412	3199	11161			

※太線＝騎馬兵士の有無の区分。太点線＝戦闘型と非戦闘型の区分
二重波線＝在村・非部隊編成。

表 8—大川領のタイプ別の村町集計

	村数	家数	家数比 %	類型集計①	類型集計②
A型の内訳	7	23	4.6	戦闘専門型	戦闘型
B型の内訳	2	40	8	12.6%	
B C型の内訳	8	84	16.8	輸送型	28.4%
C型の内訳	8	48	9.4	26.4	※9.4
D型の内訳	17	263	52.6		在村型
					52.6
タイプ不明	11	42	8.4		
合 計	53	500	※※		

※非戦闘型。中太破線＝在村軍役・諸役の村町。※※家数÷500＝%

大川領表⑩—立嶋組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	1	4	4.5
B C型の内訳	2	48	54.5
C型の内訳	3	11	12.5
D型の内訳	4	25	28.4
タイプ不明	4	—	—
合 計	14	88	

大川領表⑪—南俣組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	1	1	2.7
B型の内訳	1	29	78.4
B C型の内訳	1	4	10.8
C型の内訳	1	3	8.1
合 計	4	37	

大川領表⑫—大川町・下大蔵組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	3	7	4.6
B型の内訳	1	11	7.2
B C型の内訳	4	25	16.3
C型の内訳	2	20	13.1
D型の内訳	2	90	58.8
タイプ不明	5	—	—
合 計	17	153	

大川領表⑬—ほうの木だい組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
B C型の内訳	1	7	18.4
C型の内訳	1	9	23.7
D型の内訳	2	22	57.9
合 計	4	38	7.6

大川領表⑭—中次組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	1	7	11.9
C型の内訳	1	5	8.5
D型の内訳※	2	20	33.9
タイプ不明	1	27	45.8
合 計	5	59	

※中次村の家数は□7。欠字を20と推定。

大川領表⑮—中浜組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	1	4	3.2
D型の内訳	7	106	84.8
タイプ不明	1	15	12
合 計	9	125	

れる。高岩寺の創建が1552年であることからすれば、「大川之町」は16世紀前半以前には既に在町として成立していたことになるので、「大川之町」は高岩寺の



図 14—大川城跡・藤懸り館跡・大川之町・近辺村・高岩寺・岩崎村／Google マップより引用。

門前町として成立した町場ではない。

近辺村 「瀬波郡絵図」の「大川之町」は、近辺村と一体になって簀の子状の木柵で圍繞されている。この木柵は、強い海風、特に冬のシベリアからの季節風を遮るための風除けの施設である（図10）。現地調査と航空写真の分析結果からすると、Aブロックが「大川之町」、Bブロックが近辺村に相当し、AとBの間の小道Cが郡絵図に描かれている岩崎村に至る浜の街道に該当する（図14）。231 近辺村は、割書に「近辺村 上 大川ノ分 ①本納 合 百四石五斗三升五合 □□ ②合百五拾四石三斗八升九合 ③家合六拾七間 ④かねうらヨリ五里」（史料h）とあり、①+②の村高は約259石で、家数が67軒の町場である。1軒当たりの縄ノ高は $154.389 / 67 = 2.3$ 石で、非移動のD型に分類される。

大川町の二重構造 ⑮大川町・下大蔵組は17ヵ村町であるが、「大川之町」は①本納高・②縄ノ高・③家数の記載を欠くので、東京大学出版会本の『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』では、「大川之町」を村町にカウントしていない^(注44)。「大川之町」を村町数に加えて、⑮組のタイプ別の比率を見ると、分類不明が $5 / 17 = 29.4\%$ になる。⑮組は、大川領全体の不明率（不明 $11 / 53 = 21\%$ ）よりも高率で、数値の欠落が著しい。

村上城主の大国但守馬と城代・春日元忠の膝下のC本庄地区の⑨組では、「上中下」の区分の確定率が20%であり、「瀬波郡絵図」では領主の本拠地に近い地域ほど、各種データの確定率が低くなる傾向を示す。「大川之町」は、領主大川氏の居館の藤懸館に近いので、上中下の区分と本納高・縄ノ高・家数の確定作業が後回しにされて、各種の数値が未確定だったに過ぎない（表3）。

門前町の自由都市・港湾交易都市で、軍役と諸役は

負担せずに高額な「地子銭」を領主の色部氏に貢納した岩船町や、城下町の形成途中で年貢と諸役を負担を免除されていた「村上町」と「中間町」とは異なり、「大川之町」は特権や免除を付与された特別な町場ではなかったのである。

「大川町」は、町場が拡大して近辺村を取り込んだ、「大川之町」と「近辺村」が結合した二重構造の町場だった。大川之町は、近辺村と近似した、1軒当たりの縄ノ高が3石未満の非出陣のD型の町場だったと推定される。⑮組の海岸部寄りの村々と勝木川（立嶋川）の谷沿いの村々は、「大川町」で軍勢の部隊編成を行い、D型の町場の「大川町」は、物資の集積供給と雑役を軍役・諸役として負担していたと推定される。

大川領の海岸部の細い朱線 図15の⑮組の海岸部、219こいし村・229金か浦村・230かんだ村・231近辺村には海岸の汀線の内側に細い朱線が引かれている。旧稿では、海岸部を遮断する朱線が存在から、⑮組の海村は海の漁業権を奪われていたのではないかと推測したが、この推測は正しいのであろうか？^(注45)。

⑮組の海岸沿いの細い朱線は、かすれていて、所々で途切れている。文禄三年（1594）から五年の当時の郡絵図の作成者が、この朱線を引くことを躊躇しているような印象を受ける。宝永四年（1707）に米沢城内の御小納戸で発見された「瀬波郡絵図」、「頸城郡東絵図」を、三名の担当者が七月二十七日から九月十日にかけて修履した際には、この不確かな細い朱線は補描しなかった。

左右の⑯組と⑰組では、汀線沿いには細い朱線は引かれていない。漁業権の有無は、僅かな耕作地しかない海村の生死を決する重大条件であった。旧稿での推測は間違いで、上記の4つの海村は漁業権を確保していたと推定され、かすれて途切れた未完の朱線は、「瀬波郡絵図」が作成途中であり、細部の調整が未了であったことの証左の1つである。

過半を越えるD型の村町 表8の「大川領のタイプ別の村町集計」で最も特徴的なのは、在村して軍役や諸役を勤めるD型の村町数が突出している点である。大川領のD型の村町は17ヵ村町を数える。「瀬波郡絵図」全体では、D型とF型の在村型の合計は18.5%であるが、大川領全体ではD型が過半数の53%を占めている。大川領は、山間地と海岸部の小村が多くて、大きな軍役・諸役を負担させることが出来なかったのである。羽越国境地帯の山村のほとんどが在村して国境警固役を勤めていた。出羽国庄内領と接する、最北の⑯中浜組では9ヵ村のうち7ヵ村がD型である。江戸時代には羽州街道の国境の249小俣村と243雷村には口留番所が置かれていた。両番所は戦国時代の国境の村町の国境警固役を継承したものである。

部隊を編成して出陣する戦闘部隊のA・B・BC型の村町は17ヵ村町で、家数比は $147 / 500 = 29\%$ に過ぎずない。大川領のD型の17ヵ村町のうちで、232⑮大谷沢村、237⑯入う谷村、249⑰小俣村は山間地の町場である。大川領のD型の町場は、国境警固役と村組の結集地の役割を兼ねていた^(注46)。

2. 大川領の村町と郡絵図

大川領の地域区分 越後国瀬波郡の中心の大川領は、細い朱線で区画された村組が10つ、村町が105ヶ所、軍役と諸役を負担する家数が1,335軒である。大川領は地形的に、岩船港に続く山地以南のイ地区、三面川以南のロ地区、三面川以北のハ地区、海岸部と山地のニ地区の4地区に区分される（図1・2）。イ地区が旧神林村の一部、ロ・ニ地区が旧村上市域、ハ地域が旧朝日村域に相当する。大川領の細い朱線は、イ地区では旧岩船潟に注ぐ小河川沿いに、ロ・ハ地区では三面川に注ぐ河川沿いに引かれている。ニ地区とハ地区との境界の朱線は、海岸沿いの山地の分水嶺である（図1・2）。

大川領の領主たち 大川領の領主は、村上城主・大川但馬守（城代・春日元忠）、平林城主色部氏、鮎川氏の3名である。領主別に見ると、イ地区は⑥組の一部が色部分の他は⑦⑧組の全てが大川分である。ロ地区は⑨組の全てが大川分、⑩組は大川分と鮎川分が約半々である。ハ地区では⑪組が大川分と鮎川分が半々、⑬組は大川分が多め、⑭組は1/10が鮎川分（未記載1）、⑮組は2/6が鮎川分である。ニ地区の海村は全て大川分である。

大川但馬守実頼は、魚沼郡上田衆（新潟県南魚沼市・旧六日町）の樋口氏の出身で、上杉景勝の執政の直江兼統の実弟である。実頼は、「御館の乱」（1578年～）の頃に刈羽郡の小国城主（長岡市小国町）の小国氏に入嗣し、新潟市西蒲区岩室の天神山城主になった（図34・35）。実頼は、文禄三年（1594）の「定納員数目録」では、軍役高は9,041石余で、実兄で与板城主の直江兼統の53,217石、信濃衆で海津城主の須田相模守満親の22,086石に次ぐ規模であった。実頼は、ほとんどは在京していたので、信濃衆出身の春日元忠を城代として村上城に入れていた^(注47)。

本庄氏は、武蔵国の雄族・秩父一族の出身で、秩父季長は鎌倉初期の12世紀末頃に源頼朝から小泉荘地頭職に補任されたと推定される。季長は、嫡子の行長に小泉荘の本庄を、次子の為長に小泉荘加納を譲与した。色部公長は13世紀中頃には加納色部に土着し、本庄氏も後半頃には小泉荘本庄に土着したと推定される^(注48)。

鮎川氏は、従来は本庄氏の庶子家と考えられていた



図 15—大川領の海岸部の細い朱線／「瀬波郡絵図」

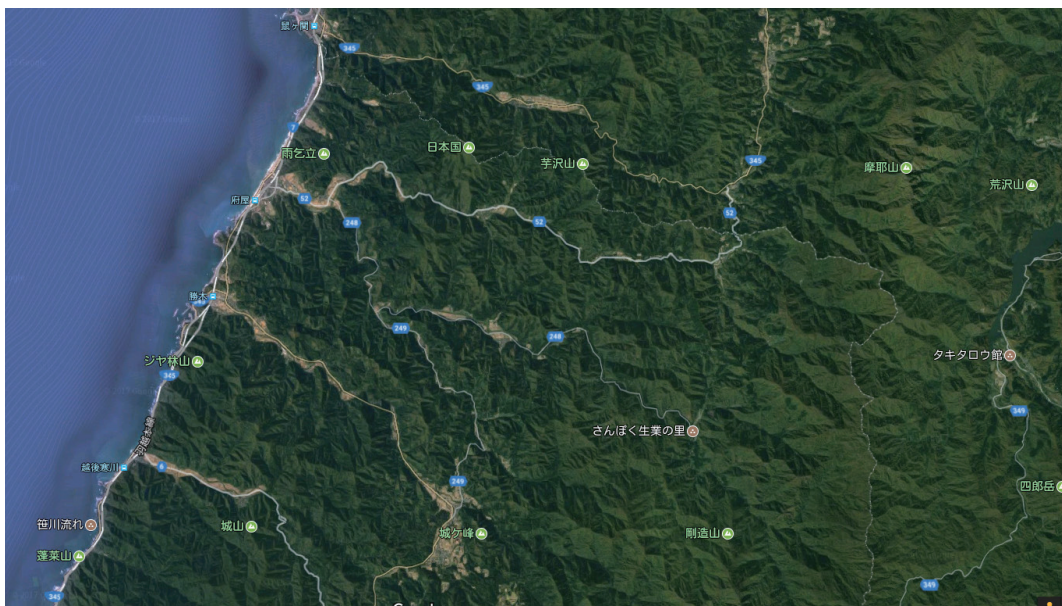


図 16—大川領の航空写真／Google マップより引用。

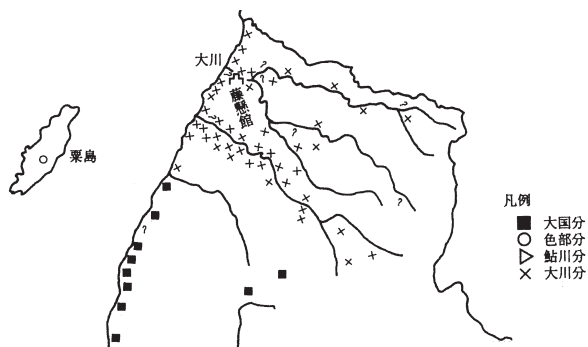


図 17—郡絵図に見る大川氏の所領の分布／『村上市史・通史編 1』(注 41) より一部引用

が、長谷川伸氏は、相模国の雄族・三浦氏の一族で、陸奥国会津に土着した三浦草名氏の支流の新宮氏の一族であると指摘した^(注 49)。本庄氏と鮎川氏の所領・知行地はモザイク状に入り組んでいた。本庄氏と鮎川氏は、お互いに完全な一円支配権を確立出来なかった

し、長い間反目と対立抗争を繰り返していた。

本庄氏は 13 世紀末に鎌倉での年貢未進の裁判で敗訴した。その結果、小泉荘本庄は幕府直轄の関東御領になり、幕府の高官たちが預所職・所領を獲得して、本庄氏の在地支配を圧迫した。三浦草名氏は、北条氏と三浦氏が対決した「宝治合戦・三浦氏の乱」(1247 年)で、一族から離反して北条氏・安達氏側に付いて、滅亡をまぬがれた三浦佐原氏の支流である^(注 50)。三浦新宮氏の一族が、幕府の高官たちの現地代官として、小泉荘本庄の相川に土着して鮎川氏を名乗り、南北朝期以降も領主権を確保したとすれば、上記のような所領の混在形態も無理なく理解出来る。

本庄繁長は、出羽国庄内地方の支配を巡って最上義光と対立して、天正十六年(1588)八月に「十五里原の戦い」(山形県鶴岡市)で最上勢を撃破して庄内の支配権を確保したが、義光から豊臣秀吉へ「私戦停止令」違反で提訴された。大宝寺武藤家に入嗣していた

表 9—大國領の領主別の村町数の集計

大國分※	鮎川分	色部分	鮎川相給	色部相給	未記載	合計
8 0	1 7	1	1	1	1 5	1 1 5
6 9 . 5	1 4 . 8	1	1	1	1 3 %	
6 4 ☆	1 7	1	1	1	1 5	9 9
6 4 . 6	2 6 . 6	※旧本庄領 ☆⑫組を除外した補正值				

表 10—大國領のタイプ別の村町集計

	村数	家数	家数比%	類型集計①	類型集計②
A型の内訳	3 7	3 1 5	2 3 . 5	戦闘専門型	戦闘型
B型の内訳	1 7	2 5 0	1 8 . 6	4 5 . 6 %	
B C型の内訳	1 5	1 0 9	8 . 8	輸送型	5 0 . 3 %
C型の内訳	6	5 9	4 . 8	1 2 . 6	※4 . 4
D型の内訳	1 6	2 2 3	1 6 . 6		在村型
F型の内訳	4	7 7	5 . 7		2 2 . 4
タイプ不明	2 0	3 0 5	2 1 . 8		
合 計	1 1 5	1 3 3 8	※※		

※非戦闘型。中太破線＝在村軍役・諸役の村町。※家数÷1234＝%

大國領表⑥—あり明組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	4	3 7	5 3 . 6
B C型の内訳	1	4	5 . 8
D型の内訳	1	5	7 . 2
タイプ不明	3	2 3	3 3 . 3
合 計	9	6 9	

大國領表⑦—下助淵組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	5	6 4	1 0 0
タイプ不明	1	—	—
合 計	6	6 4	

大國領表⑧—とりこ系組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	2	4	8 . 5
B型の内訳	3	3 2	6 8 . 1
B C型の内訳	2	9	1 9 . 1
C型の内訳	1	2	4 . 3
タイプ不明	2	—	—
合 計	1 0	4 7	

大國領表⑨—中町組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	6	1 9	4 . 7
B型の内訳	2	3 2	8
B C型の内訳	2	1 1	2 . 7
C型の内訳	1	2	0 . 5
D型の内訳	2	8 5	2 1 . 1
タイプ不明	2	2 5 3	6 2 . 9
合 計	1 5	4 0 2	

大國領表⑩—四かいち組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	8	6 1	3 5 . 9
B型の内訳	3	6 0	3 5 . 3
B C型の内訳	1	1 7	1 0
D型の内訳	2	3 2	1 8 . 8
タイプ不明	5	—	—
合 計	1 9	1 7 0	

大國領表⑪—いしすミ組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	2	1 3	2 0 . 3
B型の内訳	2	1 5	2 3 . 4
B C型の内訳	1	5	7 . 8
C型の内訳	1	7	1 0 . 9
D型の内訳	5	2 4	3 7 . 5
合 計	1 1	6 4	

繁長の実子義勝の庄内領知行は安堵されたが、繁長は十八年に村上領を没収されて改易された^(注51)。「瀬波郡絵図」の大國分の村町は、繁長改易によって大國但馬守実頼が継承した旧本庄繁長領である。村町の数で比較すると、大國分 80 カ村・70%、鮎川分 17 カ村・15%になる。この数値比には⑫組の村高が極端に低い海村 16 カ村が含まれているので、これを除外して補正すると、大國分 64 カ村・65%、鮎川分 17 カ村・27%になる。どちらの数値でも圧倒的に旧本庄領の大國分が多い。

旧本庄領と鮎川領の村町数の比率だけを見ると、本家と分家の関係に見えなくもないが、同族内での分割相続であれば、モザイク状に所領が混在することを回避したはずである。本庄氏と鮎川氏は全く別の氏族であり、鮎川氏は、鎌倉幕府の在鎌倉の上位領主の現地代官で、幕府の高官たちが本庄氏の在地支配を分断するために設定した、散在型の所領群を継承・確保したと解釈した方が説明が付けやすい。大國分と鮎川分の所領のモザイク状の混在の問題に付いては、六章 2 節で再論する。

戦闘型優位の村町 戦闘型の村町の比率は大國領は 50%で、大川領の 28.4%よりもはるかに高い。前節では大川領の羽越国境地帯の山村のほとんどは在村して国境警備役を勤めていたことを指摘した。大國領で戦闘部隊の中心になる A 型が卓越するのは平野部の村町である。そのなかでも最も特異的なグループは、大國領⑦下助淵組である。同組は 6 カ村の小さな組だが、5 カ村が A 型で家数 64 軒である。同組は旧神林村の一部のイ地区⑥⑦⑧組全体の部隊編成の中心であったと推定される。

その次に A 型の家数が多いのが、⑩四かいち組の 8 カ村町・61 軒、⑬下鶴渡路組^{しもうのとろ}の 6 カ村町・60 軒である。この 3 組は軍事優先の戦闘部隊中心の村である。A タイプの組は、BC・C 型の輸送能力・部隊が欠落しているか極端に弱い。大國領の平野部では、軍事優先の戦闘部隊中心の村町は、組内では輸送能力の不足を補完出来なかったもので、補完するために隣接組の村町が組み合わされていたのであろう。⑦⑩⑬組が村上城主大國実頼と城代春日元忠が編成する戦闘部隊の中核の役割を担っていた。

戦闘能力の卓越性 大國領でのもう一つの特徴が戦闘能力の高さである。戦闘専門型と輸送能力型とで比較すると、概数で「戦闘 46 : 13 輸送」になる。「瀬波郡絵図」全体の平均値概数は「戦闘 50 : 30 輸送」なので、村上城を中心とする郡支配の中心・中核の大國領では、戦闘部隊の方が圧倒的に卓越している。大國但馬守実頼が編成する軍勢部隊は、精強部隊ではあったが、長期・遠距離の遠征と外征には不向きだった。

大国領表⑫―間嶋組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
BC型の内訳	4	32	18.7
D型の内訳	5	62	36.3
F型の内訳	4	77	45
タイプ不明	3	—	—
合 計	16	171	

大国領表⑬―下鶴渡路組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	6	60	45.8
B型の内訳	3	45	34.4
BC型の内訳	2	9	6.9
タイプ不明	2	17	13
合 計	13	131	

大国領表⑭―せきくち組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	1	14	11.5
B型の内訳	3	38	31.1
BC型の内訳	2	22	18
C型の内訳	2	33	27
D型の内訳	1	15	12.3
タイプ不明	1	—	—
合 計	10	122	

大国領表⑮―塩野町組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A型の内訳	3	43	43.9
B型の内訳	1	28	28.6
C型の内訳	1	15	15.3
タイプ不明	1	12	12.2
合 計	6	98	

国境警固役の山村 在村して国境警固役を勤めるD型の村は16ヵ村・223軒・17%である。D型の比率は、大川領の17ヵ村・263軒・53%と比べるとそれ程高くない。D型の比率が極端に高い、特異なグループが⑪いしすミ組である。11ヵ村のうちでD型の村が半分に近い5ヵ村で、家数の比率でも24軒で37.5%を占めている。

⑪組の山村は149^{やなぎうど}柳生戸村の大峠と153三面村の蕨峠で出羽国小国領（山形県小国町）に通じていた。小国町では大峠を越える道は「柳生戸街道」と呼ばれていた。「柳生戸街道」は、村上から日本海の塩と海産物を内陸の出羽国に送り込む主要な「塩の道」の1つであった。三面村は、単独で蕨峠の国境を警固することと引き替えに、クマ・カモシカの毛皮や塩引鮭、スゲゴザなどの特産物を時節ごとに村上城に届けることで年貢を免除されていた、特別な「平家の落人伝説」の山村であった^(注52)。

塩を焼く海村 ⑫組は16ヵ村の塩を焼く海村である。164新保村「縄ノ高 合五拾八石式斗四升壹合 此外 三拾俵 塩但三斗四升入」（史料i）などの塩年貢の記載は5ヵ村にしかないが、⑫組の村々は耕地がほとんど無いので、全村が塩焼きを生業にしていたと推定される。⑫組の村は、BC型の「足軽+小荷駄隊」



図18―府屋周辺の塩焼きの店舗／2017年6月筆者撮影

の軍役を負担して出陣する4ヵ村と在村の、D・F型の9ヵ村に大別される。

⑫組では16ヵ村のうちで13ヵ村が「上中下」の区分が完了している。達成度は81.3%の高率である。BC型の4ヵ村は、中が3ヵ村、未記載が1ヵ村で上の区分の村は無い。164新保村は、家数が6軒で第2位、1軒当たりの縄ノ高が6.47石の第2位で、総合点で第1位になる。区別が未記載の新保村が上の村に相当すると推定されるが確証が無い。

D型の5ヵ村では、家数と1軒当たりの縄ノ高が1位の161吉浦村と3位の162早河村が上で、2位の163馬下村が中に区分されている。この3ヵ村の数値の違いは僅差である。役負担が2石以下のF型の4ヵ村では、家数が17軒で2位、1軒当たりの縄ノ高が0.46石で3位の脇河村が何故か上に区分されている。家数が55軒で1位の柏尾村は中、1軒当たりの縄ノ高が1.91石の岩屋ヶ崎村は下に区分されている。「上中下」の区分には、村の来歴や^{むらおさ}村長の地侍家の筋目の正しさが反映れているのであろうか。

D・F型の海村は海岸の警固役を勤めていたと推定されるが、F型は縄ノ高が謹少なので、具体的な負担の内容は不明である。

塩木流し 旧稿では、塩は戦略物資でもあり、国衆領主の本庄氏とその旧領を引き継いだ村上城主の国衆実頼・城代春日元忠は、⑫組の海村に塩焼きの特権を付与して保護したと推定したが^(注53)、大国領以外の色部領と大川領の海村が塩焼きを禁止されていた訳ではない。

大川領の奥山の山熊田村（郡絵図の238山ご俣村）では、田植えが終わってから盆前まで山に入って木を切り倒しておく。盆過ぎから木を短く切って塩木にする。11月初旬頃に塩木を斜面の所々に集める。翌年の春の^{せき}彼岸までに、雪の上をそりを使って大川支流の中継川の堰まで運んで置き、「川流し」で府屋（郡絵

図の大川の町・231 近辺村) まで流した。塩木が府屋に流れ着くと、村中総出で大川から引き上げて浜で並べて干した。大川領の山村から流し出された塩木は、府屋周辺の大川領の海村に供給されて塩焼きの燃料にした。村上地方では燃料の薪のことを塩木と言った。塩木流しは、山熊田村に限らず、大川領の山村部一帯の重要な生業であった^(注54)。今でも笹川流れから山形県鶴岡市鼠ヶ関までの海岸部には、塩を焼いて販売する店舗が点在している(図18)。

大國領⑫組の柏尾村と色部領⑤組の塩谷村には塩竈神社が祀られている^(注55)。大國領⑪組の最奥の山村の三面村は、梅雨時の増水を利用して三面川の河口部まで塩木を流していた。塩木は、村上の業者が筏に組んで色部領の塩谷村に運んで、塩焼きの燃料にした。三面村は、塩谷村の製塩業者→村上の業者を経由して、流した塩木分の塩を入手していた^(注56)。

羽州街道と村上城下町 上杉景勝は、天正十八年(1590)七月の小田原開城後の八月に、太閤秀吉に出羽国の仕置と検地を命じられて、大谷吉継が豊臣政権の代官として付けられた。景勝は七月下旬頃に吉継とともに瀬波郡から出羽国に入り、各地の支配拠点の城郭に重臣と軍勢を配置して検地と仕置を実施した。

色部家当主の長真は、景勝に従い大森城(秋田県横手市大森町)に在城した。九月に仙北・由利・庄内地方で一揆が続発したが、十月下旬には終息に向かい、景勝のもとに派遣されていた豊臣軍も、十一月上旬頃から上方に向かって撤収し始めて、景勝は十一月二十日に春日山城に帰着した^(注57)。長真は、翌十九年春まで大森城に滞在して、一揆の事後処理と仕置を行った^(注58)。

長真が大森城に滞在中で色部領に不在の時期に、色部家中筆頭の田中左近将監は、上方に向う豊臣軍と越後本国に帰る上杉軍への路次供給を岩船町で実施している。十八年十一月十一日・十二日の豊臣軍への路次供給は、田中左近将監→上杉家中の担当者→豊臣軍の手順で実施された。供給量は、軍勢1,345人、馬261匹以上に対して、京升で米が6石7斗2升5合、大豆が9石4斗であった。上杉家中の担当者8名への立て替え給付は、米が7斗5升、大豆が8斗7升であった。景勝は十四日に岩船町に到着した。^(注59)

太閤秀吉は、天正十九年と推定される「豊臣秀吉朱印状」で、津軽為信に対して津軽鷹を京都へ献上することを命じた。太閤権力が指定した津軽鷹の宿次ぎは、「①温海川(山形県鶴岡市・旧温海町)→②中継(新潟県村上市・旧山北町)→③猿沢(村上市・旧朝日村)→④岩船町(村上市)」で、「村上町」はこの中には入っていない。

本庄繁長は、十八年に豊臣平和令の私戦停止令違反



図19—村上城下町への入り口・しり引き村／「瀬波郡絵図」

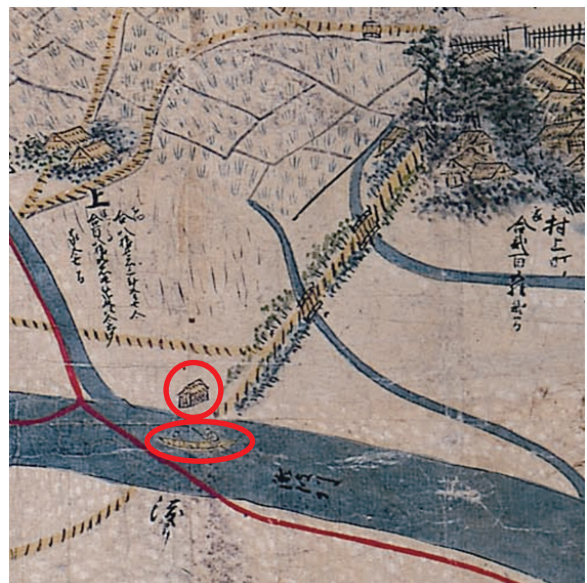


図20—村上城下町への渡し場と警固小屋／同前



図21—瀬波村の渡し場／同前

を理由に領地を没収されて改易され、大国但馬守実頼が後任の村上城主になった。路次供給が「村上町」ではなく、「岩船町」で行われたこと、津軽鷹献上の宿次ぎに「村上町」が入っていないことからすると、「村上町」は天正十八・十九年の段階では、豊臣軍と上杉軍の路次供給と津軽鷹献上の宿次ぎを担当出来る町場にはなっていなかったと推定される（図 11）^{（注 60）}。

本庄氏は 16 世紀前半の房長の時代に本拠地を猿沢城から村上城に移し、猿沢城は房長に家督を譲った時長が隠居城として使用した。猿沢村は、郡絵図では普通の集落として描かれているが、天正期には宿次の町場になっていた。現在でも短冊形地割りで、街道沿いに妻入りの家屋が連続する町場の景観をとどめている（図 11・12・13）。戦国時代の本庄氏の段階の村上城の大手口は東側で（郡絵図の村上ようがいの裏側）、領主の居館は城山の東麓にあった（図 43）^{（注 61）}。戦国時代の羽州街道は、大川領と大国領の山間地を通過していた。天正期の段階では村上町を経由せずに日本海側の山地の東麓を通り、瀬波の対岸から三面川を渡って④岩船町に通じていたと推定される（図 11・21）。

図 19 の「114 しり引村」は、村上城下町への南側（郡絵図では右側）の入り口で、街村形態になっていた。村上城下町は簀の子状の木柵で圍繞されているが、「しり引村」は通常の集落と同様に防風林で圍繞されており、「上 大国但馬分（本納）合百九拾九石七斗六升四合（縄ノ高）合三百五拾三石七斗五升八合五夕家合式拾九間 岩船ヨリ村上へ十五里」（史料 j）の割書が付記されている。防風林で圍繞されており、本納高と縄ノ高が算定済みで、年貢も軍役・諸役も免除されていないことからすると、「しり引村」の方が城下町よりも古い町場であることが明らかである。

「しり引村」は、岩船町と瀬波村からの道の交差点で、天文十三年（1544）の創建と伝える本庄氏の菩提寺の長楽寺と、大国領の⑧とりこゑ組の内陸の村々へ至る道筋に当たる^{（注 62）}。「しり引村」は、大国但馬守・春日元忠による村上城下町の建設以前の本庄氏の段階から既に町場化していた（図 1・19）。

郡絵図には三面川の渡し場が図 20・21 の 2 ケ所描かれている。図 20 は村上城下町へ至る渡し場で、「渡り」の注記があり、渡し船と警固小屋が描かれている。渡し場と村上城下町との間の直線道路の両脇には、街路樹が描かれているが、樹高が低くて、郡絵図が作成された文禄期頃に植樹されたことを示している。この道路は、羽州街道の本道を村上城下町経由に付け替えるために、村上城主の大国但馬守と上杉景勝権力が新設した新道である。図 21 には「111 瀬波村」に至る渡し場があるが、「渡り」の注記も警固小屋も無くて、羽州街道の本道ではないことが示されている。天正

十八年十一月の豊臣軍の行軍と十九年の津軽鷹の京上は瀬波村の渡し場を通過した。猿沢村から岩船町に最短で至る場合は、文禄期になっても瀬波村の渡し場を通る旧道が盛んに使われていた。

郡絵図上での大国領の町場は、表 4 に示した 9 ケであるが、実際には宿町であった猿沢村が街村形態ではないなど、全ての町場が表示されてはいなかった可能性が高いことは既に指摘した。大国領 C・本庄地区の九日市村、鮎川領 D・本庄北方地区のさべり村・高根村以外の瀬波村・塩野町・ぶどうが谷村の 3 カ村町は羽州街道沿いの町場である。「村上町」と城下町に付属する「中間町」は形成途中で、「本納高+縄ノ高」=年貢と諸役の負担を免除されていたことも既述した。

「瀬波郡絵図」全体では町場は 24 ケ所、家数は 974 軒余を数える。「115 村上町」は家数が 253 軒で、郡内で最大規模の町場・都市であるが、町場の家数比では 253 軒／974 軒＝26%を占めるに過ぎない。「村上町」に次ぐ規模の町場は色部領④組の「62 宿田村・平林」の 161 軒、3 位は大国領⑨組の瀬波村の 78 軒である。2 位と 3 位の合計家数は 236 軒になり、村上町とほとんど差が無い。上杉景勝・直江兼統権力は、村上城下町振興のために、羽州街道を付け替えて村上町への引き込む政策を実施したが、村上城下町は都市としての求心力はまだ微弱であり、文禄期段階では在町優位の現実はまだ揺るぎなかった。デフォルメされて描かれた「村上ようがい」と「村上町」と新道から、城下町の経済的な卓越性の幻想を見てはならない^{（注 63）}。

3. 色部領の村町と郡絵図

色部領の地域区分 荒川の下流北岸域の①組は旧荒川保の西部地域である。中流域の南側の②組は旧奥山荘の黒川領である。中流域の③組は旧荒川保の東部地域である。荒川の下流北岸域の山地寄りの④組は旧小泉荘加納の色部条である。海岸寄りの⑤組は牛屋条である。荒川保は、荒川の河口部から出羽国の国境までの、荒川と支流の女川の流域に広がる広大な国衙領であった。戦国期の色部領は、旧奥山荘域、旧荒川保域、旧小泉荘加納の来歴の異なる 3 つの地域の集合体であった。

色部領の領主たち 来歴の異なる 3 つの地域からなる戦国期の色部領の領主は、「瀬波郡絵図」の割書では、色部氏・土沢氏・直江氏・垂水氏・黒川氏・加地氏・大国氏・御料所の 8 名も混在している。荒川保の領主は、相模国足柄上郡（神奈川県山北町）出身で荒川保地頭の河村氏であったが、河村氏は南北朝の内乱で南朝方に付いて没落した^{（注 64）}。その跡は守護上杉氏の御料所（直轄地）となり、一時期加地氏と中条氏が支

配し、大永年間（1521～27）から色部氏が保内の一部を支配するようになった^{（注65）}。色部氏は、保内全域を獲得した訳ではなく、①・②・③組の旧荒川保域に於ける色部氏の支配は限定的であり、所領の散在性を克服することは出来なかった。

表 11 は色部領の領主別の村町数の集計である。村町は 85 カ村町である。郡絵図では太い朱線で区画されて色部領と示されているが、5 組のうちで色部氏の領地が優越するのは 3 つの組にとどまる。旧奥山荘の黒川領の②組では、黒川氏の単独知行地が 16 ケ所で、6 ケ所の色部氏をはるかに凌駕している。旧荒川保の北部の女川流域の③組では、垂水氏の単独知行地が 5 ケ所、加地氏は単独知行地が 2 ケ所と相給地が 2 ケ所の合計 4 ケ所の知行地があるのに対して、色部氏の知行地は相給地 2 ケ所に過ぎない。

色部氏の領地が卓越するのは①・④・⑤組である。①組は旧荒川保の下流域、④組は小泉荘加納の色部条、⑤組は牛屋条に相当する。「63 平林 上」（史料 k）は領主名は不記載であるが、平林は色部氏の膝下の街村の町場なので色部氏領と見て間違いない。④組の「62 宿田村 上 同牧目村」（史料 i）の牧目村は「71 まきの目村」との重複誤記である。⑤組の情報不記載は「83 岩船町 地子」（史料 m）である。岩船町は、在地の霊場の名刹諸上寺と岩船貴船神社の門前町で、自由都市の性格が濃厚な港湾交易都市である。軍役と諸役は負担せずに高額な「地子銭」を領主の色部氏に貢納していたために、領主名を記載しなかったのであろうが、色部氏の所領であることは確実である^{（注66）}。

以下、本節では色部領全体の特徴と、領主が混在する背景と理由に付いて、旧荒川保域と旧奥山荘域の①②③組を中心に分析する。④加納色部条と⑤牛屋条に付いては六章 1 節で詳述する。

最強の戦闘型の村町 色部領の A・B・BC 型の戦闘部隊の比率は 70% を越えている。大川領の 28%、大国領 50% をはるかに凌駕する。輸送部隊を兼ねる BC 型を除外した A・B 型に限定しても色部領の比率は 55% を越える（表 12）。大川領では 13% で、大国領でも 46% なので、色部領の村町は戦闘型の比率が抜きん出ていることが大きな特徴である。色部領の村町は最強の戦闘部隊を編成した。A・B 型の戦闘専門部隊と BC・C 型の輸送部隊の比率を見ると、「A・B 型—50:40—BC・C 型」でバランスがとれている。

「瀬波郡絵図」全体では、は軍事物資・兵糧の輸送を担当する家数が 27% 程度で、人数比が 63% と高率

な「頸城郡東絵図」と極端に違っている（表 6・7）。このことから、頸城郡の編成部隊は長距離遠征の「外征型」、瀬波郡は近距離の「郷土防衛型」とであると指摘した。瀬波郡特有のこの傾向と特質は、最北端の大川領ほど顕著になり、大川領の数値が郡全体の平均値を下げている。「瀬波郡絵図」全体の平均値概数は「戦闘 50:30 輸送」である。大川領は「戦闘 13:26 輸送」、大国領は「戦闘 46:13 輸送」、色部領は「戦闘 55:40 輸送」である。色部領は、戦闘力では大国領よりも上位、輸送力でも上位になる。輸送能力は編成した部隊の遠征・外征能力に直結する。瀬波郡で遠征・外征能力が最も高いのは色部領の編成部隊である。

国境警固の山村と塩の道 色部領の特徴の 1 つが、在村型の D 型の村の頻度が 5 カ村・3% と極端に低いことである。最北の羽越国境の大川領では D 型の村は 50% を越えている。「頸城郡東絵図」では、D 型の村を 1 人当たりの軍役負担・免除給付高 1 石未満を基準に算定した。「瀬波郡絵図」ではこの基準を準用して、1 軒当たりの免除高 3 石未満を D 型の村に算定したが、人数を基準にした場合に比べると不確実である。2 石未満を負担内容が不明の F 型の村に算定したが、色部領には F 型の村は 23 貝付村しかない。貝付村に付いての分析は「貝付村と花立村」の項で後述する。

羽越国境で出羽国小国領に接するのは、荒川の上流域の②組と③組の山村部である（図 23）。D 型の村々は、②組が 43 小中島村、③組が 54 うゑの山村、56 さわ村、57 きゝみだ村の 4 カ村であるが、これ以外にも割書から国境警固役を勤めると判断される村がある。

表 13 は②組で荒川支流の大石川（郡絵図のあつみ川）流域の米沢街道沿いの羽越国境の 4 カ村のデータをまとめたものである^{（注67）}。米沢街道は荒川の河口部と山形県米沢市を結ぶ「塩の道」である。色部領最奥のはた村から羽越国境の大里峠^{おおりとうげ}を越えて出羽国小国領（山形県西置賜郡小国町）に至る。47 下川口村→50 畑村の道順で、江戸時代の 49 沼村は、米沢街道の小国町の玉川本宿と新潟県関川村の上関・下関の本宿との間の宿で、旅籠を営む集落であった（図 22・

表 11—色部領の領主別の村町数の集計 ★単独知行 ▲入り会い・相給 ※色部氏と合算

組	色部氏	土沢氏	直江氏	垂水氏	黒川氏	加地氏	御料所	大國氏	不記載
②★	6			3	16				
▲									
③★				5	1	2			
▲	2					2			
①★	12								2
▲	10	3	1		5	1	4		
④★	6								1
▲	5	1				4	1	1	
	色部氏	牛屋氏							
⑤★	6	1※							1
▲									
計★	30※	土沢氏		8	17	2			
計▲	17	4	1		5	7	5	1	4

23) (注 68)。

48 大内淵村の割書には「下 色部分 縄ノ高 (イ) 合四石四升八合 (ロ) 本納ハなく候 (ハ) 境目故諸役なく踞申候 家々間」(史料 n)、50 畑村の割書には

表 12—色部領のタイプ別の村町集計

	村数	家数	家数比 %	類型集計①	類型集計②
A 型の内訳	2 5	2 4 7	2 4	戦闘専門型	戦闘型
B 型の内訳	1 5	3 1 9	3 0. 9	5 5 %	7 2. 5 %
B C 型の内訳	1 9	1 8 1	1 7. 5	輸送型	
C 型の内訳	1 2	2 3 6	2 2. 9	4 0. 3	※ 2 2. 9
D 型の内訳	5	3 3	3. 1	在村型	4. 7
F 型の内訳	1	1 6	1. 6		
タイプ不明	8	—	—		
合 計	8 5	1 0 3 1	※		

※非戦闘型。中太破線=在村軍役・諸役の村町。※家数÷1034=%

色部領表①—さかまち組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A 型の内訳	9	1 0 6	3 0. 6
B 型の内訳	8	1 2 5	3 6. 1
B C 型の内訳	5	7 5	2 1. 7
D 型の内訳	1	2 4	6. 9
F 型の内訳	1	1 6	4. 6
タイプ不明	1	—	—
合 計	2 5	3 4 6	

色部領表②—しみつはた組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A 型の内訳	7	2 2	2 1. 6
B C 型の内訳	8	4 3	4 2. 2
C 型の内訳	6	3 6	3 5. 3
D 型の内訳	1	1	1
タイプ不明	3	—	—
合 計	2 5	1 0 2	

色部領表③—中まるけ組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A 型の内訳	2	1 0	2 2. 7
B 型の内訳	1	1 2	2 7. 2
B C 型の内訳	2	8	1 8. 2
C 型の内訳	2	7	1 5. 9
D 型の内訳	3	7	1 5. 9
タイプ不明	1	—	—
合 計	1 1	4 4	

色部領表④—飯岡平林組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A 型の内訳	4	5 1	1 3. 9
B 型の内訳	4	1 1 2	3 0. 5
B C 型の内訳	3	3 4	9. 3
C 型の内訳	2	1 7 0	4 6. 3
タイプ不明	2	—	—
合 計	1 5	3 6 7	

色部領表⑤—田中岩船組の村数と軍役負担

	村数	家数	家数比 %
A 型の内訳	3	5 8	3 3. 7
B 型の内訳	2	7 0	4 0. 7
B C 型の内訳	1	2 1	1 2. 2
C 型の内訳	2	2 3	1 3. 4
タイプ不明	1	—	—
合 計	9	1 7 2	

「下 色部分 縄ノ高 (ニ) 合九斗七升九合 (ホ) 本納なく候 (ヘ) 渡場故当村者□諸役無之」(史料 o) とあり、大内淵村と畑村には本納高が無かった。本納高が無い理由は、大内淵村の場合は「(ハ) 境目故諸役なく踞申候」、畑村の場合は「(ヘ) 渡場故当村者□諸役無之」である。通説の小村式説で解釈すると、大内淵村と畑村は文禄三年 (1594) に色部家中から提出させた「知行定納覚」では村高が無かったが、四年検地の結果 (縄ノ高)、大内淵村は 4 石 4 升 8 合、畑村は 9 斗 7 升 9 合に村高が確定されたことになる (注 69)。

江戸前期の万治二年 (1659) の検地高と「縄ノ高」とを比較すると、47 下川口村は 16 世紀末の約 30 石が約半世紀後には 3 倍以上の 102 石に、48 おゝちぶち村は 4 石余から約 3 倍の 12 石余に、49 めま村では 6.6 石から 7 倍以上の約 50 石に、50 はた村は約 1 石から約 18 石に激増している。「徳川の平和」によって開発が進んだとしても、「縄ノ高=検地にもとづく村高」とする小村説では、1659 年の「検地高」と 16 世紀末の文禄期の「縄ノ高」との間の余りにも大き過ぎる増加を合理的に説明出来ない。

文禄期に、大内淵村は国境の境目警固役を、畑村は沼川の渡河点の警固役を勤めていた。大内淵村の割書—「(ロ) 境目故諸役なく踞 (うづくまり) 申候」(史料 p) は、いささか意味が通りにくいが、意識すると「大内淵村は、国境の警固役を勤めているので、それ以外の諸役は課されていない。在村して国境警固役を勤めているので、他所へは出動しない」の意味であろう。畑村の場合は、役料も 9 斗 7 升 9 合と少なく、渡河点の警固役を勤める家数も記載されていない。渡河点の警固は、特定の家が勤めていたのではなく、村全体で随時監視していたのであろう。1 石弱の役料は、村に対して給付されていたので、家数を記載しなかったのであろう。

越後街道—新道 (十三峠)

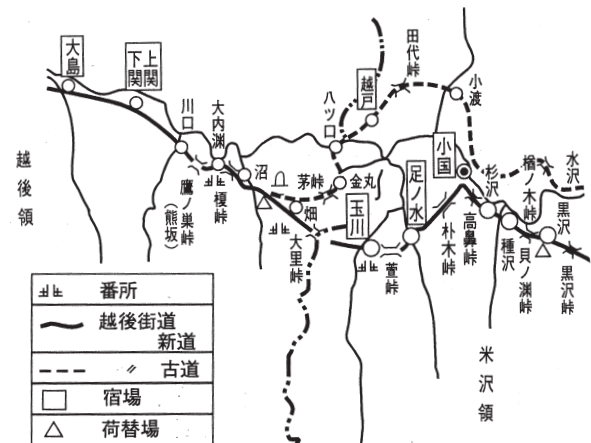


図 22—羽越国境の米沢街道／『小国の交通』より引用 (注 68)

村上藩は、米沢街道の大里峠越えの口留番所を、関川村の畑村と大内淵村に置いていた。大内淵村の4石4升8合の「縄ノ高」は、国境警固役を勤める1軒の地侍家に対する役料の免除給付高と解釈する方が整合的である。大内淵村の村高の4石4升8合は、そっくりそのまま地侍家に宛給されていたので、「本納高」はゼロだったのである。「縄ノ高＝国境警固役の役料＝免除給付高」と解釈すれば、近世前期の検地高と文禄期の「縄ノ高」との乖離を無理なく説明出来る。1659年の検地高は、48おゝちぶち村は12石余、50はた村は約18石で、両村は極めて生産力が低い貧しい山村である。国境警固役を村の負担で無給で勤めたら、両村はたちまち立ち行かなくなったであろう。

本宿の上関番所の役人は、村上藩士の清水家が派遣されて来て、土着して世襲した。19世紀初め頃の清水氏の役料は、給金三両、給米四石二人扶持であった^(注70)。1667～1704年の榊原藩政時代の「村上拾五万石領内諸書留帳」(村上市岩船町・伴田幸一郎氏

所蔵文書)には、「御領分関所」として、「一、大内淵定番 金子仁右衛門 加番壱人 一、畑 今 佐右衛門 加番壱人」(史料1)とあり^(注71)、大内淵村の金子仁右衛門と畑村の今佐右衛門には四石二人扶持が与えられていた^(注72)。両村の口留番所は、郡絵図に記載の大内淵村の国境警固役と畑村の渡河地点警固役を継承したものである。

近世の村上藩の口留番所役人への役料からも、「文禄期の郡絵図の縄ノ高は国境警固役に対する免除給付高である」とする私見の推定が補強される。47下川口村・48おゝちぶち村・49ぬま村は、「瀬波郡絵図」の割書の「縄ノ高」の区分ではC型に分類されるが(50はた村は不明)、この4ヵ村は連携して国境警固役を勤めていたと推定して大過ないであろう。小泉荘加納の④色部条と⑤牛屋条を本領とする色部氏が、旧荒川保の上流左岸の②組に進出するのは16世紀後半以降と推定されるが、48おゝちぶち村と50はた村は色部氏の単独知行地になっている。羽越国境の警固役と塩の道の支配権と管理権は色部氏が掌握していた。

荒川河口部の桃崎村と塩谷村

胎内川は、荒川の河口部の手前で荒川と合流していた。荒川の右岸(郡絵図の左側)の色部領の塩谷村と旧荒川保の桃崎村には、日本海の海上交通・交易と荒川の河川交通との結節点になる港があった。海老江村は、近世に胎内川と

荒川の合流点に湊が開かれたが、16世紀末の文禄期にはまだ湊は無く、胎内川の渡し場に過ぎなかった。「瀬波郡絵図」ではやや大きめの3軒の集村に描かれている^(注73)。塩谷村と桃崎村は、郡絵図では街村形態に描かれており、町場を形成していた。両村の間の荒川の河口部には渡し船が描かれている(図24)。

矢田俊文氏は、「知行定納之覚」^(注74)によれば、領主の色部氏は桃崎からは「浦役」、塩谷からは「肴役」を

表 13—色部領の羽越国境の村の集計 小文字数字は東大出版会本の通しNo.

通しNo.村名	領主	a本納高石	b縄ノ高石	c家数	b÷c	タイプ
No.47 下川口村	黒川分	12. 0 1 9	29. 6 8 4	7	4. 2 4	C
近世の村高		1659年→	102. 1 2			3. 4 倍
No.48 おゝちぶち村	色部分	0	4. 0 4 8	1	4. 0 4 8	C ※
◎ 近世の村高		1659年→	12. 2 4 2			3 倍
No.49 ぬま村	黒川分	2. 1 3	6. 6	2	3. 3	C
近世の村高		1659年→	49. 9 0 8			7. 6 倍
No.50 はた村	色部分	0	0. 9 7 9	—		不明 ※※
◎ 近世の村高		1659年→	17. 8 4 3			1 8 倍

※「境目故諸役なく踞申候」※※「本納なく候 渡場故当村者口諸役無之」◎近世の口留番所

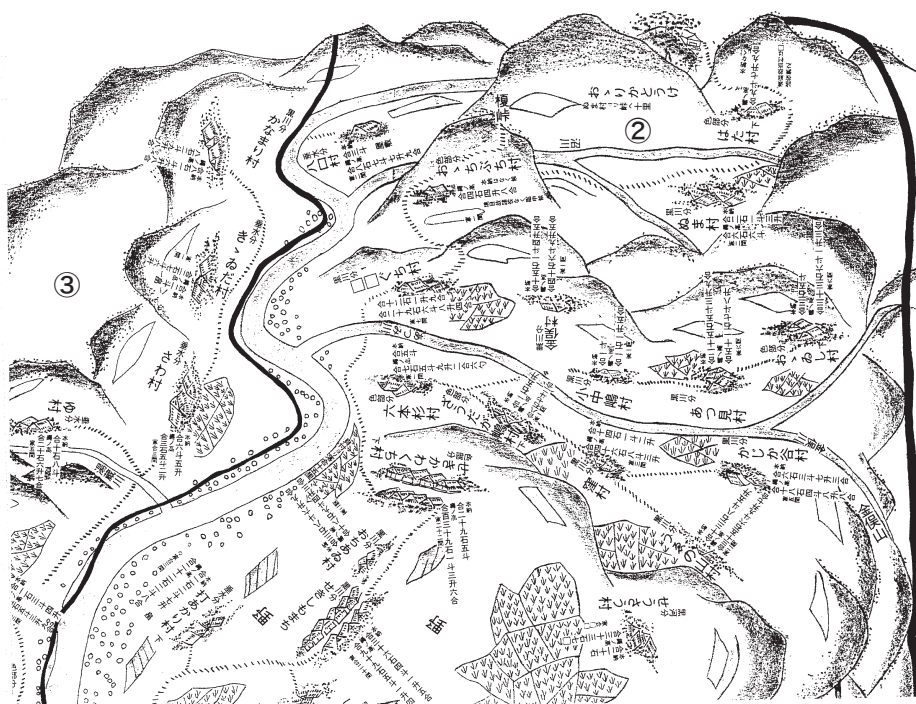


図 23—「瀬波郡絵図」の荒川上流域の羽越国境の村々／『村上市史別編 絵図・地図・年表』より引用(注3)。塩谷からは「肴役」を

徴収していたこと、「色部氏年中行事」^(注75)に色部氏に魚を納入する「さかな持」が見えることから、桃崎と塩谷の集落は、農業ではなく、流通や漁業を生業の中心としていたと指摘した。妥当な見解ではあるが、矢田氏は桃崎村が何故「本納なく候」(史料q)になっているのかに付いては分析・言及していないし、桃崎村の「浦役」は「渡役」の誤記である^(注76)。桃崎村は「知行定納之覚」に「一 渡役 三貫五百文 只今は出不申候」(史料2)とあり、以前は渡船料収入から3貫500文を色部氏に上納していたが、文禄三年(1594)頃にはこの上納金は免除されていた^(注77)。

表14の上段は塩谷村と桃崎村の文禄期の石高を比較したものである。下段は正保二年(1645)の「越後国絵図」の村高で、諸役を負担を解除された後の村高を示している。桃崎村の(27 - 10.297 = 16.703石)差額の約17石、塩谷村の(140 - 67.797 = 72.203石)差額の72石余が、両村が領主の色部氏に納めていた諸役と半世紀間の生産力の上昇分の合計に相当する。

桃崎村縄ノ高10.3石と塩谷村の「肴役」がほぼ同額であったとすれば、塩谷村のC型小荷駄隊の負担の免除給付高は(61.8 - 10.3石) = 51.5石と推定され、1軒当たりの軍役負担は(51.5石 ÷ 18軒) = 約3石になる。塩谷村は、「縄ノ高61.797石分」の「軍役+肴役」を勤めていたし、「本納高6石」も貢納していたが、桃崎村は10.3石相当分の河海の生産物の貢納しか負担していなかった。郡絵図では桃崎村は9軒、塩谷村は8軒の街村に描かれている。諸役を勤める割書の家数は桃崎村が24軒、塩谷村が18軒なので、郡絵図に描かれた街村の家数はこの差異を表現している。両村は防風柵で圍繞された砂丘上の街村で、周囲には水田も畑も描かれていない(図24)。両村の生産力の差は、塩谷村が塩を焼いていたことに起因するのであろう^(注78)。

天正十九年(1591)と推定される「豊臣秀吉朱印状」で、津軽鷹を京都への献上することを命じられた津軽為信は、塩谷・桃崎の渡し場を通るルートで津軽鷹を送った^(注79)。十八年十一月に出羽国の仕置きを終えた豊臣軍と上杉勢は、岩船町で路次供給を受けてから、塩谷・桃崎の渡し場を通るルートで帰国した^(注80)。

揚北最大の港湾都市・岩船町と越後国中央部の港湾都市・新潟町とを結ぶ戦国時代の主要街道は、塩谷・桃崎を渡る日本海沿いの砂丘列の上を通っていた^(注81)。

荒川の氾濫と流路変更で、小泉荘加納と荒川保は

境界を巡って度々紛糾したが、加納牛屋条との境界争いは、建長七年(1255)十月二十四日付けの「関東下知状案」で、荒川の北端の右岸が領境と裁定された^(注82)。正応五年(1292)七月十八日付けの「和田重長代・河村秀通等代連署和与状」で、荒川保と奥山荘の境界が和与で確定され、「但向後若荒河之流、越当新立之勝示、雖流入庄内、於河者为保領進退」(史料3)と、荒川の領有権は荒川保地頭の河村氏に帰属することが明記された^(注83)。

高橋一樹氏は、越後国の国衙領の特徴を以下のように指摘した——「保や津と呼ばれる単位の多くが、河川の流域や沼湖の周辺に立地していることである。中世の越後国では、砂丘を突破して日本海に直接流れ込む河川が少なく、それらが砂丘の内側のいくつもの潟や湖とつながって、網の目のような景観を作りだしていた。国衙は、このような河川および潟湖の周辺において、流通や漁業にたずさわる居住地をも含めて、保や津などの所領を設定するとともに、日本海に注ぐ大河川についても、その流域を保に設定していったのである」^(注84)。

石井進氏は、三面川と荒川流域の国衙領の特質を以下のように指摘した——「中世の北越後で、瀬波川(三面川)・荒川という二つの大きな河川が、ともに公領に属していたことの意味は決して少なくない。河川が交通・運輸の動脈として、あるいは漁業の場としての重要性をもっていた時、その多くが公領として国司の支配下にあったとすれば、それは耕地面積の大小だけではとらえられない公領の大きな役割を示唆してくれるからである。その事実はまた多くの荘園をつらぬい



図24—「瀬波郡絵図」の塩谷村と桃崎村

表14—塩谷村と桃崎村の比較、貝付村・花立村の比較

領主と地区	町場・集落	郡絵図の家数	家軒	a縄ノ高 石	a+本納高 石	型
色部分荒川保	①1. 桃崎村	街村形態 9	24	10.297	本納なく候	D
近世の村高※				1645年→	27	
色部分牛屋条	⑤77. 塩谷村	街村形態 8	18	61.797	67.797	C
近世の村高※				1645年→	140	
色部分荒川保	①23. 貝付村	集村 4	16	1.109	1.309 屋敷	F
近世の村高※				1645年→	67	
◎荒川保	①22. 花立村	集村 4	1	123.823	154.223	A
近世の村高※				1645年→	130	

◎色部分と黒川分の相給。※正保二年(1645)の「越後国絵図」の村高、『新潟県地名』平凡社より。引用小文字の数字は東大出版会本の通し №。①⑤は細い朱線で区分された組の番号を示す。

一つの地域的組織体、地域社会をまとめ上げてゆく接着剤にも似た役割を、公領がになっていたことを示すのである」(注85)。

石井進氏の指摘と史料3—「但向後若荒河之流……雖流入庄内、於河者為保領進退」を踏まえると、荒川保の最大の権益は、荒川の河川交易流通と鮭漁を中心とする内水面漁業からの収益だったと言いうことが出来る。鎌倉期の荘保境界相論の結果、荒川の領有権と支



図 25—「瀬波郡絵図」の貝付村と花立村

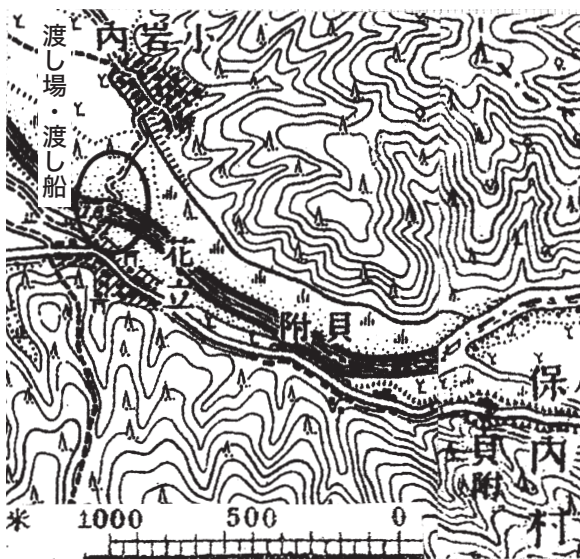


図 26—大正期の貝付集落と花立集落／1914 年発行、大日本帝国陸地測量部五万分の一「中條」の一部を 2 倍に拡大。



図 27—貝付集落と花立集落の航空写真／Google マップより引用

配権は荒川保地頭の河村氏が確保した。旧荒川保域が色部領に編入された 16 世紀以降も、荒川河口部の渡し場の権利・権益は、旧保域の桃崎村が継続保持していたと見て大過ないであろう。

「塩谷—桃崎」の渡船料を示す史料は無いが、桃崎村の上流の「花立村—平林・宿田」間の永禄六年(1563)の渡船料は 1 人当たり 5 文であった(注86)。桃崎村は文禄年間以前は(3 貫 500 文 ÷ 5 文) = 700 人分の渡船料収入を色部氏に上納していた。天正十九年(1591)の津輕鷹の移送の際には桃崎村が渡船役を勤めた。十八年十一月の豊臣軍と上杉勢の行軍では、色部領の渡し場の全ての村が動員されたであろう。渡船役を勤めた村は沢山の渡船料を受け取った。

矢田俊文氏は、桃崎と塩谷の集落は、農業ではなく、流通や漁業を生業の中心としていたと指摘したが、桃崎村の場合は、渡し場の渡船料収入が生業の支柱であったと推定される。桃崎村が郡絵図割書で「本納なく候」(史料 q)とされていたのは、主要街道の渡船役と渡船場警固役を公役として勤めていたからである。後述の花立村と同様に、渡し場の権益は、旧荒川保域の桃崎村が保持していた(注87)。桃崎村は、軍事的な役割が低いので、村町の区分では「下」に、小荷駄隊役を勤めた塩谷村は「中」に区分されている。

貝付村と花立村 花立村は郡絵図では 4 軒の集村に描かれている。荒川河口部へ向かう道と旧奥山荘黒川に向かう道の分岐点に当たる。花立集落の現地は、1 本街路沿いに短冊地割型の妻入りの家屋が並ぶ街村形態で、宿町の景観をとどめている。花立集落の西側に貝付集落が隣接している。現在の貝付集落は、1967 年の羽越水害の被害で全村で現在地に移転してきた(注88)(図 27)。現在の集落規模は、貝付集落の方が花立集落の 2 倍程大きい。

表 14 の下段は花立村と貝付村の数値データの比較表である。郡絵図では、貝付村には狭隘な畑だけが描かれ、水田は描かれていない。文禄期の貝付村の郡絵図の割書—「貝付村 下 色部分 本納 合式斗 屋敷 縄ノ高 合壺石壺升九合 家合拾六間」(史料 r)は、郡絵図の景観と符合している。貝付村は、1 軒当たりの縄ノ高は 7 升と僅少であり、役負担の内容が不明な F 型に分類される。貝付村は、両側から山地が迫る、荒川流域のボトルネックに立地しており、米沢街道と荒川舟運での輸送を生業とする特殊な村だったと推定され、領主の色部氏への年貢は屋敷にかけられた米 2 斗だけだった。貝付村は、花立村と並存する宿町で、諸役を負担する 16 軒の家は、軍事物資などの輸送の雑務を勤めたのであろう(図 25・26)。

花立村は、割書—「はなたて村 下 色部分 黒川分 本納 合参拾石四斗 縄ノ高 合百貳拾参石八

斗式升三合「家屯間」(史料s)から、1軒の地侍家が約124石の縄ノ高=免除給付高を宛給されて、騎馬兵士役を勤めるA型に分類される。「瀬波郡絵図」では「A型=騎馬兵士+徒歩の従兵=15石以上」と仮定して分類した。割書を素直に解釈すると、花立村で騎馬兵士役を勤めた地侍家は1軒であり、1騎の騎馬兵士が数十人の従兵を従えたことになる。郡絵図に描かれた色部氏の膝下の平林・宿田との間の渡船場は、荒川の支配権を継承する旧保域の花立村の管理下にあったと推定される。大正期の地形図には、花立集落と対岸の小岩内集落とを結ぶ渡船場が記されている(図26)。花立村は、「騎馬兵士+従兵」の軍役と併せて渡船役も負担していた(図25)。

花立村の文禄期の郡絵図での村高は、縄ノ高約124石と本納高30.4石の合計の154石余になる。正保二年(1645)の国絵図の村高130石との差額は-24石余になり、江戸初期に村高が減じているが、縄ノ高との比較では+約6石になる。文禄期の花立村は、渡船役と軍役負担の縄ノ高の約124石だけでも1645年の村高130石とほぼ同額になるので、色部氏と黒川氏に年貢をほとんど貢納していなかったことになる。

1軒の地侍家と約124石の縄ノ高は、村全体の軍役負担を村長に集約した便宜的な数値である。花立村の中途半端な数値の処理も、「瀬波郡絵図」が未完成であったことの証左の1つである。花立村は荒川の渡船料と宿町の稼ぎが、貝付村は宿町と米沢街道・荒川舟運での手間賃稼ぎが生業の中心であった。両村は、戦闘能力は低くて、村町の区分では「下」に位置付けられている。

せきかわくち村とせきしも町 荒川中流域の村町の中で、最も特異な存在が35せきしもまち(下関宿)と37せきかわくち村(上関宿)の併存である。2つの町場は中心部からの計測で約600メートルほど離れているが、現地ではほとんど一体化しており、近世には両村町はともに米沢街道の本宿になっている(図22・30)。上関宿が上十五日間、下関宿が下十五日間宿役を勤める定めであったが、後には下関宿だけが宿役営業を行うようになった。上関宿には村上藩の口留番所が置かれて、足輕藩士の清水氏が派遣されて土着していた(注89)。

「せきしもまち」と「せきかわくち村」は奥山荘北条の黒川領に属していた。上関には「桂関」が置かれて、鎌倉幕府が筑後国三潴荘(福岡県久留米市三潴町)出身の三潴氏を関守に任命したと言う。三潴氏は、三浦一族の和田義盛が三潴

荘の地頭職を得て三潴氏を現地荘官に任用し、義盛の実弟の佐原宗実が奥山荘の地頭職を得たことから、上関に来住したと推定されるが、来住の時期は不明である。三潴氏は、上関に城館を築いて荒川上流の左岸と大石川流域を支配した。慶長三年(1598)の上杉景勝の会津移封に伴い、三潴氏は会津領へ移住した。上関城館跡には口留番所役人の清水氏が居住して番所役を勤めた(注90)。上関は荒川舟運の終点でもあり、川番所も設置されていた(注91)。上関の町並みは、荒川の川湊に向かって延びており、郡絵図にもその形態が描かれている(図28～31)。

「せきしもまち」・下関宿は、関川村の中心の町場であった。中世には黒川氏支流の下氏(関氏とも称した)が本拠地にして、関川村の大半を支配した(注92)。隣接する2つの宿町は、上関は関所の軍事的・政治的な機能を中心とする宿場として成立し、下関は関川村一帯の物流と交易の中心の宿町として成立した。上関の領主は鎌倉幕府が任命したと伝える関守の三潴氏であった。下関の領主は奥山荘地頭の三浦和田一族の支流の下氏であった。2つの領主家は、黒川氏の支配下に属していたが出自と系統が異なっていた。三潴氏と下氏は、郡絵図では見えないが、「貝数目録」には記載されている(注93)。上関の知行と領主権は色部氏が継承した。三潴氏と下氏に付いては六章1節(3)で詳論する。

表15は②組の「せきしもまち」と「せきかわくち村」の数値の対比データである。関川村一帯の村町の軍勢の部隊編成は下関と上関を中心に行われた。物流と交易を中心に成立した下関は、「非戦闘員の小荷駄隊」の軍役を勤めるC型に分類される。軍事的・政治的な機能を中心に成立した上関は、「足輕+小荷駄隊」の軍役を勤めるBC型に分類される。軍役・諸役負担に対する免除給付高の「縄ノ高」で比較すると(上関139.336石÷下関99.514石=1.4)で、上関の軍役負担は下関の1.4倍にもなっている。しかし、領主への年貢高の「本納高」で比較すると、下関の36.415石と上関は29.5石はそれ程の格差はない。上関村は村高のほとんど全てを軍役負担に対する免除給付高に充当していたのである。

「徳川の平和」のもとで軍役の負担が解除されると、郡絵図の約50年後の1659年の検地高では、下関町の村高が約136石から約739石に5倍以上も増加するの

表15—②組の上関と下関の比較 ※万治二年の検地高(注89)

領主と地区	町場・集落	郡絵図の家数	家軒	a縄ノ高 石	a+本納高	型
色部分奥山荘	35. 下関町	街村形態 8	20	99.514	135.929	C
近世の村高※				※1659年→	738.758	
色部分奥山荘	37. 関川口村	街村形態 9	22	139.336	168.836	BC
近世の村高※	上関村			※1659年→	264.745	

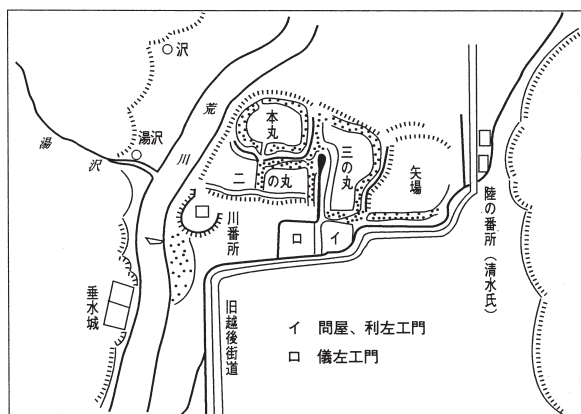


図 28—上関集落と上関城跡・川番所の略図／『小国の交通』より引用 (注 68)。



図 29—「瀬波郡絵図」の「せきかわくちむら」と「せきしもまち」

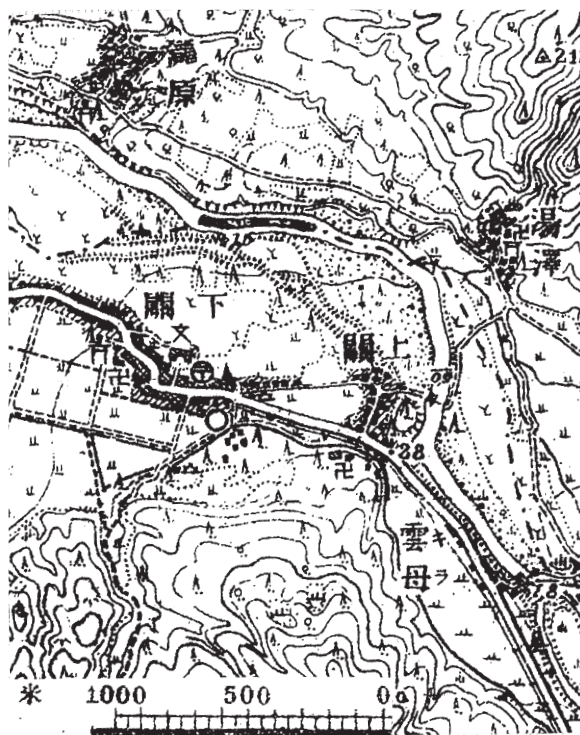


図 30—大正期の上関集落と下関集落／1914 年発行、大日本帝国陸地測量部五万分の一「小國」の一部を 2 倍に拡大。

に対して、上関村の村高は 163 石余から約 265 石へと 1.6 倍にしか増加していない。下関町の急速な村高の上昇は、下関町周辺での農地開発が進捗したことと、米沢街道での物流と交易が大幅に増加したことを示している (注 94)。

色部氏と複数の領主たち 旧奥山荘と旧荒川保の①組と②組は単独知行の領主は色部氏・黒川氏・垂水氏・加地氏の 4 氏、入り会いの相給地の領主は土沢氏・直江兼続・上杉景勝 (御料所) の 3 氏で、領主は合計 7 氏を数える。この領主の混在は、荒川保地頭の河村氏が、南北朝の内乱期に南朝方に付いて没落したことが原因である。荒川保は守護上杉氏に没収されて御料所となり、上杉氏の代官支配となった。その後一時期加地氏が支配した。色部氏が旧荒川保の一部を支配するようになったのは大永年間 (1521～27) からで、荒川保全体が色部領に編入されるのは永禄六年 (1563) に旧荒川保の「田帳の日記」を引き継いでからである。旧荒川保全体に対する段銭などの課税権は、上杉謙信権力の支援のもとで色部勝長が掌握したが、各村町の支配権は旧来の領主が保持していた (注 95)。

黒川氏の所領は、単独知行地が 16 カ村、相給地が 5 カ村である。16 カ村の単独知行地の領有は、色部氏の 19 カ村に次ぐ地位である (表 16)。黒川氏の単独知行地は荒川の左岸・南岸に集中する。大石川流域では色部氏と黒川氏の単独知行の村が入り交じっている。このことは黒川氏が、旧奥山荘北条の黒川領を足掛かりにして、旧荒川保域内に所領を獲得したことを示している。奥山荘の南側に隣接する加地荘地頭の加地氏の所領は、単独知行地が 2 カ村、相給地が 2 カ村である。加地氏の 4 ヶ所の所領は荒川保支配時代の名残りであろう。

垂水氏と土沢氏は荒川保地頭の河村氏の支族である。本宗家の河村氏は南北朝の内乱期に南朝方に付いたために没落した。2 氏はなんとか困難を乗り越えて生き残ったが、所領は大幅に削減されたと推定される (注 96)。表 17 は垂水氏と土沢氏の所領のデータで、両氏の所領は対照的な存在形態を示している。垂水氏の所領は、旧荒川保域の荒川の中流から上流域にかけて



図 31—上関集落と下関集落の航空写真／Google マップより引用。

の右岸・北岸にまとまっている。8カ村は全て垂水氏の単独知行地であるが、いずれも小村で、本納高の合計は23石余に過ぎない。軍役と諸役負担に対する免除給付高の「縄ノ高」の合計は117石余で、本納高の5倍にも達する。戦闘部隊はA型が1カ村、BC型が2カ村に過ぎず、小荷駄隊のC型が2カ村、在村のD型が3カ村であり、戦闘能力はあまり高くない。1軒当たりの縄ノ高の平均は4石である。村高を2氏相給は1/2、3氏相給は1/3で案分して集計すると、土沢氏の知行高は合計1,150石程になり、垂水氏の140石との格差は歴然である。

垂水氏の所領が単独知行地であるのに対して、土沢氏の4カ村の所領は全てが相給地で荒川の下流域に点在する。うち3カ村は村高が300石を越える平野部の

大村である。色部氏との入り会いの9かなや村は、A型の騎馬兵士役を負担する家数が52軒で、縄ノ高が1,117石の旧荒川保域で最大の村である。土沢氏の相給地の4カ村は、「騎馬兵士+徒歩の従兵」を勤めるA型が2カ村、「徒歩・足軽部隊」を勤めるB型が2カ村で、戦闘部隊の中核の一部となった。

25土沢村は土沢氏の名字の地であるが、縄ノ高約516石、家数52軒でBC型の同村は、直江兼統と加地氏の相給になっている。土沢集落の背後の山地に土沢城跡があるが、土沢氏は名字の地を没収されており、16世紀後半には色部氏の支配下に組み込まれていたであろう。一方の垂水氏は、「垂水の湯」と呼ばれた名字の地の55ゆ村の垂水館を保持していた^(注97)。

上杉景勝の御料所は4カ村で、いずれも相給地である。御料所は守護直轄地時代の代官支配の痕跡で、景勝権力が新規に設定した所領ではないと推定される。直江兼統の所領は、土沢村の加地氏との相給地の1カ村だけである。土沢氏から没収して御料所にして土沢村の半給分を兼統に宛給したのであろう。表16で単独知行地と相給地の村高を比較すると、「単独2、

表16―「瀬波郡絵図」①②組（旧奥山荘と旧荒川保）の領主と知行地

	a村町数	b家数	c本納高	d縄ノ高	e+d=e	e+a=f	d+b=g
色部分	19	123	165石	1147	1312	66.8	9
黒川分	16	62	320	668	988	61.8	11
垂水分	8	29	23	117	140	17.5	4
加地分	2	10	42	187	229	11.5	19
単独知行の集計	45	224	550	2119	2669	59.3	9.5
色部・黒川入会	3	50	191	802	993	331	16
色部・土沢入会	2	63	412	1476	1888	944	23
色部・御料所入会	3	35	155	746	901	300	26
加地・色部入会	1	12	20	134	154	155	13
加地・直江入会	1	52	—	516	516+α	—	10
色部御料所黒川入会	1	17	75	194	269	269	15.8
黒川色部土沢入会	1	27	75	294	369	369	11
不記（土沢→藤沢村）	1	5	17	73	90	90	18
相給入会地の集計	13	261	945	4235	5180	398	16

e=村高、□は5を入れ、四捨五入した。以下同じ。f=平均村高、g=1軒当たりの縄ノ高

表17―垂水氏と土沢氏の所領の比較 ◎垂水氏の名字の地・居住地

	b家数	c本納高	d縄ノ高	e+d=e	d+b=g	型
垂水単独知行						
27.あか谷村	2	3	32	35	17.5	A
33.打あかり村	10	1	22	23	2.2	BC
51.八口村	2	0.3	8.8	9.1	4.4	C
53.小見村	3	6	20	26	8.7	BC
54.うゑの山村	3	1	6	7	6	D
◎55.ゆ村	5	11	22	33	4.4	C
56.さわ村	3	0.65	3.5	4.2	1.2	D
57.きゝみだ村	1	0.2	2.8	3	2.8	D
8カ村	29	23.2	117.1	140.3	4	
土沢・色部入会						
9.かなや村	52	301	1117	1418	21.5	A
16.なわり村	11	101	359	460	32.6	A
2氏相給、2カ村	63	402	1476	1878	28	
土沢・黒川・色部氏入会						
15.かちやの村	17	75	294	369	17.3	B
土沢・御料所入会						
65.こゐわ内村	7	73	100	173	14.3	B
3氏と御料所の相給2村	24	148	394	542	16.4	

669石←→相給5,180石」となり、圧倒的に相給地の方が多い。

旧荒川保域と旧奥山荘域は、16世紀後半に色部領に確定した以降も、旧来の領主が各村町を領有していたので、色部氏の支配権や軍事指揮権が直接的に貫徹していたとは言えないだろう。色部氏の①②③組に対する支配権は、「上杉景勝・直江兼統→村上城主大國実頼・城代春日元忠→色部長真→①②③組の村町の領主」と言う、上杉氏の権力構造の中でしか機能しなかった。

六、「文禄三年定納員数目録」と瀬波郡絵図

本章では、大川領、大國領、色部領の軍役と諸役負担体系に付いて分析する。大川領は大川氏の単一・単独知行だが、大國領は大國氏と鮎川氏の混在、入り会いの知行、色部領は色部氏と黒川氏、その他の諸氏との混在、入り会いで複雑な知行状況になっている。以下、「瀬波郡絵図」の各領主の知行地・知行高と文禄三年（1594）に上杉景勝権力が各家臣から提出させた「文禄三年定納員数目録」（以下「員数目録」と略記）

表 18—色部氏「知行定納覚」の集計 (注 101)

通しNo.・村町名	定納高 石	知行人	通しNo.・村町名	定納高 石	知行人
1. 62. 宿田村	6 2 6. 4 2	◎色部氏単独	1 9. 女河村★	5 6. 4 8	下を合算 ▽色部加地
2. 81. 牛屋村	6 3 7. 1	△色部・牛屋氏	59. 若山村		▽
3. 76. 桃河村	3 1 0. 1 6	□色部・大國氏	52. 高田村		▽
4. 72. 松沢村	1 0 1. 3 5	◎	70. 蛇喰村		▽
5. 71. 牧目村	2 6 1. 8 7	◎	69. 中屋敷村		▽
6. 82. 田中村	3 8 5	◎	67. 朴坂村		▽
7. 75. 飯岡村	3 0 4. 3 6	◎	68. 宮の前村		▽
8. ※浦田村	2 9 6. 2 9	—不明	66. 桂村		▽
9. 84. 八日市村	9 0. 5 1	◎	2 0. 関村★	3 5	下を合算
1 0. 87. 新田村	3 8. 0 8	? 推定◎	37. 関川口村		◎
1 1. 74. 山田村	1 6 9. 0 8	◎	38. 六本杉村		◎
1 2. 9. 金屋村	2 3 8. 1 5	◎色部・土沢氏	50. はた村		◎
1 3. 13. 山口村	3 8 2. 1 9	◇色部・御料所	48. 大内瀬村		◎
1 4. 83. 岩舟町	2 9 5. 1	◎	45. 大石村		◎
1 5. 253. 栗島	1 1 0. 1	◎	39. 蔵田島村		◎
1 6. 77. 塩谷村	肴役	◎	2 1. 14. 酒町村	1 3 2. 9 5	◇
1 7. 1. 桃崎村	渡役	◎	2 2. ※中目村	2 3 8. 0 5	—不明
1 8. 23. 貝付村	1 7 1. 8	◎	合計村町数	定納高合計	
※こう野村	一上と合算		3 4 カ村町	4, 8 8 0	

※郡絵図に見えない村町名。★下記の村々の集合地名。

の内容を可能な限り比較対照して分析する (注 98)。

1. 色部領の知行体系

(1) 「知行定納覚」と郡絵図割書

「知行定納覚」色部氏に関しては、「員数目録」の原材料とされる「文禄三年色部氏差出」(以下「知行定納覚」と略記)がある (注 99)。「知行定納覚」の定納高は、一定の土地を年貢賦課の対象として米高を以て表現したもので、近世の生産高・村高に相当する。小林式氏は、色部領では A 知行定納高と郡絵図の B 本納高とがおおむね一致することから、B 本納高は家臣から提出させた「知行定納高」に相当すると指摘したが、色部領では A と B の一致率は低いので、小林説は成立しない。「縄ノ高」は、各村町が負担する軍役・諸役に対する免除給付高の上限である。上限に達しない場合は、余剰分は各領主と上杉権力が収納して備蓄した (注 100)。

「瀬波郡絵図」での色部領は、中太の朱線で区分された①～⑤組で、郡絵図の右側・南側の約 1/3 に相当する (図 1・2)。郡絵図での村町数は、栗島を含めて 86 を数えるが、色部氏が提出した「知行定納覚」には、その中の 35 カ村町しか記載されていない (うち 3 カ村は郡絵図に不記載)。旧荒川保域の①組のこう野村は貝付村と、②組の関川村の荒川上流域の 6 カ村は「関村」に、③組の 7 カ村は「女河村」に一括されて、合計 22 カ村町にまとめられている (注 101)。郡絵図の割書にある黒川氏の単独知行地と相給地、垂水氏と加地氏の単独知行地、加地氏と直江兼統の相給地の土沢村は、色部氏の「知行定納覚」には含まれていない (表 18)。

色部氏と加地氏、牛屋氏、大國氏、土沢氏、御料所との相給地は、色部氏の「知行定納覚」に含まれてい

る。「知行定納覚」の相給地は、色部氏が実質的に支配していたと推定される。「知行定納覚」に一切含まれていない黒川氏と垂水氏は、「瀬波郡絵図」の中太の朱線の囲みで「色部領」と表示されているが、実際には領主権と自立性・独立性を保持したまま、色部氏と併存していた。

(2) 「文禄三年定納員数目録」と郡絵図割書

色部長真の家督 牛屋氏は、色部氏の二代目で越後国に土着した公長 (越後色部氏初代)

から、文永七年 (1270) に所領を配分されて、兄の長茂 (宿田氏) と一緒に分立した古い分家である (注 102)。南北朝内乱期頃の色部領は、色部条の惣領家と飯岡氏、牛屋条の牛屋氏と宿田氏、八日市村と有明村の浦氏、色部家後家比丘尼の悟了庵の所領から成り立っていた (注 103)。戦国期には庶子色部家の長継が分家している (注 104)。

永禄十一年 (1568) 三月から武田信玄と結んで上杉謙信に反抗した「本庄繁長の乱」で、謙信方の色部勝長は十二年一月十三日に討ち死にした。繁長は二月二十七日に陸奥国会津の葦名氏と出羽国米沢の伊達氏の仲介で、嫡子の千代丸を人質に差し出す条件を受諾して謙信に降伏した。謙信は、勝長の功績に報いて、嫡子の弥三郎顕長を家督に就けて、上杉家中で顕長を本庄氏の座席よりも上位に置くことを決定した (注 105)。渡邊三省氏は、顕長は病弱で色部家当主の地位にあったのは極めて短期間だったと推定している (注 106)。顕長は、「天正三年 (1575) 上杉軍役帳」が終見で、「鎧 160 人、手明 20 人、鉄砲 12 丁、大小旗 15 人、馬上 20 騎、合計 227 人」(史料 4) の軍役を負担している。田島光男氏は顕長から弟の長真への家督の交替を天正四年以降と推定している (注 107)。

「色部氏年中行事」と色部氏分家 戦国期の北越後の国衆領主、色部氏の在地の年中行事の記録である「越後色部氏年中行事」(以下「色部氏年中行事」と略記) の前半部分、正月枕飯と正月行事の中で確認される領主の色部氏と諸階層との主従制的な結合を示す記録は、戦国末期の色部家の当主長真の死後の天正二十年 (1592) から会津移封の慶長三年 (1598) 頃に作成された。記事の内容の年代は、16 世紀後半から末期にかけてと推定される (注 108)。

「色部氏年中行事」の年始の御礼出仕の中で、直近の分家の庶子色部家と古い分家の牛屋・飯岡家には殿

の尊称が付けられているが、浦家には殿の尊称が付かない。「一、同五日ニ御出仕の衆御肴の次第……一、浦右京亮参られ候時」(史料5)とあり、渡邊三省氏は、浦家は近親意識が薄れて、分家扱いではなくなっていたと指摘したが、浦家などの分家たちは、以下に述べるように色部家中に包摂されていた訳ではない(注109)。

庶子家の色部右衛門尉殿は正月二日に、浦右京亮と飯岡刑部大輔殿は五日に、牛屋右近丞殿は七日に、平林の色部館に年始の御礼に出仕した。牛屋殿の正月出仕に供奉してきた者たちは、「彼の右近丞殿家中長敷ニ御酌にて下され候」(史料6)と「家中」と明記されている(注110)。牛屋殿は分家の中でも別格の扱いであり、史料6の後に「一、同七日、牛屋衆おうぼんの事、ならびに連座の次第の事」(史料7)の記事が続く。牛屋殿の榊飯儀式の場所は明記されていないが、七日は牛屋殿だけしか出仕していないことと、御館様と牛屋右近丞殿との対面、年始の儀礼が終了した後に続けて、史料6の御館様の御酌での酒振る舞いと牛屋殿の榊飯儀式の記事が続くことからすると、色部館の別室で御館様も参列して、牛屋殿の正月榊飯の儀式が行われたのであろう。御館様の牛屋家中への御酌は、牛屋殿の榊飯儀式の中で行われたと推測されされる。「長敷」は菫草の筵に縁を付けた「薄縁」のことである。牛屋殿家中の榊飯儀式の場は、板の間に薄縁を敷いただけの簡素な空間だった。



図 32—「瀬波郡絵図」の平林と宿田村

石瀬の青龍寺(新潟市西蒲区・旧岩室村)から届けられる三カ条吉書には、越後色部家の始祖である公長の靈魂が祈り込められていた。青龍寺僧が三カ条吉書を読み上げる正月吉書始めは、色部家当主、色部家中、領民の安寧と五穀豊穰を神仏と誓約する、最も重要で厳粛な武家儀礼であったが、分家たちは、正月一日の色部家中の榊飯の儀式にも、三日の夜に色部家中と御百姓衆が参列する榊飯と吉書始めの儀式にも参加しなかった(注111)。16世紀中頃の各分家は、色部氏とは別個の家中を構成しており、領主権と自立性を保持していた。

宿田村と平林の混同 「瀬波郡絵図」④組の色部条「63. 平林 62 宿田村 上 同牧目村……牧目村ヨリ宿田村へ七里」(史料t)の「同牧目村」は「71. まきの目村」との重複の誤記である。「牧目村ヨリ宿田村へ七里」の割書は、郡絵図の作成者が平林と宿田村を混同していたことを明示する。郡絵図は、平林と宿田村を混同したために、街村型の平林の左下の宿田村を名無しの村にしてしまった。宿田氏は16世紀後半頃には断絶していたので、「年中行事」には宿田殿の正月の御礼出仕の記事は無い。宿田殿の所領は、天正文禄期頃には色部家の当主・惣領家に包摂されていたために、平林と宿田村を混同したのであろう(図32・33)。

「知行定納覚」は、文禄三年(1594)に色部庶子家の色部右衛門佐長影と家中筆頭の田中左近将監の連名で上杉景勝権力に提出された(注112)。文禄三年の段階では、庶子家の色部右衛門佐家は惣領家の家中に包摂されていた。表19は牛屋条⑤組の「知行定納覚」と郡絵図の割書を対比したものである。最初の疑問点は、牛屋条9ヵ村町のうち「知行定納覚」で色部領と申告



図 33—平林集落と宿田集落の航空写真／Google マップより引用。

表 19—色部領⑤組牛屋条の村町の「定納知行覚」と郡絵図の比較

	塩や村	袋村	長面村	新保村	牛屋村	田中村	岩船	八日市	三日市
定納知行覚	○	—	—	—	○	○	○	○	—
郡絵図	色部分	牛屋同	色部分	—	色部分	色部分	—	色部分	—

○記載有り、—記載無し

されたのは5ヵ村町に過ぎず、4ヵ村町は不記載なことである。次ぎの疑問点は、袋村（旧神林村福田）の郡絵図の「袋村 中 牛屋同」（史料u）の割書である。「牛屋同」の同は、牛屋村の前の塩や村の割書—「色部分」に該当し、「牛屋分・色部分」の意味になるのであろう。袋村は「知行定納覚」には記載されていないので、郡絵図の書き役は袋村の領主は牛屋氏と判断したのであろうが、色部家中とは別に分家の家中が併存することは、色部氏の領主権・支配権の不完全性を明示することになり、不都合であったために、牛屋村の割書に混乱が生じたのである。

牛屋殿の本拠地、名字の地は「牛屋村」である。「知行定納覚」の作成過程では、「牛屋村を色部分」と申告することは調整が付いたのであろうが、「定納知行覚」に不記載の袋村・長面村・三日市村は牛屋殿が、新保村は新保四郎左衛門が領主権を主張したので、「知行定納覚」には領主名が記載出来なかった。牛屋殿が主張を取り下げた袋村・中面村は郡絵図に「色部分」と記載されたが、新保村と三日市村は調整が未了であり、岩船町は色部氏が軍役と諸役を賦課していないことが判明したために、「色部分」とは記載されなかったのである。

史料uの「袋村 中 牛屋同」の不自然な割書は、分家の牛屋殿の領主権が色部氏と併存していたことを

暗示し、色部氏の本領の牛屋条に於いても、色部家当主の一元的な支配権が未成熟であったことと、「瀬波郡絵図」が未調整・未完成の状態であったことを示唆する。牛屋殿は、正月七日に平林城の色部館で色部家当主の御館様と13名の家中が参列する独自の晩飯の儀式を行っていた^(注110)。分家たちは、一定の自立性を保持しており、牛屋氏は特に自立性が顕著だった。牛屋氏の自立性の強さが、牛屋条の「知行定納覚」と郡絵図割書の不完全さの要因と背景であろう。

(3) 員数目録と色部領

員数目録と色部家中 「文禄三年定納員数目録」は、文禄三年（1594）に上杉景勝・直江兼統が家臣たちに命じて提出させた所領知行高と軍役負担のリストであるとされている^(注113)。伊藤は別稿1で以下の点を指摘した—「員数目録」は、太閤秀吉権力・豊臣政権から課せられた、肥前名護屋・朝鮮半島での軍役負担と支城・番城の在番没を、上杉家中で各家臣に割り当てるためのリストである。負担する兵種と軍役高の割り振りには、在地の村町と組・郷と戦国大名の上杉権力との間での、経験と由緒を積み重ねた長い調整期間が必要だったはずである。このシステムは、景勝の段階で急遽作り出された訳ではなく、長く戦いが続いた「戦国の世」の中で、先例と慣習法を踏まえつつ、長尾為景から上杉謙信・景勝の時代にかけて徐々に構築されていったのであろう。「員数目録」は、既に確立されていた動員基準に基づいて策定されたのであり、郡絵図が「員数目録」の策定のために作成された訳ではない^(注114)。

戦国末期の色部家の当主であった長真は、天正六年（1578）からの八年の「御館の乱」、九年から十五年の「新発田重家の乱」で上杉景勝方として活躍して忠節を尽くした^(注115)。十八年の秋から翌十九年の春まで出羽国大森城（秋田県横手市大森町）に在城して、出羽国の仕置と検地、一揆の鎮圧を担当した^(注116)。二十年は太閤秀吉から命じられた、朝鮮出兵の上杉景勝の軍勢5,000人と共に、肥前名護屋城（佐賀県唐津市）の景勝・直江兼統の陣城に詰めていたが、病に倒れて帰国を許された。京都伏見の上杉景勝屋敷で療養していたが、嫡男龍松丸（光長）と直江兼統の次女との婚約と、自分の娘を兼統の養女にする縁組みを懇願する遺言を残して、同年九月十日に死去した。龍松丸はまだ六歳

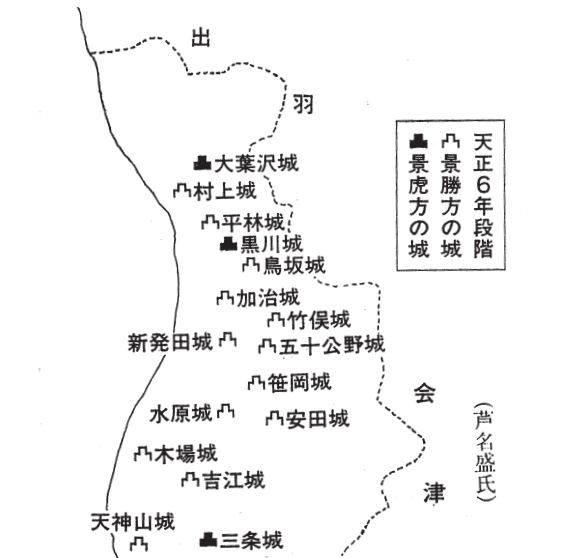


図 34—御館の乱での中郡～揚北の景勝・景虎方の城郭配置 (注130)

だった。兼統との縁組みによって、色部家中の存続と子供たちの栄達と幸福を願う長真の親心が切ない。色部龍松丸と色部家中は、長真の忠節と功績、懇願によって、執政の直江兼統の後見と保護の下で存続し続けることになった^(注117)。

龍松丸は平林の色部館で養育されていたのであろうか？ 姉と一緒に養育されたのであれば、春日山城の直江屋敷で養育されていたのではないだろうか。龍松丸と姉は人質・証人であり、色部家中は直江家中に実質的に包摂されていたと見て良いだろう。文禄三年に龍松丸は八歳になっていたが、まだ元服の年齢には達してはいなかった。以上の色部長真の事績と兼統後見の条件を踏まえて、色部氏の「文禄三年定納員数目録」の数値データを分析してみよう。色部龍松丸の記載が史料8^(注118)、平林在番の記載が史料9^(注119)である。〈 〉は脇付の注記。A～Dと①～⑨は伊藤の追記。

(史料8)「越後侍中定納一紙……A 二百九十二人 B 同(都合) 四千八百六十八石 C 色部龍松丸」。

(史料9)「色部同心 平林在番 ①一、A〈二人〉 B 三拾二石八斗 C 色部右衛門 ②一、AB 同 C 上 主水 ③一、AB 同 C 牛屋監物 ④一、AB 同 C 小島備後 D〈右ハ中国浪人〉 ⑤一、A〈三人三分〉 B 五拾六石 C 新保四郎左衛門 D〈右ハ新保駿河守子、母ハ新発田駿河守女也〉 ⑥一、A〈二人四分〉 B 四拾二石三斗 C 峯岸左衛門 ⑦一、AB 同 C 猿橋和泉 D〈右ハ出羽国江出奔、木崎相続〉 ⑧一、A〈二人三分五厘〉 B 二十石五斗 C 池鱒〈ハタ〉鴨之助 D〈右ハ池端トモ有り〉 ⑨一、AB 同 C 土沢左京」

記載内容は、A＝軍役を負担する人数、B＝負担する軍役の石高、C＝領主名、D＝特記事項の4項目に分類される。色部龍松丸は、平林城の在番になっていないので、後見人の直江兼統の春日山城の屋敷に居住していたのではないだろうか。龍松丸が負担する軍役はA292人、負担する軍役の石高はB4,868石である。B÷A＝1人当たりの軍役高は約17石になる。「平林在番衆」は9名の地侍である。軍役を負担する人数Aは合計20.8人、負担する軍役の石高Bは合計312.8石になる。B合計高÷A合計人数＝1人当たりの軍役高は約15石になり、龍松丸の約17石と近似する。「員

数目録」での柿崎氏の1人当たりの軍役高は12.6石であった^(注120)。直江兼統の庇護下の色部家中は、春日山城から遠く離れた北越後の領主であるにも拘わらず、景勝と兼統に忠節を示すために割高の軍役を負担したのであろう。

垂水・下・三瀧氏 色部領の①②組の旧荒川保域と旧奥山荘域には、土沢・垂水・下・三瀧氏の4名の地侍がいた。荒川保地頭の河村氏の末裔で、4氏のなかで最大の土沢氏は、「員数目録」では「平林在番役」を勤めていた。垂水氏も荒川保地頭の河村氏の末裔であるが、領有する8ヵ村はいずれも小規模で、本納高が23.2石、縄ノ高が117.1石、合計の村高＝140.3石の小領主である(表17)。三瀧氏は、筑後国三瀧荘(福岡県久留米市三瀧町)出身の武士で、鎌倉幕府が任じた上関の関守の末裔と言う。下氏は、奥山荘北条の領主、黒川氏の一族であるが、戦国期には黒川氏から離れて上杉守護家の被官として活躍していた^(注127)。垂水氏、下氏、三瀧氏は、イ「定納員数目録」とロ「越後分限帳」^(注128)に以下のように記載されている。〈 〉は脇付けの注記。()内は伊藤追記。

(史料10)イ「(信州飯山城)岩井衆岩井備中守同心……一、〈三人〉同(五拾三石七斗) 垂水左衛門」、(史料11)ロ「小国在番衆……一、百五拾石 垂水左衛門」。

(史料12)イ「(庄内)大山衆……一、〈八拾八人〉同(千四百五拾八石) 下 新兵衛〈右ノ者伊賀守子、後次右衛門、其後対馬ト云〉」、(史料13)イ「(大山衆)一、〈二拾人〉三百二拾石 下 勘左衛門」。

(史料14)イ「越後定納侍中一紙……一、〈十一人〉同(都合)百八十三石三斗 三瀧左近助分〈後松本大炊同心ニ成ル〉」、(史料15)イ「(庄内大宝寺城)本庄越前守同心……一、〈八分〉同(拾四石二斗) 三瀧佐左衛門」。(史料16)ロ「越後定納侍中一紙……一、〈十一人〉百八十三石三斗七升七合 三瀧左近助」

垂水左衛門は、史料10では信州の飯山城将・岩井備中守の同心となり、53石7斗の3人分の兵士役を勤めていた。史料11では大国但馬守実頼の本城、天神山城(新潟市西蒲区岩室・旧岩室村)の在番衆となり、150石の知行を得ていた。史料12の下新兵衛は、出羽国庄内の大山城(尾浦城・山形県鶴岡市大山)在番の大山衆となって、1,458石で88人分の兵士役を勤めていた。史料13の同族の下勘左衛門も大山衆となって、320石で20人分の兵士役を勤めていた。

表20 垂水・下・三瀧氏の「員数目録」での軍役負担

	垂水左衛門	下新兵衛	下勘左衛門	三瀧左近助	三瀧佐左衛門
人数	3人	8人	20人	11人	0.8人
軍役高	53.7石	1,458石	320石	183.3石	14.2石
1人の軍役高	17.9石	16.6石	16石	16.7石	17.8石

史料 14 の三瀧左近助は、183 石 3 斗で 11 人分の兵士役を勤めていた。同じく史料 16 では 183 石 3 斗 7 升 7 合で 11 人分の兵士役を勤めていた。史料 15 の同族の三瀧佐左衛門は、庄内大宝寺城（鶴岡市馬場町）の本庄越前守（本庄繁長とは別家）の同心となつて、14 石 2 斗で 0.8 人分の兵士役を勤めていた（注 129）。

北越後地域では、永禄十一年（1568）三月から十二年二月までの「本庄繁長の乱」、天正六年（1578）三月から八年八月までの「御館の乱」、九年五月から十五年十月までの「新発田重家の乱」と戦乱が続いた。「御館の乱」では、黒川氏は本家の中条氏との対立から景虎方に付いた。鮎川氏も本庄氏との対立関係から景虎方に付いたが、両氏とも上郡・中郡での両軍の本格的な戦闘には参戦していない（図 34・35）（注 130）。

出羽国庄内地方の支配を巡って最上義光と対立した本庄繁長は、十六年八月の「十五里原の戦い」（山形県鶴岡市）で最上勢を撃破して庄内の支配権を獲得したが、義光から豊臣秀吉へ「私戦停止令」違反で提訴されて、十八年に村上本庄領を没収改易された。これらの内乱と戦争の後始末と処分、本庄繁長の本領没収と改易によって、瀬波郡域では大幅な領主の変更と領

地の変動があった。繁長の跡は直江兼統の実弟の大国但馬守実頼が引き継ぎ、村上城には城代の春日元忠が入った。（注 131）。

垂水氏は、関川村の本拠地の「55 ゆ村」（関川村湯沢）を保持しており、色部家中には取り込まれずに、下氏と同様に上杉守護家の家臣になっていた。垂水左衛門は、守護権力を継承した上杉景勝・直江兼統の命令で、本拠地から遠く離れた信州飯山城と大国但馬守実頼の本城・天神山城の在番を命じられていた。垂水左衛門は、信州飯山領で 53 石 7 斗の知行地のほかに、蒲原郡の天神山城領でも 150 石の知行地を得ていた。

下氏の名字の地の「35 せきしもまち」（関川村下関）は、郡絵図では「黒川分」になっている。下新兵衛は本拠地を出羽庄内の大山城領に移したのであろう。下勘左衛門も本拠地を離れて大山衆になっていた。三瀧氏の由緒の地の「37 せきかわぐち村」（関川村上関）は郡絵図では「色部分」になっている。三瀧左近助は、本拠地の関川村上関を離れて、上杉景勝の家臣になっていた。三瀧佐左衛門は庄内大宝寺城将の本庄越前守（本庄繁長とは別氏族）の同心になっていた。下氏と三瀧氏は、垂水氏と同様に上杉景勝・直江兼統の命令を受けて、関川村の本拠地を離れたのであろう（図 35）（注 132）。

土沢氏以外の小領主 3 氏の上杉家の家臣化と移住は、景勝と兼統が色部氏の在地支配力を高めるために実施した施策であろう。3 氏の移住によって荒川流域の錯綜した領主と領地の混在状態は若干解消された。表 20 は垂水・下・三瀧氏の「員数目録」での軍役負担の一覧表である。1 人当たりの軍役負担高は、16 石～17.9 石と幅があるが、色部龍松丸の約 17 石とほぼ同額であることは興味を引かれる。

2. 本庄氏・鮎川氏処分と城郭破却

(1) 本庄氏と鮎川氏の処分

鮎川氏処分と大葉沢城の自分破却 三面川の左岸・南側の⑨組と海岸部の⑫組は大国但馬の単独知行地である。岩船瀧水系の⑦・⑧組も大国但馬の単独知行地である。大国領の最南端の⑥組の 9 カ村のうち、86 九日市村と 91 あり明村は色部分との相給地である。⑥組の 94 川内村は、④組の色部氏と大国氏の相給地の桃川村の「桃川ノは」（史料 v）で、色部分になっているので、桃川村はもとは色部氏の単独知行地であつたと推定される。⑥組の 87 新田村は領主・本納高・縄ノ高が不記載であるが色部領であろう。大国領の中核は、⑥～⑨組と⑫組の 5 組で、推定を含めて 56 カ村町ある（図 1・2）。

大国分と鮎川分が混在するのは、三



図 35—「文禄三年定納員数目録」の番城配置（注 132）

表 21—大国領・鮎川領・相給地の集計

組／村数	⑩組 1 9	⑪組 1 1	⑬組 1 0	⑮組 6	⑯組 1 3	合計 5 9	分類
大国分	2	4	8※	4	6※	2 4	A
鮎川分	2	3	1	2	2	1 0	B
大国＋鮎川	7※	2	1		2	1 2	C
鮎川＋大国	3	2			1	6	D
不明・不記	4		1		1	6	E

大国＋鮎川→C 大国＞鮎川、鮎川＋大国→D 鮎川＞大国と推計。※鮎川氏の知行没収地。

面川流域の⑩・⑪組、支流の高根川流域の⑭・⑮組、大須戸川の流域の⑬組の5組の59カ村町である。A 単独知行地は大国氏が ($24 \div 59 = 41\%$)、B 鮎川氏は ($10 \div 59 = 17\%$) で、鮎川氏は大国氏の半数にも届かない。相給地を大国氏優位 (C) と鮎川氏優位 (D) に分類して比較すると、D は C の半分になり、ほぼ A : B の傾向と一致する (表 21)。

天正六年 (1578) 三月から八年八月までの「御館の乱」の際に、鮎川盛長は、本庄繁長との対立関係から景虎方に付いて、本庄氏から本城の大葉沢城を攻撃されている。両氏の抗争は七年の六月頃には沈静化したようで、鮎川氏は八年四月には、景勝に中郡の戦況を問い合わせている。「御館の乱」の終了後に、鮎川氏

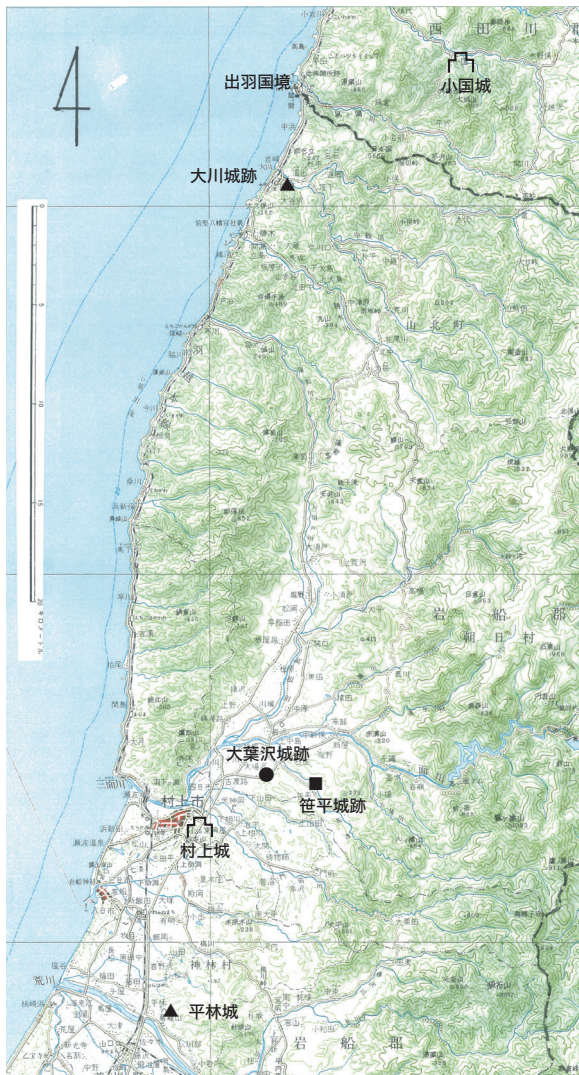


図 36—庄内併合関係の村上城と瀬波郡・庄内の城郭／2001 年発行の国土地理院 20 万分の 1 地形図「村上」の一部を使用。お城マーク＝文禄三年 (1594)、存置・現用の城郭

①天正八年 (1580) に自分破却した鮎川氏の大葉沢城跡 → 御館の乱の戦後処理。②天正十五年に自分破却した鮎川氏の笹平城跡「將軍嶺」 → 新発田重家の乱の戦後処理。③天正十八年に自分破却した色部氏の平林城・「加護山古城」 → 豊臣平和令違反。



図 37—①鮎川氏の大葉沢城跡／「瀬波郡絵図」



図 38—②鮎川氏の笹平城跡「將軍嶺」／同前



図 39—③色部氏の平林城・「加護山古城」／同前



図 40—④大川氏の藤懸り館・「ふる城」／同前



図 41—⑤本庄氏の「下渡が嶋古城」／同前

がどのような処分を受けたのかは、史料上では不明である（注 133）。

本庄繁長は、十六年六月に出羽庄内で最上義光勢を撃破した「十五里原の戦い」（山形県鶴岡市）を、義光から太閤秀吉へ「私戦停止令」違反と提訴された。繁長は、十八年（1590）に村上本庄領を没収されて改易されたが、史料上では改易の詳細な時期は不明である（後述）。郡絵図の大国分は、改易された繁長の所領を大国但馬守実頼が引き継いだものである（注 134）。



図 42—⑥本庄氏・大国氏の「村上ようがい」／同前

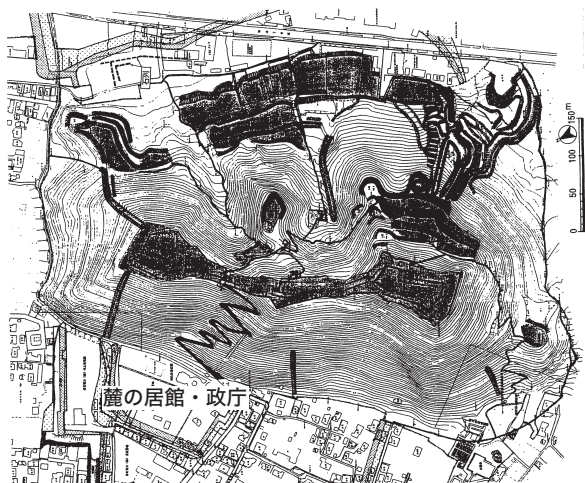


図 43—⑦村上城跡遺構図／『村上市史・通史編 1』

④天正十八年に自分破却した大川氏の藤懸り館・「ふる城」→豊臣平和令違反。⑤天正十八年に自分破却した本庄氏の「下渡が嶋古城」→豊臣平和令違反。⑥大国氏が本庄繁長改易後に村上城の大手口を東側から西側に変更した→豊臣平和令違反。⑦村上城跡遺構縄張り図／『村上市史・通史編 1』。図の上側・西側に本庄氏段階の遺構が残っている。

鮎川氏の所領が大国氏の半分程度以下の状態は、文禄四年（1595）の検地の結果であるが、鮎川盛長が、本庄繁長の半分以下の所領規模で、繁長に長年対抗することが出来たとはとても思えない。

鮎川氏の名の地は、三面川の支流の門前川沿いの⑩組の「129 下あゆ河村・130 上あゆ河村」で、戦国期には近隣の大葉沢村に城を築いて本拠地になっていた。下あゆ河村は、領主名は不記載であるが、「上あゆ河村 中 鮎川分 大国但馬分」（史料 w）と同じと推定される。⑩組の 141 大葉沢村は、「鮎川分 大国但馬分」（史料 x）と記載されているが、上中下の区分、本納高・縄ノ高は不記載である。鮎川氏の本拠地と名の地は、3 カ村とも大国氏との相給地になっているが、鮎川氏の方が先に記載されているので、3 カ

村は本来は鮎川氏の単独知行地だったと推定される。「瀬波郡絵図」では、大葉沢城跡は「城跡」とも表記もされないで、ただの里山として描かれている。鮎川盛長は、「御館の乱」で景虎方に味方したことへの処分として、所領全体の何割かを本庄繁長に割譲して、繁長の要求に従って大葉沢城を自分破却して、本城を笹平城に移したと推定される（図 36～38）^(注 135)。

鮎川氏処分と瀬波郡の城郭破却 129 下あゆ川村は、上中下の区分、領主名、本納高・縄ノ高の記載が無い。141 大葉沢村は「鮎川分 大国但馬分」（史料 x）とだけあり、他の記載は無い。このことは、文禄三年（1594）の「知行定納覚」の提出、四年の検地、五年の郡絵図作成の時点でも、鮎川氏領の処分が確定していなかったことを示している。「御館の乱」後の鮎川盛長に対する処分は、天正八年（1580）末頃までには実施されたはずである。下あゆ川村と大葉沢村の記載内容の未確定は、天正八年と文禄三年の間に鮎川盛長に対する再処分があり、その処分内容が未確定であったことを示している。

鮎川盛長の再処分の原因となった可能性がある北越後での内乱と事件は、イ ー 天正九年五月から十五年十月までの「新発田重家の乱」と、ロ ー 十八年の本庄繁長の改易事件の 2 つが考えられる。前稿では、通説に従って盛長再処分の原因を、ハ ー 十九年の庄内一揆への関与を疑われた繁長の改易への連座としたが^(注 136)、一揆への加担や扇動が原因であれば、家名存続や再興の可能性を残した改易処分で済まされる訳がないので、ハ ー 庄内一揆原因説は撤回する^(注 137)。

文献史料では、鮎川盛長の再処分の原因と時期をイカ口のいずれかに絞り込むことは出来ないが、郡絵図に描かれた「破城の景観」から山城破却の時期を推定することが出来る。「瀬波郡絵図」には破却された中世城郭跡が、①鮎川氏の大葉沢城跡、②笹平城跡・將軍嶺（史料 y）、③色部氏の平林城・「加護山古城」（史料 z）、④大川氏の藤懸り館・「ふる城」（史料あ）、⑤本庄氏の「下渡が嶋古城」（史料い）の 5 つ描かれている（図 36～41）。

「城跡」とも表記もされない①大葉沢城跡は、ニ ー 天正八年の「御館の乱」後の鮎川氏の降伏と戦後処理に伴う自分破城・破却である。文禄四年までには 15 年間程の時間的な経過があるので、大葉沢城跡は里山の景観になっている（図 37）。⑤「下渡が嶋古城」は、はげ山状態であり、郡絵図作成の文禄五年に最も近接するロ ー 十八年の自分破城・破却である。⑤「下渡が嶋古城」は、三面川の渡河点と旧羽州街道を押さえる、「村上ようがい」（史料う）の出城であり、十八年の本庄繁長の改易処分に伴って自分破却されたと推定される（図 41）。

③の色部氏の平林城・「加護山古城」と④の大川氏の藤懸り館・「ふる城」は、土塁・切岸などはそのまま、山城のシンボルである松の木を残しており、山城跡は再生の可能性を残していた。松ノ木以外の樹木はきれいに切り払われているので、⑤「下渡が嶋古城」と同様に、十八年の本庄繁長の改易処分に伴って、色部家中と大川氏が自らの手で自分破却したと推定される（図 39・40）。「瀬波郡絵図」では、郡絵図作成直近の天正十八年に破城・破却した城跡だけを「古城跡・ふる城」と表記したのである。

鮎川氏の②笹平城跡・將軍嶺は、松ノ木は切り払われているので、山城再生の可能性は残されていない。鮎川盛長は、本庄繁長への対抗から、九年五月から十五年十月までの「新発田重家の乱」で重家に味方した。「御館の乱」に続く景勝への二度目の反抗であり、厳しい処分を受けたことは想像に難くない。②「將軍嶺」は、十五年十月の重家討滅直後に自分破却したと見て間違いないだろう（図 38）。破却から文禄五年まで 10 年近く経過していた「將軍嶺」は、城跡と表記されることもなく、③④⑤よりも樹木が繁茂している^(注 138)。

鮎川盛長は、「新発田重家の乱」の処分後も笹平城跡の麓の屋敷に居住していたはずであるが、郡絵図では盛長屋敷を表示していない。頸城郡の雄族の柿崎氏は、「御館の乱」の当初に景虎に味方して一時断絶された。その後に景勝方に属して活躍して、領地の半分没収と景勝旗本の管理下の条件で再興を許されたが、「頸城郡東絵図」では柿崎家当主の居所・屋敷は表示されていない^(注 139)。

「新発田重家の乱」では、瀬波郡に近接する蒲原郡一帯が主戦場になった。盛長は、「御館の乱」では主戦場の上郡・中郡の戦闘には参戦しなかったので、乱後の処分と所領没収も軽微だったと推定されるが、「新発田重家の乱」では主戦場の近隣での反抗であり、景勝から厳しい処罰が下ったと推定される。「御館の乱」での軽微な処分と、「新発田重家の乱」で重い処分を続けて受けた結果、鮎川盛長の所領は、本庄繁長領（後の大国但馬領）の半分程度にまで削減されたのである。この盛長の領地半分没収の処分は、結果的に柿崎氏と同程度になっていることは興味深い。景勝は、家臣の反抗に対しては、家名存続を許して領地半知の処分が基本方針だった。

鮎川領の没収 小泉荘本庄は、13 世紀末頃に鎌倉幕府直轄の関東御領になり、幕府の高官たちが預所職と所領を獲得していった。北条氏・安達氏の被官になっていた三浦佐原氏の一族で、後に会津北方に土着した三浦新宮氏の一族の鮎川氏が、幕府の高官たちの現地代官として小泉荘本庄のあゆ川（相川）に土着して鮎

川氏を名乗ったと推定される^(注140)。幕府の高官たちは、平野部の豊かな村々を中心に、本庄氏が裁判で敗訴した土地を収公したはずであり、結果的に本庄領と鮎川領がモザイク状に混在することになった。

⑬組のリーダは下鵜渡路村であるが、16世紀前半に村上城に本城を移すまでは、下鵜渡路村の北隣り（郡絵図の左隣り）の猿沢城が本庄氏の本城であった^(注141)。郡絵図では本庄氏の旧本拠地の⑬組にも鮎川氏の単独知行地が2ヵ村存在する。このことは、鎌倉幕府の高官たちが、本庄氏の在地支配力を削ぐために、本庄氏の所領を蚕食して、本庄氏の所領の間に自分たちの所領をモザイク状に配置したことを明示している。

猿沢村は天正期には宿次の町場になっていた^(注142)。猿沢集落は、現在でも街道沿いの短冊形地割りで、妻入りの家屋が連続する町場の景観をとどめているが、郡絵図では普通の集落として描き、天正十八年（1590）に改易された本庄氏の旧本拠地の町場の繁栄ぶりを隠蔽した（図11・12・13）。

戦国時代の初め頃、15世紀後半の本庄北方地域での、本庄領と鮎川領の比率は不明であるが、仮に半々程度で混在していたと仮定すると、旧本庄領の大国領と鮎川領の単独知行と相給の村の数がほぼ同数の⑪組では、鮎川領の没収は行われなかったと推定される。両氏の単独知行の村数の乖離が著しいのは、⑭組「旧本庄分の大国分8：1鮎川分」、⑬組「旧本庄分の大国分6：2鮎川分」の2組であり、「新発田重家の乱」の戦後処理の処罰として、この2組を中心に鮎川氏の単独知行の村々が没収されて、本庄氏へ給付されたと推定される。

⑩組の相給地は、「大国＞鮎川」が7ヵ村、「鮎川＞大国」が3ヵ村である。⑩組では、鮎川氏の単独知行地を大国氏優位の相給地に切り替える手法で、鮎川氏の知行地を削減したことが復元される。領主名の不明・不記載は6ヵ村を数えるが、うち4ヵ村が鮎川氏の旧本拠地の⑩組に集中している。これらの村々は、鮎川氏と本庄氏との間での給分の分割比率が未確定であり、本来は鮎川氏の単独知行地だったと推定される。⑩組の下あゆ川村・上あゆ川村は鮎川氏の名字の地である。大葉沢村は、天正八年（1580）までは鮎川氏の本拠地で、大葉沢城（別名は鮎川城）があった。鮎川盛長は、十五年には八年以後の本城であった笹平城も

自分破却させられた。盛長の自立性は著しく低下していたと見て大過ないであろう。

(2) 本庄繁長改易事件

豊臣平和令と本庄繁長 天正十五年（1582）五月に島津義久を屈服させた太閤秀吉権力は、同年十二月に関東と奥羽の諸大名に対して「私戦停止」の「豊臣平和令」を発令した^(注143)。本庄繁長のもとには、連歌師の金山宗洗が使者となって^(注144)、同年十二月二十日付けの秀吉書状を持参して、「奥羽惣無事令」が伝えられた。宗洗は、翌十六年五月には山形城の最上義光に、九月には米沢城の伊達政宗に「奥羽惣無事令」を伝えている^(注145)。繁長の十六年八月に最上義光勢を打ち破った庄内の「十五里原の戦い」と、政宗の十七年六月に葦名義広を撃破した「会津摺上原の戦い」は、明らかに「奥羽惣無事令」に違反していた。十八年七月に小田原北条氏を屈服させた秀吉は、八月に会津黒川城に入り、奥羽仕置を執行して、政宗が葦名氏から奪った陸奥国会津・岩瀬・安積地方を没収して、政宗を会津黒川城から米沢城に退去させた^(注146)。

最上義光は、十六年後半頃に徳川家康を通じて秀吉に、本庄繁長の庄内併合は「奥羽惣無事令」に違反すると訴えた。秀吉側近の増田長盛と石田三成からの景勝宛の書状で、来春に最上氏と本庄氏を召還して理非を糺すことが伝えられた。景勝は、翌十七年に繁長に代わって、繁長の実子で大宝寺武藤家に入嗣していた千勝丸を上洛させた。千勝丸一行は六月十八日に京都に着いて、七月四日に秀吉との謁見を果たした。千勝丸は、十二日に参内して、綸旨で従五位下左京大夫の官途と出羽守の受領名を授けられ、義勝の名乗りを許されて、大宝寺武藤家の再興を果たした。義勝は、庄内の領有権を確保したが、上杉景勝の家臣でもあったので、庄内領は実質的には上杉景勝領に併合されたことになる。繁長は大宝寺武藤家の再興と引き替えに改易された形になった^(注147)。

上杉景勝は十四年六月に上洛して豊臣秀吉に臣従した。景勝は、豊臣政権の指示のもとで新発田重家の討滅を果たして、下郡平定を報告するために色部長真を伴って、十六年五月に再度上洛した^(注148)。景勝・兼続・長真・繁長は、十五年十二月に発令された「関東・奥羽惣無事令」の内容と論理を十分に理解していたはずである。繁長は、庄内平定が「奥羽惣無事令」違反に

表 22—「管窺武鑑」に見える地侍の地名と小嶋一族（注151）

軍勢の区分	A板屋古瀬衆	B山辺里衆	C側近の子息馬上
	岩沢⑭大、鵜渡路⑬鮎大、板屋古瀬⑬大 山辺里⑩大、小河⑩大鮎、有明⑥大色	岩沢⑭大 山辺里⑩大	岩沢⑭大、鵜渡路⑬鮎大 板屋古瀬⑬大
小嶋一族	小嶋飛驒守		小嶋左近、小嶋左衛門

⑭＝⑬組、以下同じ。大＝大國本庄領・相給、色＝色部相給、鮎＝鮎川相給。

なることを覚悟した上で、最上義光との決戦に及んだことになる。

長年にわたって庄内の大宝寺氏を影響下に置いて、実子大宝寺家の養嗣子入っていた本庄繁長と、上杉謙信以来、庄内を保護領化していた景勝にとって、最上義光の庄内進出は武門のメンツを潰される危機だった。景勝・兼統・長真・繁長は、「奥羽惣無事令」違反での処分を最小限にとどめる方策と論理を準備した上で、十六年八月に庄内十五里原で最上勢に決戦を仕掛けたのである。

繁長改易の詳細な時期は、史料上では不分明であるが、大宝寺武藤家の再興が確定して、千勝丸（義勝）上洛の条件が整った十七年五月の段階で、豊臣政権の承認のもとで、上杉景勝家中内での不始末の処分として改易する方針が決定されたと推定される。繁長が村上を退去して在京浪人になったのは、十八年夏の頃と推定されているが、伊達政宗に旧章名領の没収と米沢への退去が命じられた、十八年八月と時期的に符合しているのは興味深い。

繁長は、景勝から十九年三月頃に信州更級郡の川中島付近で知行地を宛行われて、本庄家を再興している（注149）。慶長三年（1598）に会津に移封された景勝は、繁長を1万石で奥州福島城主に任じて、3,200石の同心七人分を宛給している。この処遇は羽州金山城主の色部与三郎（龍松丸・光長）と同格であり、景勝と兼統は一度も繁長を見捨てることは無かったのである（注150）。

「**管窺武鑑**」の**本庄勢** 天正十六年八月の「庄内十五里原の戦い」での本庄勢の人名が、江戸中期成立の上杉家関連の軍記物の「管窺武鑑」（米沢市立米沢図書館所蔵）に収載されている（注151）。『村上市史・通史編』は、本庄家直属の武士団を、A－板屋古瀬駿河守を筆頭とする34騎、B－山辺里下総守を筆頭とする26騎、C－鵜渡路因獄助を筆頭とする側近の子息たち8騎、D－浪人馬上11騎、E－別働隊の矢羽木式部の5つに分類している。「こうした人々のなかには、現存する地名と同名字があつて、かつては、その村落に存在した地侍であつたことをうかがわせる。本庄家とその家臣は、村上や近郷の人々であつたといえよう」と指摘している（注152）。

表22の上段は、「管窺武鑑」に見える人名と郡絵図に見える村名を照合したものである。表22からは、Aの板屋古瀬衆34騎は本庄領を中心に編成されたこ

とが読み取れるが、鮎川氏との相給地の小河村、色部氏との相給地の有明村を名字の地とする地侍も含まれている。Bの山辺里衆の26騎は本庄領の地侍たちだけで編成されたと推定される。

表22の下段は小嶋一族のリストである。3名の小嶋一族は、16世紀中頃の永禄期に「色部年中行事」で正月四日に色部館に出仕して、御館様と梔飯の儀式を行っていた8名の小嶋家中の一族であろうか（注153）。文禄三年（1594）の「員数目録」には、平林在番の小嶋備後には〈右ハ中国浪人〉（史料8）と注記されているが、郡絵図の割書には小嶋氏の記載は無い（注154）。色部氏は、召し抱えた中国浪人の小嶋備後に、色部領の村々を宛給していたと推定される。小嶋一族の一部は、半世紀程の間に三面川流域の本庄領でも所領を宛給されて、本庄家中になっていたのだろう。

本庄繁長は、天正十六年八月の「庄内十五里原の戦い」で劇的な勝利を収めた。最上義光の「私戦停止令」違反の提訴は、義光が勝利して庄内地方を併合していれば、義光が「私戦停止令」違反に問われる訳で、敗者の言い掛かりに過ぎないが、繁長の「私戦停止令」違反は形式犯としては成立してしまう。繁長は改易されたが、家名の存続と再興を認める寛大な処分は、秀吉の権威を高めるための形式的な処罰に過ぎないと言えるだろう。景勝は繁長を保護し続けたし、繁長は武門の意地を示して武名を高めることが出来た。

浪人衆として大川家中は4騎、鮎川家中は3騎が参戦している。色部家中では、郡絵図では大国氏との相給地の「あり明村」の地侍の有明式部大夫が参戦している。図6の⑥⑦⑧組のあり明村一帯は、本来は色部領であったが、本庄繁長処分に連座して大国領に割譲編入されたと推定される（七章1節で詳述）。繁長に加勢した蒲原郡北端の黒川氏・中条氏の連座と処分に付いては不明であるが、「庄内十五里原の戦い」は、瀬波郡と近隣の国衆領主と地侍たちの総力を挙げた決戦であった。当然、上杉景勝と直江兼統は、秀吉の「私戦停止令」に抵触することを承知の上で、繁長を全面的に支持、支援したに違いない。

鮎川氏と大川氏の家臣は浪人衆と言う形を取って、主家に星が及ぶことを避けたのであろうが、それでも大川家中と色部家中は、大川城と平林城の山城部分を自分破却して、秀吉の権威への恭順を示さなければならなかった。色部長真は本領の大部分を維持し、後述のように大川氏は大国・直江家中に取り立てられて旧領に留まることを許されたのに対して、繁長は改易によって本拠地を離れた。大川氏と色部氏による山城の自分破却は、繁長に対する

表23―「管窺武鑑」に見える馬上浪人衆と加勢家（注151）

加州	佐渡	出羽庄内	瀬波郡大川	瀬波郡鮎川	加勢家
安武主殿助 篠田右門兵衛	長 摂津守	小国治部大夫 大川紀伊守	立嶋兵庫守 板垣相模守 加藤備中守	小池孫左衛門 穂積城左衛門 横江大隅守	色部殿家中 黒川殿家中 中条殿家中

申し訳なさと憐憫の心意を表示するものでもあったのかも知れない。

鮎川氏と員数目録 「瀬波郡絵図」での 鮎川分は全て大国分（旧本庄分）と混在している。鮎川分は、三面川流域の⑩・⑪組、支流の高根川流域の⑭・⑮組、大須戸川の流域の⑬組の 5 組に存在し、大国領の北半（郡絵図の左側）に偏在する。小泉荘本庄は 13 世紀末頃に鎌倉幕府直轄の関東御領になっていた。幕府の高官たちが、本庄氏の在地支配力を削ぐために本庄氏の所領を蚕食して、本庄氏の所領の間に自分たちの所領をモザイク状に配置したことが、幕府の高官の現地代官として土着した鮎川氏の所領が混在形態になった原因であることは既に指摘した。

郡絵図での文禄期の鮎川氏の所領は、単独知行地が 10 ヲ村、大国氏との相給地が 17 ヲ村に過ぎない。鮎川盛長は、天正六年(1578)三月から八年八月までの「御館の乱」と、九年五月から十五年十月までの「新発田重家の乱」で景勝と繁長に反抗した。「御館の乱」での軽微な処分と、「新発田重家の乱」で重い処分を続けて受けた結果、鮎川盛長の所領は半分程度にまで大幅に削減されたことも前述した。盛長は、八年の後半頃に「御館の乱」後の処分で本城の大葉沢城を自分破却して、本拠地を約 3km ほど内陸の笹平城に移した。笹平城は十五年末頃までに「新発田重家の乱」後の処分として自分破却した。盛長は、十五年末頃には城持領主の身分を剥奪されて、自立性が低下していたと考えられる。

文禄三年(1594)の「定納員数目録」には、鮎川同心と在番衆が以下のように記載されている^(註155)。〈 〉は脇付けの注記。①～④は伊藤追記の区分。

(史料 17)「(越後) 鮎川同心 鮎川在番 ①一、(二人五分五厘) 四拾二石五斗 穂保城左衛門 ②一、(一人二分六厘) 二拾一石 伊藤兵作……③一、拾一石三斗 大嶋仁兵衛……④一、八石五斗 中山五右衛門……⑤一、拾一石八斗 普濟寺」

①～⑤は軍役高による区分である。①の 42 石 5 斗が最も多い軍役高で、2.55 人役を勤める穂保城左衛門が在番衆筆頭のリーダーである。②の 21 石で 1.26 人役を勤めるのが伊藤兵作をはじめ 10 人、③は大嶋仁兵衛をはじめ 5 人、④は中山五右衛門をはじめ 11 人、⑤は普濟寺 1 人である。鮎川在番衆の名簿は 28 人である。

③④⑤には軍役負担の人数が記載されていないが、①②の 1 人当たりの役高は $(42.5 \text{ 石} \div 2.55 \text{ 人} = 16.666\cdots \text{ 石})$ 、 $21 \text{ 石} \div 1.26 \text{ 人} = \cdots 16.666\cdots \text{ 石}$ 約 17 石

になるので、③④⑤の軍役高を $16.666\cdots \text{ 石}$ で割ると軍役負担の人数が算出される。③の 11 石 3 斗では約 0.7 人役、④の 8 石 5 斗では約 0.5 人役、⑤の 11 石 8 斗では約 0.8 人役になる。この人役に③④⑤の軍役高を掛けるとグループごとの在番人数が算出される。鮎川在番衆 28 人の軍役高の合計は 414 石 3 斗、延べ人数は 138.33 人になるが、この人数では全日の在番は出来ない。鮎川在番は数日に一度程度の勤番だったのであろうか。鮎川在番は村上城在番を補完する出張所だったのであろう。

「管窺武鑑」は、十六年(1588)八月に庄内の「十五里原の戦い」に参戦した本庄・鮎川・大川家中の人名を書き上げている。「員数目録」の鮎川在番衆で「管窺武鑑」と一致する地持は、鮎川家中の浪人衆の① 42 石 5 斗の穂保左衛門だけである。「員数目録」の穂保左衛門は「管窺武鑑」では保穂左衛門となっているが、「管窺武鑑」の誤記か誤写であろう。「管窺武鑑」の鮎川家中の浪人衆の小池孫左衛門とは一致しないが、小池一族は② 21 石役高の小池権右衛門と④ 8 石 5 斗の小池理右衛門の 2 名いる。28 名の在番衆のうちで、上記の 3 名以外は、「管窺武鑑」の本庄領関係の地持たちは鮎川在番衆に取り立てられてはいない。鮎川在番役は瀬波郡以外の地持たちに割り当てられていた。瀬波郡の旧本庄氏・鮎川氏・大川氏の家中の地持たちは、ほとんどが武士身分を喪失したと推定される。

鮎川家中の①穂保左衛門と②③の小池一族は、浪人衆として参戦したので、本庄繁長と鮎川盛長の改易には連座しなかったのであろう。瀬波郡以外の地持たちだけでは旧鮎川分を統治警備することが出来ないで、①穂保左衛門を在番衆のリーダーに据えて、②の小池権右衛門と④の小池理右衛門をサポート役に就けたのであろう。鮎川盛長の本城の笹平城は天正十五年末頃までに自分破却していた。鮎川在番衆はどこで在番したのであろうか。「瀬波郡絵図」には描かれていないが、破却した笹平城跡・「將軍嶺」の麓の篠平村に旧鮎川館・鮎川屋敷があり、そこで在番警備したのであろう。

鮎川盛長は、本庄繁長の「惣無事令」違反の改易に連座して処分された。家名の存続は許されたが、「員数目録」には瀬波郡域に鮎川氏の所領は記載されていない。郡絵図割書の「鮎川分」は、正しくは十八年の処分後の「旧鮎川分」の意味である。関川村上関の小領主の三瀧佐左衛門は、庄内大宝寺城（鶴岡市馬場町）の本庄越前守の同心となつて、14 石 2 斗の 0.8 人分の兵士役を勤めていた。鮎川盛長の息子か一族の鮎川十次郎が、三瀧佐左衛門と同様に庄内大宝寺城の本庄越前守（本庄繁長とは別家）の同心となつて、同じく 14 石 2 斗で 0.8 人分の兵士役を勤めていた（史料 18）

(注 156)。慶長三年（1598）に会津に移封された景勝は、鮎川与五郎を3千石で羽州小国城代、後に庄内大浦城代に任じている。この処遇は大宝寺出羽守義勝と同格である。鮎川与五郎と大宝寺義勝は上杉家中の重臣に取り立てられていた。景勝と兼続は、本庄繁長と同様に鮎川氏を見捨てることは無かったのである（注 157）。

3. 大川氏の処分と城郭破却

(1) 大川氏と郡絵図・員数目録

郡絵図の割書 大川領は、細い朱線で区画された村組が6つ、村町が53ヶ所、軍役と諸役を負担する家数が500軒で、全て大川氏の単独知行地である。分家の立嶋氏は、郡絵図の割書には見えないので、本宗家の大川氏に包摂されていた。大川領の耕地は日本海に向かって西流する小河川沿いの谷間に点在する。小河川が開析した細長い谷筋が6つの村組になっている。

大川領は、立地環境と生業から、羽州街道が通る山間地の村町、谷沿いの農山村、海岸部の塩を焼く海村の3つに大別される。羽越国境に接する山村・小村が多く、国境警固役を勤めるD型の村が半数以上であり、大川領全体の戦闘能力はそれほど高くない（表8）。

大川城の自分破却 大川城は、天正十八年（1590）の本庄繁長の改易処分に伴って、色部氏の平林城の加護山城と同時期に山城部分を自分破却したと推定される。鮎川盛長は、十五年に「新発田重家の乱」に加担した罪を問われて、上杉景勝と繁長に屈して本城の笹平城（将軍嶺）を自分破却したと推定される。この結果、盛長は城主身分と自立性を失い、鮎川家中は本庄繁長の指揮下に組み込まれていた。大川領と鮎川領を含む本庄領は、十八年の本庄繁長の改易に伴い、一括して大國但馬守実頼領に引き継がれた。

郡絵図の割書の「鮎川分」は、「旧鮎川分」の意味であり、村町の来歴として旧領主名を示した記号に過ぎない。大川城は「員数目録」では在番城に取り立てられていないし、「員数目録」には大川領に関係する記載もない。郡絵図には「大川分」と記載されているが、「鮎川分」と同様に旧領主名を示す記号に過ぎず、大川氏の在地支配権を示している訳ではない。文禄年間の大川氏は大國・直江家中の家臣になっていた（後述）。

(2) 本庄繁長改易事件への連座

「管窺武鑑」の大川氏 天正十五年末（1587）の段階では、繁長からの養子の大宝寺千勝丸は、反大宝寺・親最上勢力に追い詰められて、庄内最南端の羽越国境に近い小国城（山形県鶴岡市小国、図36）だけをかりうじて維持していた。庄内の緊迫状況の影響を直接的に受けるのは国境地帯の大川氏である。軍記物の「管

窺武鑑」は本庄繁長勢を中心に書いているので、大川氏と鮎川氏は脇役に廻されているが、大川家中では馬上浪人衆として、出羽庄内の大川紀伊守、瀬波郡大川領の立嶋兵庫守・板垣相模守・加藤備中守の計4騎が参戦している（表23）。馬上兵士以外の浪人衆の中に大川喜左衛門が見える（注 157）。

出羽庄内の大川紀伊守は、大川一族が庄内にも所領を持っていたことを示している。庄内が最上義光に切り取られることは、上杉景勝と本庄繁長にとっては武門のメンツの問題でもあったが、大川氏にとっては切実な死活問題であり、大川氏は最前線に立つことを迫られていた。大川家中からは「管窺武鑑」に記載されていない地侍たちが、浪人衆として多数参戦したと見て間違いないだろう。

大川氏の連座と処分 大川家当主の長秀（三郎二郎）の名前は「員数目録」には見えない。十六年八月の「十五里原の戦い」で、多数が浪人衆に偽装して参戦した大川家中に、「私戦停止令」違反での繁長改易の累が及ばなかったはずがない。参戦した兵員も鮎川家中よりも大川家中の方がずっと多かったはずであり、鮎川氏よりも処分が重かったと推定される。本庄繁長は、家名を存続させて、再興の可能性を残して改易されたが、当主の鮎川盛長と大川長秀は隠居を余儀なくされたのであろう。

「員数目録」に鮎川一族の鮎川十次郎と大川一族の大川三之助が以下のように記載されている。〈 〉は脇付けの注記。（ ）は伊藤の注記。

（史料18）「右同（庄内大宝寺城）本庄越前守同心……一、同（〈八分〉拾四石二斗） 鮎川十次郎」。

（史料19）「小国直江抱……右兩人同心……一、〈七人四分〉百二拾三石七斗 大川三之助」（注 158）。

史料18の鮎川十次郎は、庄内大宝寺城の本庄越前守の同心となつて、14石2斗で0.8人分の兵士役を勤めていた。史料19の大川三之助は、村上城主の大國実頼と執政の直江兼続が庄内大宝寺城将の本庄越前守へ派遣した大國・直江家中の家臣になっていた。大川三之助は123石7斗で7.4人分の兵士役を勤めていた。1人当たりの軍役高は、鮎川十次郎が（14.2石÷0.8人＝17.75石）、大川三之助が（123.7石÷7.4人＝16.72石）と近似しているが、大川三之助は鮎川十次郎の十倍近い人数の在番役を勤めている。

十八年の繁長の改易と村上からの退去によって、大川氏は主家を大國・直江家に替えたのである。大川三之助は、大國・直江家中の家臣で、景勝から見れば陪臣に当たる。戦国末期の大川氏は、独立した領主ではなく、本庄家中での別家中になっていたのであり、大

国・直江氏は、本庄家中に於ける大川氏の地位をそのまま継承して、大川氏を召し抱えたのである。慶長三年（1598）の景勝の会津移封後の上杉家の家臣国・知行人の名簿に大川三之助は出てこない。大国・直江氏の家中として扱われていた。

「藤懸り館」の背後の山城部分は、豊臣秀吉と上杉景勝の本庄繁長処分に恭順する姿勢を示すために、大川家中自らの手で自分破却した。本庄繁長が、最上義光勢を庄内から駆逐して、大宝寺武藤家を救援した十六年八月の「庄内十五里原の戦い」は、「私戦停止令・豊臣平和令」には抵触するが、繁長は形式犯に過ぎないことは詳述した。景勝と兼続、色部長真をはじめとする揚北の旧国衆領主たちは、改易された本庄家中に対して深く同情して、憐憫の態度を示したに違いない。大川長秀は「藤懸り館」を隠居所にして住み続けていたのかも知れない。大川三之助は、大国家中では客分に近い地位を与えられて、「藤懸り館」に居住していたのかも知れない。「藤懸り館」は板葺きの屋根で、「頸城郡東絵図」の町田村、八崎町の御料所の代官屋敷の茅葺きの屋根よりも格式が高い（図40）。

塩の村の割譲 図2で三面川河口—山形県境の距離を測ると約36kmになる。図2で「瀬波郡絵図」での大国領と大川領の大境を赤線で示したが、旧山北町と旧村上市との市町境は、赤線の大境よりも約12km南側になる。三面川河口—山形県境の間をおおまかに三等分したうちの中央部分は旧山北町域である。府屋付近の塩焼きの店舗の店主によると、塩焼きでの最大のコストは燃料の塩木の費用であると言う。塩を焼く海村と塩木を河川で流す山村は、密接不可分の関係である。旧市町境は、山村と海村との一体関係に基づいて引かれた、旧山北町城の河川と三面川とで流す塩木の供給範囲を示し、山村と海村との一体関係に基づいて引かれた、生業に基づく区分のラインである。旧市町境から約12kmも北上した郡絵図の領境の太い朱線は、不自然で作為的なラインだと言わざるを得ない（図2）。

「豊臣平和令」違反は形式犯に過ぎないが、「庄内十五里原の戦い」で大川長秀が果たした功績は大きくて、処分も重かったと推定される。大川長秀は、天正十八年（1590）の処分で隠居した後も、「藤懸り館」に居住し続けた可能性が高く、大川三之助は大国・直江氏に召し抱えられて家名を存続させた。家名存続と「藤懸り館」の保持との引き替えに、大川領の塩を焼く海村の南半分が、大国但馬守実頼に本当に割譲されたのだろうか。

塩を焼く村の割譲は、長秀の処分の重さを豊臣政権と周囲に明示するための借置であろう。大川領は十八年には大国領に併合済みなので、大川領と大国領を区

分する大境の朱線を、文禄五年（1596）の郡絵図の上で何処に引いても、実質的な違いは無かったのである。

七. おわりに—未完の瀬波郡絵図—

1. 本庄繁長改易の影響

色部領の割譲 16世紀末・文禄期の「瀬波郡絵図」の作成途中の段階では、瀬波郡絵図の作成者は、色部領と大国但馬領との「大境のすじ」を図5・6のイロハニホトのどれにするのかを判断出来ず、色部領と大国但馬領との大境は未確定であった。図1・5・6の⑥⑦⑧組は、農業用水系と生活圏からも、色部領の村町と一緒にするのが自然である。「大境」の朱線は、生業や生活圏の実態とは乖離した、人為的な不自然な境界線である。以上の諸点に付いては三章1節「太線の朱線ライン」で指摘した。

大国領の⑥⑦⑧組は、近代の神納村・神林村に継承されているので、本来は色部領であったと推定される^(注159)。色部長真は長秀と同様に、旧本庄領を継承した大国但馬守実頼に、郡絵図の色部領の⑥⑦⑧組を割譲しているが、図6に示したように色部氏家臣の桃川殿の桃川村は④組と⑥組とに分断されることになるので、この領地割譲が実際に行われたとは思えない。長真は、天正十八年（1590）八月から十九年春まで出羽国仙北郡の大森城に滞在して、豊臣政権と景勝の指揮下で仙北一揆の事後処理と仕置を行っている。豊臣平和令違反は形式犯であり、長真の領地割譲は、郡絵図の上だけでの架空の処分だったと推定される（六章2節）。

長真は、遺児龍松丸と色部家中の保護を直江兼続に依託して、天正二十年（1592）九月に京都伏見の上杉景勝屋敷で死去した。色部領は、文禄四・五年（1596）の郡絵図作成の時点では、実質的に直江領に包摂されていた。瀬波郡の大国但馬領は兼続が派遣した村上城代の春日元忠が支配していた。色部領と色部家中は兼続の保護下に置かれていたので、大国領と色部領の大境は、⑥⑦⑧組の組境の何処に引いても実質的な変更は生じなかったのである。

色部領⑥⑦⑧組の割譲を郡絵図上で示すことは、平林城の加護山古城の山城部分の自分破却の表示と同様に、豊臣平和令違反による本庄繁長の改易が上杉家中での処分として確実に実施されたことと、色部龍松丸と色部家中が太閤秀吉の権威に恭順していることを、太閤秀吉に明示するための郡絵図上での虚構の・操作であった。

鮎川氏は、天正十五年（1587）の「新発田重家の乱」後の処分・仕置の結果、自立性を削減されて、本庄繁長の支配下に組み入れられていた。十八年の繁長の改易処分に伴って、本庄領（鮎川領を含む）と大川領は

そのまま大国但馬領に引き継がれたが、大川氏、鮎川氏、本庄氏、色部氏は、天正期頃までは「○○領」と言う領域的な支配権と自立性を保持していた。色部氏の場合は、色部領内の旧荒川保域と旧奥山荘域に対する支配権は限定的で、色部氏の家分と別家中に対する支配権も脆弱であった。色部氏の場合は、上杉権力と密着しないと色部領内の支配が実現出来ない、未熟な権力構造だったのである。

上中下区分と領主名の不記載 「瀬波郡絵図」には「大川之町」を含めると 254 の村町が描かれている。領主・給人は、大国但馬守実頼（城代・春日元忠）、鮎川氏、色部氏、大川氏、加地氏、黒川氏、垂水氏、土沢氏、直江氏、御料所の 10 名しか居ない。

領主・給人を単独知行地と相給地とを区分せずにカウントすると、1 位が大国但馬で全体の（93 / 254 = 37%）を占めている。2 位は色部氏の（51 / 254 = 20%）、3 位は大川氏の（46 / 254 = 18%）、4 位は鮎川氏の（30 / 254 = 12%）である。4 氏の合計で（220 / 254 = 87%）になり、その他は数カ村程度を知行していた。景勝の御料所は全て相給地で 5 カ村に過ぎない。

「頸城郡東絵図」では領主・給人は 129 名を数え、景勝の御料所が 137 ケ所で全体の（137 / 380 = 36%）を占めている。両絵図での領主・給人と知行地の存在形態は両極端と言っても過言ではない程違っていた。軍事動員計画のシミュレーション用の絵図として、「瀬波郡絵図」と「頸城郡東絵図」の 2 幅が試作された理由の 1 つが、上記の極端な差違であったと推定される。

各兵種の中での上下関係と指揮系統を示す記号である「上中下」の区分の不記載率は、「瀬波郡絵図」が 65 / 254（大川之町を含む）= 26%、「頸城郡東絵図」は 21 / 380 = 5.5%、であり、「瀬波郡絵図」が「頸城郡東絵図」の後に作成が開始されたことを示している。瀬波郡では、村組の中でリーダーの村を確定する調査と調整の作業が困難を極めていたことを示唆する。「瀬波郡絵図」の完成度は「頸城郡東絵図」よりも一段と低い。

さらに特異なことは、瀬波郡では 30 カ村の領主・給人名が不記載なことである。不記載率は「瀬波郡

絵図」で 30 / 254 = 12%、「頸城郡東絵図」で 19 / 380 = 5%である。表 24 は「瀬波郡絵図」での領主名と家数不記載の集計である。①②は旧荒川保と旧奥山荘の地域である。④⑤は小泉荘加納の色部領である。色部領では分家の領主権が、別の家中として惣領家と併存していて、領主名の表記に混乱が生じていた。⑥⑦⑧⑨は旧本庄領の中心であるが、天正十八年（1590）の本庄繁長の改易と大国但馬守実頼への城主・領主交替の混乱が領主名不記載の原因であろうか。

⑬⑭⑮は大国分と鮎川分の村が混在する地域である。領主名の不記載は、十五年の「新発田重家の乱」と、十八年の繁長の改易に伴う、鮎川氏の処分と領地没収が一部で未確定だったことが反映されている。⑯は日本海沿いの塩を焼く海村である。ここでは、繁長の改易に連座した大川氏の処分で、旧大川領の塩を焼く海村の半分が大国領に割譲されて混乱が生じていた。⑰⑱⑲⑳は旧大川領である。ここでは、繁長の改易に連座した大川氏の処分に、まだ未確定な部分が残されていたことが、領主名不記載の原因であろう。家数の不記載は 38 で、ほぼ領主名不記載と同じ傾向を示す。38 カ村うち 20 カ村は「端村」である。「端村」は家数を本村に含めるので家数の記載が無い。

十五年の「新発田重家の乱」と十八年の本庄繁長の改易は、瀬波郡の旧国衆領主と地侍層に大きな変動と変更をもたらした。繁長の改易と村上からの退去後に、旧本庄領と旧鮎川領・旧大川領は、一括して大国但馬領に引き継がれた。「瀬波郡絵図」の完成度の低さは、「豊臣平和令」違反で改易された本庄繁長の退去に伴う混乱が、大きく影響していると言っても良いであろう。

2. 荘園公領制の名残り

①②③組の旧荒川保域と旧奥山荘域は、荒川保地頭河村氏の末流の地侍と、奥山荘地頭三浦和田・中条氏の一族の黒川氏の所領が入り組んで混在している。郡絵図では中太の朱線で「色部領」に括られていても、①②③組への色部氏の支配力は限定的であった。上杉景勝と直江兼統は、在来の地侍のうち垂水氏^{しもみづま}・下氏・三瀧氏を上杉家の家臣として召し抱えた。景勝と兼統の命を受けて、垂水氏は信州飯山城の在番衆と大国但

馬守実頼の本城・天神山城（新潟市西蒲区岩室・旧岩室村）の在番衆に、下氏は出羽国庄内の大山城（尾浦城・山形県鶴岡市大山）在番の大山衆に、三瀧氏は大山衆と庄内大宝寺城の在番衆になり、

表 24—「瀬波郡絵図」の領主・家数不記載の集計

組	①組	②組	③組	④組	⑤組	⑥組	⑦組	⑧組	⑨組	⑩組	⑪組
領主不記	1	1	0	2	2	2	2	3	1	4	0
家数不記	1	3	1	1	3	3	1	2	2	5	0
村数	24	25	11	15	9	9	6	10	15	19	11
組	⑫組	⑬組	⑭組	⑮組	⑯組	⑰組	⑱組	⑲組	⑳組	21	栗島
領主不記	2	2	1	0	0	0	2	2	3	3	0
家数不記	3	2	1	0	4	0	4	0	1	1	0
村数	16	13	10	6	14	4	17	4	5	9	1

本領の関川村の旧領地を離れていた。在来の地侍のうちで最大の土沢氏は、①組の村に残り、文禄三年(1594)の「員数目録」では平林城の在番衆になっていた。

垂水氏は、関川村の名字の地の「55 ゆ村」(関川村湯沢)を保持していたが、郡絵図では下氏の名字の地の「35 せきしもまち」(関川村下関)は「黒川分」に、三瀦氏の由緒の地の「37 せきかわぐち村」(関川村上関)は「色部分」になっている。上杉景勝権力は、①②③地域の旧来の地侍領主たちを他所へ移すことで、忠臣の色部氏の在地支配力を補強しようとしたのであろうが、色部氏による一円支配は未達成の状態だった。幼年の色部家当主の龍松丸は、古い分家で自立性が強い牛屋殿を、肥前名護屋在陣と朝鮮半島への出兵の軍役に動員することが出来なかった。

小泉荘の北方地域では、鎌倉後期に幕府高官が訴訟裁判によって、本庄領を蚕食して所領を獲得していった。幕府高官の現地代官として土着した三浦佐原氏支流の鮎川氏と、本庄氏の所領が混在する状態は戦国期になっても解消されず、本庄氏と鮎川氏はことあるごとに対立と紛争を繰り返した。両氏の対立と抗争の原因は、鎌倉時代以来の荘園公領制の枠組みと職の体系が、色濃く残っていたことが背景であると言える。

3. 戦国時代史研究の沃野

頸城郡では、鎌倉時代以来の荘園公領制の枠組みが解体されており、戦国大名の上杉権力が、在村領主と在町を直接動員支配する独自の軍制が確立されていた^(注160)。瀬波郡では、上杉権力が課す軍役と諸役は、旧来の国衆領主と地侍家に割り当てられており、上杉権力が村町を直接支配する段階にまでは到達していなかった。このことを端的に示しているのが、朝鮮出兵と肥前名護屋在陣の軍役を回避した牛屋殿と、重い軍役を課すことが出来なかった色部家当主との関係である。また、色部氏は、自治都市の「岩船町」では「地子」を徴収するだけで、軍役を課すことは出来なかった。上杉景勝側近の色部氏でさえも、膝下の村町を直接支配出来ていなかった在地の状況が、「瀬波郡絵図」の割書を未完成の状態にとどめていた根本的な原因であり、「頸城郡東絵図」との最も大きな相違点である。上杉権力は頸城郡の軍制を瀬波郡にそのまま適用することは出来なかったのである。

別稿1での旧柿崎町の「慶長三年八月 頸城郡夷守郷岩出村検地帳」の分析結果から、「頸城郡東絵図」の割書では、軍役を負担する家数は、幕藩体制下での年貢負担者の本百姓の数よりも少ないことが確認されている。兵士役を負担した「瀬波郡絵図」の家数は、近世の本百姓の数よりも相当少な目であることは確実

である^(注161)。瀬波郡では、軍役と諸役を負担する家数までは確定出来たが、人数は確定出来なかった。動員する人数は、上杉権力と村町との間での取り決めではなく、個別の領主の差配にゆだねられていたのである。

色部領と大国領、大国領と大川領の領境の太い朱線は、「豊臣平和令」違反の処分として色部領と大川領の各一部が大国領に割譲されたことを、豊臣政権に明示するために、景勝と兼続が捏造した虚構の大境であった(図6)。天正十八年の本庄繁長の改易と「豊臣平和令」の貫徹は、瀬波郡の旧来の在地支配の体系を根本から変える強大な衝撃であったが、「瀬波郡絵図」の割書には大国但馬守実頼への領主の交替だけが、未完了な状態で記載されているに過ぎない。「瀬波郡絵図」の作成者は、頸城郡との違いに困惑して、混乱の中で立ちすくんでいたに違いない。しかし、「瀬波郡絵図」と「頸城郡東絵図」が共に未完成の状態であり、微妙な相違点を対比出来るからこそ、戦国末期の越後国の村と町の姿が浮かび上がって来るのである。

小泉荘加納の色部領には、「色部氏文書」、「色部氏年中行事」、「文禄三年色部氏差出」、「文禄三年定納員数目録」、「越後国の瀬波郡絵図」の豊かな文献史料が残されており、戦国時代史研究の豊穡な沃野と山野河海が広がっている^(注162)。定説から解き放たれて、郡絵図を史料批判しながら、戦国期の越後国の村と町を巡るタイムトラベルは、今はじまったばかりである。今回は、海の霊場、「色部氏年中行事と瀬波郡絵図の栗島」にタイムトラベルしてみようと思う。

戦国期から江戸時代を通じて、羽越国境の警備役を勤めて、実質無年貢の特権を承認されていた山村の三面村に付いて詳細に分析した研究論文、「越後国瀬波郡絵図の基礎的研究Ⅱ—国境の村・山人の村・秘境三面—」を鶴見大学文化財学会『文化財学雑誌』第14号(平成三十年三月)に掲載する。併せてご参照頂ければ幸いです。

郡絵図の割書の数値データの分析研究を諦めずに続けることが出来たのは、鶴見大学文化財学科の大学院ゼミで講読研究を続けたからである。個人ではとても継続出来ない、遅々とした歩みの地味な研究テーマである。11年間在職した鶴見大学と文化財学科には感謝しきれない恩義を受けたことを末尾に記して謝辞とさせて頂く。

平成二十九年十月二十八日に成稿

注

1. 伊藤正義・旧稿「越後国『郡絵図』史料論—瀬波郡荒川の朱線領境と漁業権—」帝京大学山梨文化財研究所シンポ

- ジウム報告書『中世資料論の現在と課題』名著出版、1995 年。
2. 黒田日出男「現存慶長・正保・元禄国絵図の特徴について」『東京大学史料編纂所報』一五号、1983 年、「国絵図についての対話」『歴史評論』四三三号、1986 年。川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院、1984 年、日本歴史叢書『国絵図』吉川弘文館、1990 年。前掲注 1、伊藤正義。
 3. 『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』東京大学出版会、1987 年。『村上市史・別編 絵図・地図・年表』『瀬波郡絵図』村上市、2000 年。市史別編には「瀬波郡絵図」の大型カラー図版が収録されて、詳細な解説が付けられている。付図の白描（モノクロ）の「瀬波郡絵図」には原本と同じ位置に翻刻文字史料が配置されている。特別展『上杉家伝来絵図』米沢市上杉博物館、2014 年。「越後国の郡絵図」の枚数に付いては、前掲注 1、伊藤正義・旧稿の二章 1 節「郡絵図の縮尺と接合関係の検証」、別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I —戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系—」『鶴見大学紀要』第 55 号第 4 部、人文・社会・自然科学編、2018 年 3 月を参照。
 4. 米沢市上杉博物館の特別展『上杉家伝来絵図』図録、2014 年 4 月。
 5. 前掲注 1、伊藤正義・旧稿、前掲注 3 別稿 1。
 6. 伊東多三郎「越後上杉氏領国研究の二史料 — 慶長二年越後国絵図と文禄三年定納員数目録 —」『日本歴史』一三八号、1959 年、『近世史の研究』第五冊、吉川弘文館、1984 年に再録。
 7. 小村式、第四章「第二節 検地」（伊東多三郎ほか藩政史研究会『藩制成立史の総合研究 米沢藩』。吉川弘文館、1963 年）。小村式『幕藩制成立史の基礎的研究 — 越後国を中心として —』吉川弘文館、1983 年に再録。
 8. 大谷内礼子、第四章第三節「一 城将と城領」、金子 達「二 検地と郡絵図」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。池 亨、七章四節『『瀬波郡絵図』にみる村上』、十二章一節「支配者の交代」、同二節「支配制度と諸負担」『村上市史・通史編 1 原始・古代・中世』、1999 年。市村清貴、第三部第 6 章第六節「文禄四年検地」、堀 健彦、同第 7 章『『頸城郡絵図』の世界』第一〜第三節、福原圭一、第四節、『上越市史通史編 2・中世』、2004 年。
 9. 伊藤正義「福原報告へのコメント」『開発と災害』中世都市研究 14、2008 年、新人物往来社。「越後国頸城郡絵図に見る上杉権力と在地世界 — 村町の軍役と諸役の負担体系 —」特別展『上杉家伝来絵図』図録、米沢市上杉博物館、2014 年。
 10. 前掲注 6、伊東多三郎「越後上杉氏領国研究の二史料 — 慶長二年越後国絵図と文禄三年定納員数目録 —」。
 11. 前掲注 7、小村式『幕藩制成立史の基礎的研究 — 越後国を中心として —』。
表 1 は同書 163 ページの小村式氏作成の第 13 表の一部を改変して引用。田島光男編著『拾遺色部氏文書・記録』[九]編年文書（米沢市立米沢図書館所蔵）、「一 文禄三年色部氏差出」○編年文書三十所収、『越後国領主色部氏年中行事』187〜193 ページ、新潟県神林村教育委員会、1972 年。同書の 257・8 ページの「文禄四年瀬波郡（岩船郡）検地、神林村・色部領明細（慶長二年国絵図）」を参照。以下、「色部氏年中行事」と略記。「文禄三年 色部家老臣連署知行定納覚」『新潟県史研究』第十九号、4457 号、1986 年。小稿は田島光男編著『色部氏年中行事』を典拠にした。
 12. 前掲注 3、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
 13. 前掲注 3、伊藤正義・別稿 1。
 14. 史料 a は前掲 3『越後国郡絵図』東京大学出版会本より引用。以下、小文字のアルファベットとひらがなの記号で示す史料は同書からの引用。
 15. 伊藤正義・別稿 2「越後国瀬波郡絵図の基礎的研究 II — 国境の村・山人の村・三面 —」『文化財学雑誌』第 14 号、鶴見大学文化財学会、2018 年 3 月。
 16. 『新潟県の地名』平凡社、1980 年。
 17. 田村 裕、第二編第二章「鎌倉期の奥山荘」、青山宏夫、第五章「庄園の境界と紛争」『中条町史・通史編』2004 年。図 3 は、青山宏夫 345 ページ「図 1 奥山荘の概略」に一部加筆して引用。
 18. 前掲 3『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』東京大学出版会本で計測。
 19. 『慶長二年越後国絵図』高田市文化財調査報告書第 7 集、高田市文化財調査委員会、1965 年。「瀬波郡絵図」の一部を改変加筆して引用。
 20. 福原圭一「『越後国郡絵図』に見る交通体系と「町」」『開発と災害』中世都市研究 14、2008 年、新人物往来社。
 21. 高橋一樹、四章二節「小泉荘の成立」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
 22. 前掲注 20 同前。
 23. 前掲注 3、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
 24. 前掲注 6、伊東多三郎「越後上杉氏領国研究の二史料 — 慶長二年越後国絵図と文禄三年定納員数目録 —」『近世史の研究』第五冊、吉川弘文館、1984 年。前掲注 3、特別展『上杉家伝来絵図』米沢市上杉博物館、2014 年、天明八年（1788）「御絵図由来覚書」米沢市立米沢図書館・林泉文庫。
 25. 前掲注 16、『新潟県の地名』。
 26. 前掲注 3、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
 27. 網野善彦「無縁・公界・楽 — 中世の自由と平和」『網野善彦著作集』第十二巻、岩波書店、2007 年。初出は『無縁・公界・楽 — 中世の自由と平和』平凡社、1976 年。中野豊任「祝儀・吉書・呪符 — 中世村落の祈りと呪術 —」吉川弘文館中世史選書、1988 年、『忘れられた霊場 — 中世心性史の試み —』平凡社選書 123、1988 年。前掲注 1、伊藤正義・旧

- 稿「越後国『郡絵図』史料論 — 瀬波郡荒川の朱線領境と漁業権 —」。
28. 前掲注 3、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
 29. 前掲注 28 同前。
 30. 池 亨、十二章一節「支配者の交代 大国但馬領と村上城番春日元忠」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
 31. 前掲注 15、伊藤正義・別稿 2「越後国瀬波郡絵図の基礎的研究 II — 国境の村・山人の村・三面 —」。D 本庄北方地区の㊦組でのリーダーの村の確定は、いしすみ村とあらや村との間で錯綜して困難を極めた。
 32. 前掲注 3『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』東京大学出版会本は「大川の町」を村町にカウントしていない。同町を追加した 254 カ村町を母数とする。
 33. 前掲注 3、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
 34. 前掲注 27、中野豈任「祝儀・吉書・呪符 — 中世村落の祈りと呪術 —」。前掲注 9、伊藤正義「福原報告へのコメント」。
 35. 前掲注 33 同前。
 36. 『新潟県の地名』平凡社、1980 年。「日本歴史地名大系」特別付録「輯製二十万分一図復刻新潟県全図」。同地図の元となった「輯製二十万分一図」は、明治 20～22 年（1887～89）に参謀本部陸軍部測量局・陸地測量部（後の国土地理院）が作製した。図 9 は同地図から引用。
 37. 「豊臣秀吉朱印状」国立資料館所蔵「津軽家文書」。長谷川成一「序論 鷹をめぐる北の大名論」『近世国家と東北大名』吉川弘文館、1998 年。同論文及び 35・4 ページの補注 20 参照。
 38. 赤羽正春「2. 川の道」「II 荒川の水運・丸木舟」『越後荒川をめぐる民族誌 — 鮭・水神・丸木舟 —』アベックス、1991 年。81～86 ページ、83 ページの挿図「水運の範囲」参照。矢田俊文、第 2 編第四節三「瀬波郡絵図と中条」『中条町史・通史編』2004 年。
 39. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
 40. 大場喜代司、十一章一節「武藤氏と本庄氏」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
 41. 池 亨、十二章一節「支配者の交代」『村上市史・通史編 1』。図 16 は 512 ページの図「瀬波郡絵図にみる所領の分布」の一部を加筆改変して引用。
 42. 新潟県立公文書館所蔵『新潟県神社寺院仏堂明細帳』。新潟県の命令で明治 16 年（1883）に各社寺から提出させた由緒書をもとに作成され、朱書の訂正が加筆されている。完成年次は不明。
 43. 渡辺勝男、第三章第 6 節「中世末期の郷土」『山北町史・通史編』新潟県山北町、1987 年。
 44. 前掲注 3『越後国郡絵図』『瀬波郡絵図』東京大学出版会。
 45. 前掲注 1、伊藤正義・旧稿「越後国『郡絵図』史料論 — 瀬波郡荒川の朱線領境と漁業権 —」。
 46. 武田広昭、第三編第四章第三節「米沢街道の交通と番所」『関川村史』1992 年、557 ページの図 72「岩船郡の交通路図（幕末）」を参照。
 47. 前掲注 41、池 亨、十二章一節「支配者の交代」『村上市史・通史編 1』。「文禄三年定納員数目録」『新潟県史別編第 3・人物編』1987 年。矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦『上杉氏分限帳』古志書院、2008 年。小稿では矢田ほかを使用する。片桐昭彦、第三部第六章第四節「景勝と直江兼統」『上越市史通史編 2・中世』、2004 年。片桐氏は、近世の米沢藩での編纂史料の『御家中諸子略系譜』から、実頼は出羽国置賜郡の小国城主（山形県小国町）の小国三河守真将の養子になって、小国氏の名跡を継いだとしているが、出羽国置賜郡は文禄三年（1594）の段階では会津若松城主の蒲生氏郷の領地であり、実頼が出羽国置賜郡の国衆の名跡を継ぐことはあり得ない。越後国と米沢藩領の小国の地名が同じことから、近世の米沢藩での編纂の過程で混同が生じたのであろう。
 48. 高橋一樹、第五章二節「小泉荘支配の」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
 49. 長谷川伸、第六章三節「国人領の世界」『村上市史・通史編 1』。
 50. 鈴木かほる『相模三浦一族とその周辺史 — その発祥から江戸期まで —』、2007 年、新人物往来社。
 51. 藤本久志『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会、1985 年。長谷川伸、第十一章二節「最上氏の庄内進出と本庄氏の反撃」、池亨、同三節「庄内地方上杉領となる」『村上市史・通史編 1』。小林清治『豊臣政権と奥羽仕置』吉川弘文館、2003 年。
 52. 前掲注 15、伊藤正義・別稿 2「越後国瀬波郡絵図の基礎的研究 II — 国境の村・山人の村・三面 —」。
 53. 前掲注 1、伊藤正義・旧稿「越後国『郡絵図』史料論 — 瀬波郡荒川の朱線領境と漁業権 —」。
 54. 本間陽一、第四章第五節「(二) 塩木流し」『山北町史・通史編』新潟県山北町、1987 年。
 55. 前掲注 54、本間陽一「(四) 塩作り」。前掲注 27、中野豈任「祝儀・吉書・呪符 — 中世村落の祈りと呪術 —」。
 56. 前掲注 15、伊藤正義・別稿 2。渡辺茂蔵編著『羽越国境の山村 奥三面』山形地理談話会、1979 年。田口洋美『新編越後三面山人記 — マタギの自然観に習う —』山と溪谷社、2016 年、初出は 1992 年。宮本常一『塩の道』講談社学術文庫、1985 年。宮本氏は、同書の中で北越後三面川と出羽庄内地方の塩木流しの民俗事例を報告している。
 57. 金子達、第四章第二節「二 景勝上洛 — 出羽仕置」『新潟県史・通史編 2』1987 年。
 58. 渡辺三省『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』村上郷土研究グループ、1987 年。110～17 ページ参照。
 59. 西沢陸郎「色部氏と奥羽仕置」『福大史学』第 46・47 号合併号、1989 年。
 60. 注 37、長谷川成一。

61. 田中真吾、六章四節「岩船郡内の城館の分布 — ①村上城、④猿沢城」、長谷川伸、七章一節「村のくらし」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
62. 前掲注 42、新潟県立公文書館所蔵『新潟県神社寺院仏堂明細帳』。寺伝によれば、長楽寺は天文十三年（1544）の創建で、開基檀越は領主の本庄房長（繁長の父）、開山は耕雲寺十一世の三心伊心である。
63. 池亨、七章四節「瀬波郡絵図にみる村上 — 流通機能の村上町への集中」『村上市史・通史編 1』。前掲注 5、伊藤正義・旧稿。伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。伊藤は、別稿 1 で「頸城郡東絵図」の在町の分布と在町の新規町立て政策の分析から、上杉景勝・直江兼統権力は在村兵士を効率的に部隊編成することを目指したので、武士・兵士の城下町への集住と城下町の拡大を指向しなかったと指摘した。城下町への流通・交通の集中は豊臣系大名に共通の都市政策だが、上杉景勝・直江兼統権力が「豊臣のシェーマ」どおりの政策を実施していたとは限らない。文禄期の村上城下町の実態は、「豊臣のシェーマ」ではなく、「瀬波郡絵図」の正確な分析から導き出すべきである。
64. 高橋重右エ門、第二編第一章第一節「三 荒川保の地頭河村氏」、同第三節「南北朝の争乱」『関川村史』1992 年。
65. 長谷川伸、十章一節「上杉謙信政権下の本庄氏と色部氏 — 荒川保、色部領となる」『村上市史・通史編 1』。
66. 前掲注 27、中野豈任「祝儀・古書・呪符 — 中世村落の祈りと呪術 —」。前掲注 9、伊藤正義「福原報告へのコメント」。
67. 小村式、第三編第二章「第一節 村高と景観」『関川村史』1992 年。361 ページの表 31 より作成。51 八口村は、「瀬波郡絵図」は荒川の左岸・南岸に描いているが、正しくは右岸・北岸に位置するので②組の集計から除外した。中世までは荒川右岸から田代峠越えて出羽国小国領に至る街道が通っていた。荒川の発電所建設によって水没することになり、1962 年までに現在位置に移転した。高橋重右エ門、第四編第五章「集落の由来とその発展 — ハッロ」『関川村史』1992 年。前掲注 1、伊藤正義・旧稿「越後国『郡絵図』史料論 — 瀬波郡荒川の朱線領境と漁業権 —」1995 年。渡部徳太郎ほか、第二章第一節「五、越後古街道 2 金丸道」『小国の交通』、山形県小国町、1996 年。
68. 渡部徳太郎ほか、第三章第三節「四、越後街道の宿場とその周辺 13 玉川から沼への道」「14 沼から関までのみち」『小国の交通』、1996 年。前掲注 46、武田広昭、第三編第四章第三節「米沢街道の交通と番所」『関川村史』。
69. 前掲注 6、小村式、第二章「検地」第一節「戦国・豊臣時代」「一 太閤検地」『幕藩制成立史の基礎的研究 — 越後国を中心として —』吉川弘文館、1983 年。
70. 前掲注 46、武田広昭、「米沢街道の交通と番所」『関川村史』。
71. 本間陽一、第四章第六節「交通と制度」『朝日村史』朝日村教育委員会、1980 年。
72. 赤羽正春、八章六節「交通路」『村上市史通史編 2・近世』村上市、1999 年。
73. 菅瀬亮司・富井秀正、第三編第四章第一節「海運の盛況と廻船の活躍」『中条町史・通史編』2004 年。
74. 前掲注 11、田島光男「一 文禄三年色部氏差出」○編年文書三十所収、『越後国人領主色部氏年中行事』。
75. 前掲注 11、田島光男『色部氏年中行事』152 ～ 54 ページ。「午前様へまいり申され候かたゞ、御さかづきならびに御ひきいで物下され候おぼえの日記の事……一、同廿文 よこはまのさかなもちニ 一、同廿文 五日市のさかなもち 一、同廿文 しを屋のさかな持ニ 一、同廿文 もゝさきのさかな持ニ…」。
76. 前掲注 37、矢田俊文、第 2 編第四節三「瀬波郡絵図と中条」『中条町史・通史編』2004 年。
77. 前掲注 11、田島光男「一 文禄三年色部氏差出」○編年文書三十所収、『越後国人領主色部氏年中行事』191 ページ。
78. 三面村は塩木流しによって塩谷村から塩を得ていた。前掲注 56、渡辺茂蔵編著『羽越国境の山村 奥三面』、田口洋美『新編越後三面山人記 — マタギの自然観に習う —』、宮本常一『塩の道』。
79. 前掲注 37、長谷川成一「序論 鷹をめぐる北の大名論」『近世国家と東北大名』吉川弘文館、1998 年。
80. 前掲注 59、西沢睦郎「色部氏と奥羽仕置」『福大史学』第 46・47 号合併号、1989 年。
81. 前掲注 37、矢田俊文、第 2 編第四節三「瀬波郡絵図と中条」『中条町史・通史編』2004 年。伊藤正義、「『越後色部氏年中行事』と正月吉書の遺文 — 石瀬青龍寺から届く三カ条吉書 —」『鶴見大学紀要』第 54 号第 4 部人文・社会・自然科学編、2017 年。
82. 建長七年十月二十四日「関東下知状案」「古案記録草案所収色部文書」『鎌倉遺文』7911 号。高橋重右エ門、第二編第一章第二節「荘保境争論」『関川村史』1992 年。
83. 正応五年七月十八日「和田茂長代・河村秀通等代連署和与状」「三浦和田文書」『鎌倉遺文』1791 号。前掲注 82、高橋重右エ門「荘保境争論」。
84. 高橋一樹、四章一節「中世成立期の岩船郡域」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
85. 石井進、「解説 中世の山・川の民と境界」、井上鋭夫『山の民・川の民 — 日本中世の生活と信仰 —』平凡社選書、1981 年。
86. 「永禄六年北国下り遣足帳」永禄六年（1563）六月二十八日条、山本光正・小島道裕〔資料紹介〕『国立歴史民俗博物館研究報告』第 39 集、1994 年。前掲注 81、伊藤正義「『越後色部氏年中行事』と正月吉書の遺文 — 石瀬青龍寺から届く三カ条吉書 —」。前掲注 11、田島光男「一 文禄三年色部氏差出」○編年文書三十所収、『色部氏年中行事』191 ページ、新潟県神林村教育委員会、1972 年。
87. 前掲注 85、井上鋭夫『山の民・川の民 — 日本中世の生活と

- 信仰一』。
88. 前掲注 16、『新潟県の地名』平凡社。1074 ページの「貝附村」の項参照。
89. 前掲注 46、武田広昭、第三編第四章第三節「米沢街道の交通と番所」『関川村史』1992 年。
90. 高橋重右エ門、第二編第一章第一節「五 関川郷の地頭たち」、第二章第一節「二 関川郷の城郭」『関川村史』。
91. 前掲注 68、渡部徳太郎ほか、第三章第三節「四、越後街道の宿場とその周辺 15 関川郷『小国の交通』、1996 年。473 ページの図 70「上関城付近図」参照。
92. 前掲注 90、高橋重右エ門、第二編第一章第一節「五 関川郷の地頭たち」『関川村史』。
93. 前掲注 47、「文禄三年定納員数目録」『新潟県史別編第 3・人物編』1987 年。矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』古志書院、2008 年。以下、「員数目録」と略記。
94. 富井秀正、第三編第二章第一節「村高と景観」『関川村史』、361 ページの表 31「関川郷主要村高の変遷」参照。
95. 前掲注 65、長谷川伸、十章一節「上杉謙信政権下の本庄氏と色部氏 ― 荒川保、色部領となる」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
96. 前掲 90、高橋重右エ門、第二編第一章第一節「五 関川郷の地頭たち」、第三節「南北朝の争乱」、第五節「戦国時代」『関川村史』。
97. 前掲 90、高橋重右エ門、第二編第一章第三節「南北朝の争乱」、第二章第一節「二 関川郷の城郭」『関川村史』。
98. 前掲注 6、伊東多三郎「越後上杉氏領国研究の二史料 ― 慶長二年越後国絵図と文禄三年定納員数目録 ―」『近世史の研究』第五冊、吉川弘文館、1984 年。前掲注 7、小村式、第二編第二章「検地」第一節「戦国・豊臣大名時代」『幕藩制成立史の基礎的研究 ― 越後国を中心として ―』吉川弘文館、1983 年。前掲注 47、「文禄三年定納員数目録」『新潟県史別編第 3・人物編』1987 年。矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』古志書院、2008 年。
99. 前掲注 11、田島光男編著「拾遺色部氏文書・記録」[九] 編年文書（米沢市立図書館所蔵）、「一 文禄三年色部氏差出」○編年文書三十所収、『色部氏年中行事』187～193 ページ、新潟県神林村教育委員会、1972 年。「文禄三年 色部家老臣連署知行定納覚」『新潟県史研究』第十九号、4457 号、1986 年。
100. 前掲注 7、小村式、第二編第二章「検地」第一節「戦国・豊臣大名時代」『幕藩制成立史の基礎的研究 ― 越後国を中心として ―』吉川弘文館、1983 年。前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I ― 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 ―」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。小稿の一章 2 節「本納高・縄ノ高の定説批判」参照。
101. 前掲注 7、小村式、第二編第二章「検地」第一節「戦国・豊臣大名時代」『幕藩制成立史の基礎的研究 ― 越後国を中心として ―』吉川弘文館、1983 年。163 ページの第 13 表、166 ページの第 14・15 表参照。小稿の表 16 は、前記の小村氏作成の表をもとに一部改変して作成した。
102. 前掲注 11、田島光男編著『越後国人領主色部氏年中行事』新潟県神林村教育委員会、1972 年。巻末の「一 色部氏略系図」、「六 平姓牛屋氏家系」参照。
103. 前掲注 49、長谷川伸、第六章二節「守護と国人 色部氏の所領と伝領」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
104. 前掲注 11、田島光男編著『越後国人領主色部氏年中行事』巻末の「八 庶子色部氏家系」参照。
105. 前掲注 65、長谷川伸、十章二節「本庄繁長の乱」『村上市史・通史編 1』。
106. 渡邊三省、第二章「八 繁長の降伏と謙信の死」『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』村上郷土研究グループ、1987 年、60～63 ページ。
107. 「上杉家軍役帳」『新潟県史資料編 3・中世 1』「上杉文書」840 号、1982 年。池 亨、第四章第一節「二 謙信登場」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年、表 29「上杉家臣団と軍役」参照。広井 造、第三部第四章第二節「上杉謙信と家臣」『上越市史・通史編 2・中世』、2004 年、376 ページの表 205「上杉家臣団と軍役」参照。「天正三年上杉軍役帳」に本庄繁長は記載されていない。繁長は謙信軍団の中核から除外されていた。前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』159 ページの註④。
108. 長谷川伸「『色部氏年中行事』の基礎的考察 ― 戦国期在地年中行事伝写の意義 ―」『日本史研究』394 号、1991 年。「戦国期在地年中行事の再生産構造 ― 近世における『色部氏年中行事』の成立と伝来 ―」『法政史学』43 号、1991 年。
109. 前掲注 11、田島光男編著『越後国人領主色部氏年中行事』、38・135 ページ。前掲注 106、渡邊三省、第七章「色部氏と総領制の展開」「四 総領制の終わり」『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』1987 年。
110. 前掲注 11、田島光男編著『越後国人領主色部氏年中行事』。色部右衛門尉殿は 38・135 ページ、浦右京亮と飯岡刑部大輔殿は 35・134 ページ、牛屋右近丞殿は 43・136 ページに年始の御礼出仕の記事が見える。
111. 前掲注 11、田島光男編著『越後国人領主色部氏年中行事』。石瀬青龍寺から届けられる正月吉書始めの記事は 28～32 ページ、133 ページ参照。前掲注 27、中野豊任『祝儀・吉書・呪符 ― 中世村落の祈りと呪術 ―』1988 年。前掲 81、伊藤正義、『越後色部氏年中行事』と正月吉書の遺文 ― 石瀬青龍寺から届く三ヵ条吉書 ―『鶴見大学紀要』第 54 号第 4 部人文・社会・自然科学編、2017 年。
112. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』「一 文禄三年色部氏差出」○編年文書三十所収、『越後国人領主色部氏年中行事』187～193 ページ。

112. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』「一、同七日、牛屋衆おうばんの事、ならびに連座の次第の事」、43・44、136 ページ。
113. 前掲注 6、伊東多三郎、「越後上杉氏領国研究の二史料 — 慶長二年越後国絵図と文禄三年定納員数目録 —」『近世史の研究』第五冊、吉川弘文館、1984 年。大谷内礼子、第四章第二節「三 直江執政と景勝政権」『新潟県史通史編 2・中世』1987 年。「文禄三年定納員数目録」『新潟県史別編第 3・人物編』1987 年。矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』古志書院、2008 年。
114. 前掲注 5、伊藤正義、「九章 軍事演習用絵図としての頸城郡四箇郷絵図—1. 郡絵図の割書と文禄三年定納員数目録」、別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。
115. 前掲注 106、渡邊三省、第三章「景勝時代の両氏」『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』1987 年。片桐昭彦、第三部第六章第二節「新発田・佐渡攻めと出羽庄内政策 — 新発田攻め、出羽庄内政策と本庄繁長」『上越市史・通史編 2・中世』、2004 年。長谷川伸、十章「上杉氏と本庄氏」一節「上杉謙信政権下の本庄氏と色部氏」、二節「本庄繁長の乱」、池 亨、同三節「御館の乱」、四節「新発田重家の乱」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
116. 金子 達、第四章第二節「二 景勝上洛 — 出羽仕置」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。前掲注 59、西沢睦郎「色部氏と奥羽仕置」『福大史学』第 46・47 号合併号、1989 年。大場喜代司、十一章四節「本庄氏の改易と再興 — 上杉氏の出羽国検地、庄内地方の一揆、上杉氏、庄内を掌握」『村上市史・通史編 1』。
117. 天正二十年八月十四日「色部長真覚書案」「反町栄作氏所蔵文書・雑文書」1697 号、『新潟県史資料編第 4 編 中世二 文書編 II』、1983 年。前掲注 106、渡邊三省、八章「八 長真の晩年とその死」『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』1987 年。前掲注 116、金子 達、第四章第二節「二 景勝上洛 — 朝鮮出兵」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。片桐昭彦、第三部第六章第三節「景勝と秀吉 — 朝鮮出兵」、第五節「景勝と直江兼統 — 兼統の一族と姻戚関係」『上越市史・通史編 2・中世』、2004 年。
118. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』古志書院、2008 年、9 ページ。
119. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』82・83 ページ。
120. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。
121. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』43・136 ページ。
122. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』32・133 ページ。
123. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』35・134 ページ。
124. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』36・134 ページ。
125. 前掲注 7、小村式、第二編第二章「検地」第一節「戦国・豊臣大名時代」『幕藩制成立史の基礎的研究 — 越後国を中心として —』吉川弘文館、1983 年。
126. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。小稿の一章 2 節「本納高・縄ノ高の定説批判」参照。
127. 前掲注 90、高橋重右エ門、第二編第一章第一節「五 関川郷の地頭たち」『関川村史』1992 年。
128. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」、「越後分限帳」『上杉氏分限帳』古志書院、2008 年。「越後分限帳」は成立年代、作者は不明。慶長二年（1597）十月十七日に改訂された「定納員数目録」を基調に、「文禄三年定納員数目録」の石高の記事を参考にして作成された／矢田俊文「翻刻付記」『上杉氏分限帳』。
129. 前掲注 8、大谷内礼子、第四章第三節「一 城将と城領」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。
130. 金子 達、第四章第二節「一 御館の乱」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。図 34 は 636 ページの図 153 の一部を改変して引用。
131. 長谷川伸・池亨、十章「上杉氏と本庄氏」、大場喜代司、十一章「本庄氏の庄内制圧」、前掲注 41、池 亨、十二章一節「支配者の交代」『村上市史・通史編 1』、1999 年。
132. 前掲注 8、大谷内礼子、第四章第三節「一 城将と城領」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。図 35 は 685 ページの図 164 の一部を引用。
133. 前掲注 115、池 亨、同三節「御館の乱」『村上市史・通史編 1』。
134. 前掲注 116、大場喜代司、十一章四節「本庄氏の改易と再興」『村上市史・通史編 1』。
135. 伊藤正義、「破城と破却の風景 — 越後国「郡絵図」と中世城郭 —」藤木久志・伊藤正義編『城破りの考古学』吉川弘文館、2001 年。同論文では、前掲注 130 の金子達氏の所説に従って、「御館の乱」に伴う本庄繁長と鮎川盛長の対立抗争は、「一族間での内紛として内済処理された」と推定したが、前掲注 49 で長谷川伸氏が指摘した、「鮎川氏は会津に土着した三浦葦名氏の一族で、新宮氏の支流」とする所説に従い、「内済処理説」を取り消す。鮎川盛長は、繁長の要求で大葉沢城から笹平城へ退去したとする解釈は正しいと考えている。
136. 金子 達、第四章第二節「二 景勝上洛」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。前掲注
137. 前掲注 116、大場喜代司、十一章四節「本庄氏の改易と再興」『村上市史・通史編 1』。
138. 前掲注 135、伊藤正義「破城と破却の風景 — 越後国「郡絵図」と中世城郭 —」、2001 年、「城跡の風景から」『遺跡と景観』東北中世考古学叢書 3、東北中世考古学会、高志書院、2003 年。

139. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。
140. 前掲注 49、長谷川伸、第六章三節「国人領の世界」『村上市史・通史編 1』。
141. 前掲注 61、田中真吾、六章四節「岩船郡内の城館の分布 — ①村上城、④狼沢城」『村上市史・通史編 1』。
142. 前掲注 37、長谷川成一「序論 鷹をめぐる北の大名論」『近世国家と東北大名』吉川弘文館、1998 年。
143. 前掲注 51、藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会、1985 年。小林清治『豊臣政権と奥羽仕置』吉川弘文館、2003 年。
144. 綿坂豊昭『戦国武将と連歌師』平凡社新書、2014 年。
145. 前掲注 116、大場喜代司、十一章「本庄氏の庄内制覇」『村上市史・通史編 1』。
146. 前掲注 141、小林清治『豊臣政権と奥羽仕置』、2003 年。前掲注 51、長谷川伸、第十一章二節「最上氏の庄内進出と本庄氏の反撃」、池 享、同三節「庄内地方上杉領となる」『村上市史・通史編 1』。
147. 前掲注 116、大場喜代司、十一章「本庄氏の庄内制覇」『村上市史・通史編 1』。
148. 前掲注 136、金子 達、第四章第二節「二 景勝上洛」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。
149. 前掲注 116、大場喜代司、十一章第四節「本庄氏の改易と再興」『村上市史・通史編 1』。
150. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「四、会津御在城分限帳」『上杉氏分限帳』192 ページ。
151. 前掲注 106、渡邊三省、『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』1987 年、92 ～ 98 ページ。『村上市史』資料編 1 古代中世編 346「管窺武鑑」、1993 年。前掲注 116、大場喜代司、十一章二節「最上氏の庄内進出と本庄氏の反撃」（『村上市史・通史編 1』）の 469 ページの表に「十五里合戦の本庄勢」がまとめて揭示されている。表 22・23 は大場喜代司作成の「十五里合戦の本庄勢」より作成。
152. 前掲注 116、大場喜代司、十一章二節「最上氏の庄内進出と本庄氏の反撃」『村上市史・通史編 1』1999 年。
153. 前掲注 11、田島光男編著『色部氏年中行事』32・133 ページ。
154. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』82・83 ページ。
155. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』84・85 ページ。
156. 前掲注 8、大谷内礼子、第四章第三節「一 城将と城領」『新潟県史・通史編 2・中世』、1987 年。前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』89 ページ。
157. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「四、会津御在城分限帳」『上杉氏分限帳』194 ページ。
158. 前掲注 106、渡邊三省、第三章「五 十五里原の大勝」『本庄氏と色部氏（鎌倉地頭の五百年）』1987 年。『村上市史』資料編 1 古代中世編 346「管窺武鑑」、1993 年。前掲注 116、大場喜代司、十一章二節「最上氏の庄内進出と本庄氏の反撃」（『村上市史・通史編 1』）。
159. 前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』89・90 ページ。
160. 前掲注 36『新潟県の地名』平凡社、1363 ページ「行政区画変遷・石高一覧」参照。
161. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。
162. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」『鶴見大学紀要』第 55 号、2018 年 3 月。
163. 前掲注 5、伊藤正義・別稿 1「越後国頸城郡絵図の基礎的研究 I — 戦国期頸城郡の村町と軍役の負担体系 —」。
164. 前掲注 117「色部氏文書」『新潟県史資料編第 4 編 中世二 文書編 II』。前掲注 11、田島光男「色部氏年中行事」、「文禄三年色部氏差出」『越後国人領主 色部氏史料集』。前掲注 47、矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦「文禄三年定納員数目録」『上杉氏分限帳』。前掲注 3、『越後国瀬波郡絵図』。